HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ダム建設と立ち退き移転に揺るがされた地域社会と人の営み : 岡山県鏡野町苫田ダムを事例として
Author(s)	頃安, 悠希
Citation	北海道大学. 修士(文学)
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91458
Type	theses (master)
File Information	2023koroyasu.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

令和 5 年度修士論文

ダム建設と立ち退き移転に揺るがされた地域社会と人の営み

岡山県鏡野町苫田ダムを事例として

文学院　人間科学専攻　地域科学研究室

指導教員：宮内　泰介

学生番号：13223094

氏名：頃安　悠希

目次

1 背景と目的 3

1-1 苫田（とまた） ダムと奥津（おくつ）町苫田地区について 3
1-2 日本の戦後の開発事業・ダム事業について 12
1-3 開発問題およびダム建設の影響に関する先行研究 14
1-4 本研究の目的 18
1-5 調査概要 19

2 在りし日の奥津町苫田地区 30

2-1 自然豊かな故郷の風景と風習 30
2-2 生業 40
2-3 豊かな人間関係 43
2-4 生活環境について 46
2-5 小括 48

3 苫田ダム闘争にゆれる奥津町のくらし 50

3-1 苫田ダム闘争をめぐる出来事の整理 50
3-1-1 ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政 50
3-1-2 ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年 56
3-2 多様な立場から捉える苫田ダム阻止闘争 63
3-2-1 反対派住民の立場と思い 63
3-2-2 ダム容認派の立場と論理 70
3-2-3 多様な視点から捉える苫田ダム闘争の記憶 76
3-2-4 開発主体との対話や移転受け入れに伴う摩擦 79
3-2-5 小括 82

4 多様な移転受け入れの過程と移転後の暮らし 84

4-1 移転の決断と移転の日 84
4-2 移転先の決定と生活再建に向けた準備 91

4-3 それぞれにとっての移転 **97**
4-4 移転後の住民の暮らしと地域社会 **101**
4-5 小括 **119**

5 移転住民・地域社会の現在と苫田ダムに対する思い **.....121**

5-1 年月の経過による変化 **121**
5-2 いまだ問い直される苫田ダム **123**
5-3 小括 **128**

6 苫田ダムをめぐる社会的ストーリーから読み取れるもの**.....129**

6-1 語りから浮かび上がった「苫田ダム闘争」の構図 **129**
6-2 苫田ダム闘争をめぐる社会的ストーリーが持つ意味：様々な葛藤と苦痛の経験 **132**
6-3 生活再建についての社会的ストーリーが持つ意味：移転がもたらした影響と人々のたくましさ、重層的なイメージと思い・考えの関係性 **134**
6-4 住民視点からとらえた苫田ダムの歴史が示唆するもの：経済的合理性では説明できない「故郷」 **136**

7 結論 **.....139**

参考文献 **.....141**

1　背景と目的

1-1　苫田（とまた）ダムと奥津（おくつ）町苫田地区について

本研究では、ダム開発に翻弄された奥津町の多様な社会的ストーリーを描き出し、苫田ダムが地域住民と地域社会にもたらした影響について明らかにするともに、私たちにとっての故郷や人の営み、公共事業がもたらす地域社会への影響などについて考えていく。

まず、苫田ダムに関して基本的な情報を整理する。苫田ダムは、岡山県北部の鏡野（かがみの）町（計画当初は苫田村だったが、1959（昭和 34）年の合併で奥津町、2005（平成 17）年の合併で鏡野町になった）にある国土交通省直轄管理の多目的ダムである。当初、岡山県が 1953（昭和 28）年 12 月に吉井川総合開発調査に着手し、翌 1954（昭和 29）年に建設省（当時）が引き継いだ。その後、1975（昭和 47）年度から実施計画調査に、1981（昭和 56）年度から建設事業に着手し、2005（平成 17）年 3 月に調査着手以来 57 年の歳月と総事業費 2,040 億円をかけて完成した。この建設のために多数の住民が移転を余儀なくされ、470 戸、504 世帯が水没することになった。

続いて、このダムの設置目的や機能について詳しくみていきたい。苫田ダムは、治水及び上水・工業用水・発電などの利水を目的として建設されたものとされている。苫田ダムの総貯水容量は約 8,410 万㎥で、県内で 3 番目の規模だ。治水については、150 年に 1 回の確率で発生する大洪水を念頭に計画され、ダム時点で毎秒 2,700 ㎥の約 8 割（2,150 ㎥）を貯水可能である。治水計画の背景にはかつての洪水被害がある。国交省ホームページでは、吉井川流域における 1945（昭和 20）年、1963（昭和 38）年、1972（昭和 47）年、1979（昭和 54）年、1990（平成 2）年、1998（平成 10）年の洪水被害が挙げられている。また、利水面においては、上水道用水として 1 日に 40 万㎥（100 万人分）の上水道用水を送ることができ、工業用水として日量 8,500 ㎥を供給できる。さらに、灌漑用水としてダム下流約 243ha の農地に用水を補給可能とされている。背景として、1967（昭和 42）年、1978（昭和 53）年、1982（昭和 57）年、1994（平成 6）年に起こった渇水が挙げらている。さらに発電にも対応しており、水圧を利用して最大 4,600kw の発電が可能である[1]。

なお、「多目的」とされる苫田ダムの運用目的は、計画段階において紆余曲折があった。農林省が主管だった当初の段階では農業用水の確保が主な目的としておかれていたが、建設省への移管後は吉井川水系地域の工業化のための工業用水確保や、生活用水のための上水道の水源確保、あるいは利水上の必要性が重視されるようになった。森滝（1989）は建設目的の妥当性について議論し、ダムによって供給する吉井川広域水道の必要性と、苫田ダムの治水効果について疑問を投げかけている。

先述のとおり苫田ダムの総貯水量は 8410 万トンであるが、現在すべてが活用されていな

[1] 「国土交通省ホームページ　苫田ダムへようこそ」
https://www.cgr.mlit.go.jp/tomata/aboutdam2.html　閲覧日：2024 年 1 月 4 日より

いことが課題になっている。1984（昭和 59）年に想定された需要に基づき、上水道用水として 1 日に最大 40 万トンを供給する能力があったが、その後水需要は減退した[2]。

また、苫田ダムにおいては、ダムの規模に対して水没戸数が非常に多く、計画から竣工までに要した期間が長い点が特徴的だといえる。

表 1　立ち退き移転が焦点化されたダムの着手年/竣工年、水没戸数の比較

	苫田ダム	早明浦（さめうら）ダム	八ッ場（やんば）ダム	徳山ダム	大滝ダム	湯田（ゆだ）ダム	小河内（おごうち）ダム
都道府県	岡山県	高知県	群馬県	岐阜県	奈良県	岩手県	東京都
着手年/竣工年	1972/2004	1963/1975	1967/2019	1971/2008	1962/2012	1953/1964	1936/1957
水没戸数	470 戸	385 戸	340 戸	466 戸	399 戸	405 戸	（945 世帯・6000 人）

続けて、苫田ダムが建設された地元社会について、概要をまとめたい。苫田ダムが建設された中心地区は、計画判明当時「苫田村」という自治体だった[3]。人口約 6000 人の村[4]で、岡山三大河川である吉井川の上流部に位置し、岡山県美作（みまさか）地域と鳥取県倉吉（くらよし）方面を結ぶ国道が通っていた。農業や林業が主な産業で、平穏で自給自足的な農山村の暮らしがあった。

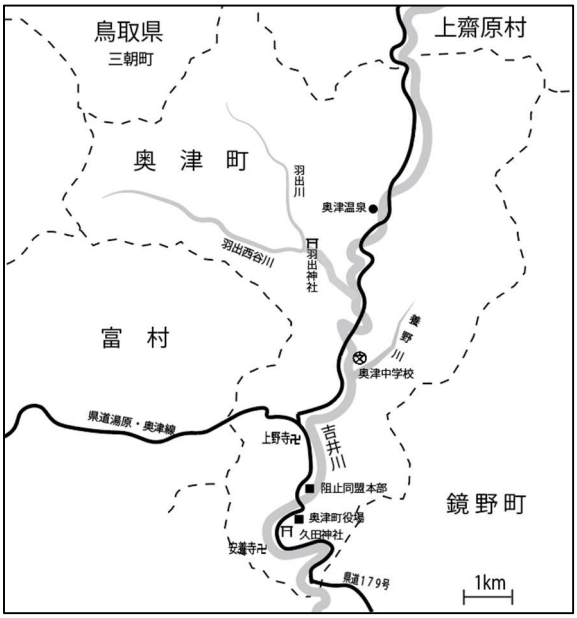

図 1　奥津町全域（筆者作成）

[2] 2023 年 6 月 14 日夜放映　NHK 総合　ニュース　「“苫田ダム建設反対”住民たちの運動資料が鏡野町へ」より
[3] 以下、「苫田地区」と表記する。
[4] 1959（昭和 34）年 2 月 1 日時点の人口（奥津町, 2005）

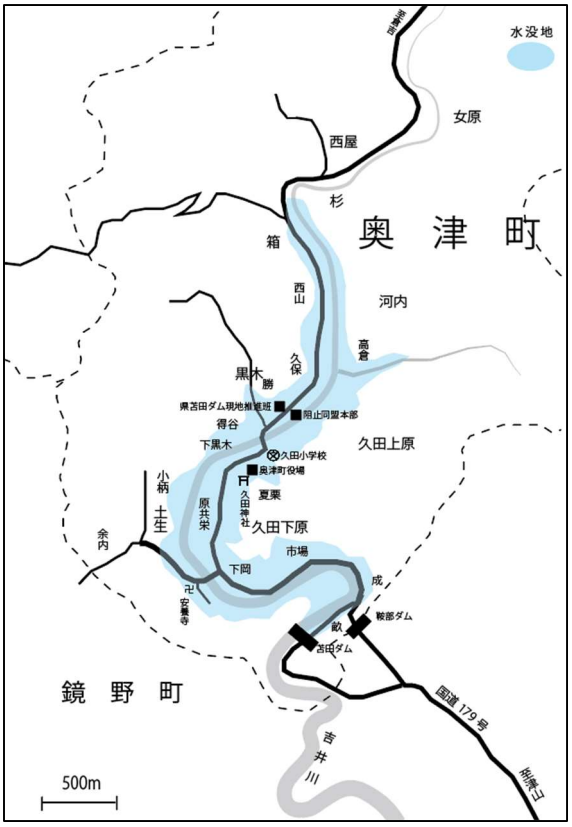

図 2　奥津町苫田地区と水没地区（筆者作成）

1957（昭和 32）年に山陽新聞の報道によってダム建設計画が明らかになると、地元では緊急村議会が招集され、「ダム計画は地元の人権と福祉を無視した暴挙であり、絶対承服できない」と満場一致で反対が決議された。また、久田小学校では地元住民らが村民大会を開き、総意で「ダム絶対反対」を決議。その場で苫田ダム建設阻止期成同盟会[5]を結成した。

計画判明から間もない 1959（昭和 34）年 4 月 1 日には苫田・羽出・奥津の三村が合併し、現在の奥津町が発足した。まもなく、議会において奥津町是「苫田ダム阻止」の方針と苫田ダム阻止特別委員会条例が決議された。

反対する町に対し、1972（昭和 47）年に県知事に選出された長野士郎氏（社会党推薦）は、ダム建設を積極的に推し進め、ダムに反対する奥津町に対して公共事業の補助金を停止するなどの強硬策を打ち出してきた[6]。対する地元住民は、反対集会で「ダム反対」の意

[5] 以下、「阻止同盟」と表記する。
[6] 県政のこうした対応について、地元社会や運動家からは「行政圧迫」との批判が向けられてきた。森滝（1989）は、「3 割自治といわれるような一般的状況のもと町の事業の多くが国や県の補助事業として行われているなかで、こういった事業の実施に必要は手続きをなかなかとろうとせず、ぎりぎりまでこれを延ばして町を困らせる、というやり方」と説明している。

思を共有し、吉井川流域での広報活動、抗議運動、立て看板の設置などで抵抗した。県や建設省の職員から住民への対話が繰り返されるなか、次第に住民の間にはダム移転を容認する「賛成派」（本稿では「容認派」と表現）の住民が現れた。

ダム反対・容認をめぐって町内の分断が深まる中、町政も大きく混乱するようになった。1986（昭和 61）年～1989（平成元）年にかけては、ダム阻止派町長 3 人（岡田幹夫氏、坂手可甫氏、日笠大二氏）が相次いで辞任に追い込まれる事態となった。こうした状況の中、最終的には 1990（平成 2）年に当選した森元三郎町長が、ダム建設に対話の道を開くことを表明した。最終的には、1994（平成 6）年には容認派で当選した石田守町長によって「苫田ダム建設事業に係る基本協定」が締結され、ダム建設が着工を迎えることになった。

それから 10 年後、計画判明から 47 年目の 2004（平成 16）年に苫田ダムが完成。これとほぼ時を同じくして、2005（平成 17）年、奥津町・鏡野町・上齋原村・富村の合併により新鏡野町が誕生した。奥津町史は苫田ダムに始まり、苫田ダムに終わるといっても過言ではない。なお、反対運動や町政の混乱については、3 章で詳細に述べる。

表 2　ダム関係の主な出来事

年	出来事
1957（昭和 32）年	・　農林省及び岡山県で検討中の苫田ダム構想が山陽新聞で発表される。 ・　地元に強力な反対運動が起き、「苫田ダム建設阻止期成同盟会」が発足する[7]。
1958（昭和 33）年	・　県及び下流受益市町は、吉井川流域の総合開発の促進のため「吉井川流域総合開発促進期成会」を発足させる。
1959（昭和 34）年	・　苫田村、羽出村及び奥津村が合併し、奥津町になる。 ・　初代町長に日笠善一氏が就任する。 ・　奥津町は「苫田ダム阻止特別委員会条例」（いわゆる「阻止条例」）を制定する。
1962（昭和 37）年	・　4 月　建設省は、予備調査に着手する。
1963（昭和 38）年	・　二代目町長に伊丹哲男氏が就任する。
1965（昭和 40）年	・　建設省は、現地予備調査（ボーリング）を開始する。住民は調査を実力で阻止する。
1966（昭和 41）年	・　建設省は「吉井川水系工事実施基本計画」を決定する。
1967（昭和 42）年	・　建設省のダムサイト付近の調査を、阻止同盟が実力で阻止する。 ・　建設省は、ダムサイト付近について予備調査は行うが、実施調査を事実上行わないとする「吉井川総合開発事業苫田ダム調査協定書[8]」（いわゆる「42 協定」）を奥津町と締結し、予備調査を開始する。
1971（昭和 46）年	・　三代目町長に岸川忠雄氏が就任する。
1972（昭和 47）年	・　建設省は「吉井川総合開発調査事務所」を設置し、実施計画調査に着手する。 ・　苫田ダム阻止運動に批判的だった住民十数名が「苫田ダム解決協議会」を発足させる。. ・　長野士郎氏（社会党推薦）が岡山県知事に当選。
1973（昭和 48）年	・　建設省は、「吉井川水系工事実施基本計画」を改定する。
1974（昭和 49）年	・　長野知事が「苫田ダムは地元との話し合いを経て向こう 1 年位を目途に解決したい」とダム問題解決に意欲を見せる
1975（昭和 50）年	・　四代目町長に岡田幹夫氏が就任する。
1976（昭和 51）年	・　長野知事が再選を果たす。
1977（昭和 52）年	・　県は、奥津町に「吉井川総合開発連絡事務所」を設

[7] 初代委員長に牧野英一氏、二代目委員長に岸川忠雄氏、三代目委員長に山奥諌氏が就いた（奥津町, 2005）。

[8] 協定書の内容は、①昭和 42 年以降の予備調査実施について、町長として積極的な協力はできないが、地元住民が妨害することのないよう努力する。②地権局長は将来ダム建設に関する実地調査の必要あるときは、町長と事前に十分協議のうえ、町長の承諾なくしては調査を実施しない　となっている（奥津町, 2005）。

	置する。 ・ 下流受益市町は、「苫田ダム問題協力会」を発足させ、昭和 53 年度から移転先選定費（水没予定者に対して 1 世帯あたり 100 万円（無利子））の貸付などを開始する。
1978 年（昭和 53）年	・ 県は、津山地方振興局に苫田ダム対策班を設置する。
1979 年（昭和 54）年	・ 長野知事が初めて現地を訪れ、水没地区住民などと懇談する。 ・ 県は「苫田ダム対策本部」を設置する。 ・ 県及び下流受益市町は、「財団法人吉井川水源地域対策基金」を設立し、苫田ダム問題協力会は解散する。 ・ 「苫田ダム解決協議会」は「苫田ダム地権者協議会」に改組し、会長神田繁夫氏のもと発展的に改組し、会員 231 名に達する。
1980（昭和 55）年	・ 建設省は、吉井川総合開発事務所を「苫田ダム調査事務所」に改組する。 ・ 長野知事が三選を果たす。
1981（昭和 56）年	・ 賛成地権者団体「苫田ダム同志会[9]」が発足する。 ・ 建設省は、苫田ダム調査事務所を「苫田ダム工事事務所」に改組し、建設事業に着手する。 ・ 賛成地権者団体「苫田ダム対策研究会[10]」が発足する。 ・ 建設省は「苫田ダムの建設に関する基本計画」を公示する。 ・ 奥津町新庁舎建設計画が町議会で紛糾する。
1982（昭和 57）年	・ 鏡野町に賛成地権者団体「苫田ダム第二ダム地権者協議会」が発足する。 ・ 建設省は、水没予定地を河川予定地として指定公示する[11]。 ・ 苫田ダムが、水源地域対策特別措置法に基づく指定ダムに指定される。 ・ 県と地権者 3 団体が立ち入り検査に協定締結。岡田町長や阻止同盟は「四二協定に違反する」として遺憾の意を表明。 ・ 建設省が水没地区の物件調査を開始する。 ・ 建設省、県および鏡野町は、ダム建設に伴う鏡野町の地域整備について協議するため、「鏡野町地域整

[9] 「苫田ダム同志会」は、会長朝田数夫氏が久田下原畝（くたしものはらうね）地区の住民らで組織した。目的は会員を増強して補償交渉団体権を獲得するためとされる（奥津町, 2005）。

[10] 「苫田ダム対策研究会」は、会長石田守氏のもと発足時 15 名が参加した（奥津町, 2005）。

[11] 建設省が標高 234m以下の 330ha を河川予定地に指定し、区域内での家屋の建築や改築を制限した（奥津町, 2005）。

	備連絡協議会」を発足させる。 ・ 県及び下流受益市町は、「岡山県吉井川広域水道企業団」を設立する。 ・ 県が県議会土木委員会に「地域振興計画試案」を示す。 ・ 奥津庁舎の現庁舎改修が町議会で承認。改修工事が行われる。 ・ 57年度事業の承諾が出ない状況に、岡田町長が辞表を提出したが、後日撤回される。 ・ 県が異例の事業推進。公共事業を住民団体の要請で実施する方針をうちだす。 ・ 岡田幹夫町長と渡邊功副知事（県苫田ダム対策本部長）が首脳会談で覚書を交わす。
1983（昭和58）年	・ 建設省は個人別の土地及び物件の調書を作成し、230名に調査書を交付。 ・ 久田公民館、地権者協議会事務所、畝公会堂にて説明会を実施。統一地方選挙　岡田町長が推進派の青木信一氏（奥津町羽出）と牧野忠明氏（奥津町奥津川西）を破り、三選を果たす
1984（昭和59）年	・ 県及び下流受益市町が「岡山県吉井川広域水道企業団」を設立する。 ・ 長野知事が4選（このとき対立候補として、武田英夫氏が立候補）を果たす。 ・ 阻止同盟が「第27回絶対阻止総決起大会」を久田小学校行動で開催。600人全員が集合。「郷土防衛宣言」が発表される。
1985（昭和60）年	・ 建設省が「苫田ダムの建設に関する基本計画」を公示する。 ・ 県議連と推進派住民が初懇談。建設省がダム推進派3団体に「苫田ダム損失補償基準」を示す。（提示を受けたのは、苫田ダム地権者協議会231戸、苫田ダム対策協議会38戸、苫田ダム同志会30戸の、3団体合計299戸[12]） ・ 県は「苫田ダム周辺地域振興実施計画」を発表し、鏡野町に対し事業費の一部助成を開始する。
1986（昭和61）年	・ 岡田幹夫奥津町長が辞任する。五代目町長に坂手可甫氏が就任する。 ・ 建設省は地権者4団体と補償基準協定を締結する。県および財団法人吉井川水源地域対策基金は、これら地権者団体と生活再建対策費等協定を締結し、協

[12] この基準は土地の回収価格などを示したもので、双方の合意を得て、今後地権者ごとに用地改修交渉を始めるもので、まだ町内には苫田ダム建設阻止の住民団体や、町当局の反対があり注目されていた。同基準は土地の取得にかかわる補償、土地の取得により生ずる損失の補償など、土地価格、建物等の移転料、立竹木補償、営業補償など約30項目で、土地価格については地目ごと等級別に回収価格を求めたもので、一平方mあたりの平均価格は宅地3万7600円（1～4等級平均）、田1万1500円（1～6等級平均）、畑8500円（1～5等級平均）、山林1600円、墓地3万7600円となっている（奥津町史, 2005）。

	力感謝金の交付を開始する。 ・ 奥津町の振興事業等について協議・調整するため、「建設省・県・奥津町行政連絡協議会」が発足する。
1987（昭和 62）年	・ 県は、吉井川総合開発連絡事務所を「苫田ダム現地推進班事務所」に改組する。 ・ 津山市など 1 市 5 町ほか 38 団体は、「苫田ダム建設に伴う移転者生活再建協力会」を発足する。 ・ 賛成地権者団体「苫田ダム生活再建対策協議会」が発足する。 ・ 坂手可甫奥津町長が辞職する。六代目町長に反対派の日笠大二氏が就任する。
1988（昭和 63）年	・ 奥津町が「ダム対策室」を設置する。 ・ 賛成地権者団体の「苫田ダム地権者協議会」「苫田ダム同志会」および「苫田ダム対策研究会」が統合し、「苫田ダム生活再建委員会」となる。 ・ 吉井川広域水道企業団が第 1 期工事を開始する。
1989（平成元）年	・ 日笠大二奥津町長が辞任する。七代目町長に反対派の森元三郎氏が就任後に、「ダム絶対反対に固執するつもりはない」という旨を表明する。
1990（平成 2）年	・ 建設省、県および鏡野町は、鏡野町のダム周辺地域にかかわる振興計画を検討・調整するため「鏡野町苫田ダム周辺地域整備連絡協議会」を発足させる。 ・ 森元町長は、町議会全員協議会において、町内情勢を調整し、ダム問題解決に向けて努力する意向を表明する。 ・ 中国地方建設局長が初めて奥津町を訪問し、町長、阻止同盟代表と懇談する。 ・ 賛成地権者団体「苫田ダム水没者補償交渉対策会」が発足する。 ・ 苫田ダムに反対する団体が土地共有化運動を開始する。 ・ 建設省は「苫田ダムの建設に関する基本計画（第 2 回変更）」を公示する。 ・ 森元町長が町議会全員協議会において、苫田ダム建設を前提とした条件整備に入ることを表明する。33 年にわたるダム阻止からダム建設前提という新局面を迎える。
1991（平成 3）年	・ 長野知事が奥津町を訪問し、森元町長と会談する。 ・ 新たな地権者団体「苫田ダムを考える会」が発足する。 ・ 県は、奥津町に職員 3 名の派遣をはじめる。 ・ 奥津町は、苫田ダムの建設を前提とし、町独自で策定した奥津町地域総合振興計画案を建設省及び岡山県に提出する。 ・ 行政連絡協議会は、奥津町地域総合振興計画案の協議・調整を開始する。 ・ 建設省が、水没する小学校の立ち入り調査を開始す

	る。 ・ 苫田ダムに反対する団体が、第 5 回の土地共有化を実施する。
1992（平成 4）年	・ 岡山県吉井川広域水道企業団が、「岡山県広域水道企業団」に改組する。 ・ 県が県議会に協力感謝金を今後も交付したいと説明し、了承される。（平成 2 年度までの同意者にのみ交付するとしていた） ・ 「苫田ダムを考える会」が立ち入り調査に同意し、未同意地権者は 31 世帯になる。 ・ 建設省が町有財産の立ち入り調査に着手する。 ・ 行政連絡協議会は、奥津町地域総合振興計画・行政連絡協議会調整案（306 件、総額 1,370 億円）を取りまとめる。
1993（平成 5）年	・ 県議会において、奥津町地域総合振興計画・行政連絡協議会調整案が審議され、おおむね了解される。 ・ 県は国土庁に対し、水源地域整備計画案の事前協議を開始する。 ・ 岡山県広域水道企業団は、苫田ダムに係る暫定水利権による一部給水を開始する。 ・ 任期満了に伴う奥津町長選挙が行われ、ダム賛成派の石田守氏が八代目町長に就任。
1994（平成 6）年	・ 奥津町は、奥津町地域総合振興計画・行政調整案の長見直し案（303 件、総事業費 1.401 億円）を行政連絡協議会に提出する。 ・ 県下で渇水となり、吉井川流域では、7 月 19 日から 9 月 30 日まで取水制限が行われる。 ・ 行政連絡協議会が長見直し案について、県議会および下流受益市町が了解している 1,370 億円までの町政を行う。 ・ 奥津町長、町議会議長などは、知事に阻止条例及び 42 協定の処理を条件に、奥津町地域総合振興計画の追加を要請する。 ・ 建設省、岡山県、奥津町・鏡野町は、「苫田ダム建設事業に係る基本協定」の調印を行う。これに先立ち奥津町議会臨時会において、苫田ダム阻止特別条例を廃止する条例が議決される。 ・ 建設省は、ダム本体の実施設計のためのボーリング調査に着手する。
1995（平成 7）年	・ 阻止同盟会員のうち委員長を含む 14 名が、立ち入り調査に同意し、建設省及び県と損失補償基準協定を締結する。これにより、残る未同意地権者は 2 名となる。 ・ 建設省中国地方建設局は、大規模公共事業について総合評価を行うための「苫田ダム建設事業審議委員会」を設置する。 ・ 水源地域対策特別措置法に基づく水源地域の指定が公示される。

	・ 水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画が公示される。 ・ 建設省、県、奥津町・鏡野町及び㈶吉井川水源地域対策基金は、奥津町地域総合振興計画および鏡野町三地域整備計画の実施に関する協定を締結する。
1996（平成 8）年	・ 未同意地権者 1 名が同意し、残り 1 名になる。 ・ 岡山県知事に石井正弘氏が初当選する。
1997（平成 9）年	・ 任期満了に伴う奥津町長選挙が行われ、九代目町長に廣野源彰氏が就任する。 ・ 第一回奥津町ふれあい祭り。
1998（平成 10）年	・ 建設省が、ダム工事の前提となる仮排水路工事に着手する。 ・ 県は、行政改革により苫田ダム現地事務所を廃止し、津山地方振興局振興部内に苫田ダム地域振興班を設置するとともに、苫田ダム現地事務所を置く。 ・ 国道 179 号付け替え分の一部が開通する。
1999（平成 11）年	・ 苫田ダム本体工事着工。花美人の里オープン。
2000（平成 12）年	・ こぶし祭り・もみじ祭りが開催される。
2001（平成 13）年	・ 奥津ゴルフ倶楽部がオープンする。 ・ 十代目町長に武元啓志氏が就任する。
2002（平成 14）年	・ 堤体のコンクリート打設が完了する。
2003（平成 15）年	・ 全地権者の移転が完了する。 ・ 国道 179 号奥津渓バイパスが開通する。 ・ 11 代町長に光永始治氏が就任する。
2004（平成 16）年	・ ダム湖の名称が「奥津湖」に決定する。 ・ 道の駅「奥津温泉」がリニューアルオープンする。 ・ 苫田ダムの試験湛水が開始される。 ・ 富村・奥津町・上齋原村・鏡野町合併協定に調印する。 ・ 苫田ダム完成式が行われる。
2005（平成 17）年	・ 奥津町閉町記念式が行われる。 ・ 苫田ダム試験湛水で最高水位に到達する。

（出所）岡山県土木部河川開発課,1999,『苫田ダム関係資料集』および、奥津町, 2005『奥津町史』より筆者作成

1-2　日本の戦後の開発事業・ダム事業について

つづいて、日本の戦後の開発事業及び、ダム事業の変遷について整理し、苫田ダム計画が持ち上がった時代背景を述べておきたい。

戦後日本においては 1950（昭和 25）年に国土総合開発法[13]が制定され、大規模な水力発

[13] 同法は全国総合開発計画、地方総合開発計画、都道府県総合開発計画、特定地域総合開発計画の 4 本柱によって構成されていたが、管轄官庁間の主導権争いなどから計画が策定できず、現実に着手できたのは主要河川を中心とした特定地域総合開発計画だけだった（帯谷, 2004）。

電事業を中心とする河川開発が目指された。1950 年代は戦後復興のための灌漑ダム、発電ダム建設が特徴的だった。この頃、1962（昭和 37）年には全国総合開発計画が閣議決定され、「拠点開発方式」がとられた。すなわち、大都市以外の地域に大規模な開発拠点を設定し、さらにそのまわりに開発拠点を数珠状に設置し、連鎖反応的に経済発展させることを意図した。しかし結果的には拠点都市への弊害が目立ち、大気汚染や水質汚濁などが深刻な産業公害を引き起こしたうえ、産業連関や経済的結びつきが希薄だったため、整備投資に見合う成果がなかったとされる。

これに代わって 1969（昭和 44）年、新総合開発計画が策定され、地域分業の徹底によって国土を効率的に利用することを目指した。しかし、住民の反対や高度経済成長期の終焉も相まって、この計画は頓挫した。一連の開発政策の失敗の要因として、「開発主体の責任所在のあいまいさ」と「住民参加の欠如」があった。とりわけ後者については、意思決定過程で住民参加の機会が不十分であったため、住民は「先祖伝来の土地を守れ」などの運動スローガンのもと、土地所有権を「拒否権」として行使することによって開発主体に対抗した。

1960年代後半からの全国的な住民運動の高揚期と1970（昭和45）年の「公害国会」を経た後、政府は 1977（昭和 52）年に第三次全国総合開発計画を策定する。ここでは従来の産業開発一辺倒からの転換がはかられ、定住環境の重視や流域圏構想などが提示された。1980 年代後半には、大規模な交通ネットワーク網の整備に重点を置く第四次全国総合開発計画（1987 年）が策定され、「多軸型国土構造の形成」および「参加と連携」を掲げた第五次全国総合計画に至る。ダム建設をはじめとする河川開発は、第三次全総以降、国土開発計画から姿を消しているが、治水と利水が各種開発政策を下支えしてきた。

1960 年代以降、全総によって都市部への人口と資本の集中に拍車がかかると、河川開発は「電源開発」から、下流部の洪水制御（治水）と都市用水の開発（利水）に重点が移行している。1964（昭和 39）年には明治期以来の旧河川法を改定し、「治水」と「利水」を政策の主要な柱とする河川法が制定された（帯谷, 2004）。1960 年代以降には都市拡大による水道用水や工業用水のための利水ダムが必要とされ、1980 年代以降には水害多発が問題視される中、洪水調節機能をもつ治水ダムの必要性が強調されるようになった（浜本, 2014）。

ダムの適地としては、多くの住民を抱える農山村の集落が選ばれることもあり、先祖代々土地に根付いてきた地域住民に大規模な立ち退き移転を迫った。住民は墳墓の地を離れることを強いられることになるだけではなく、ダムの受け入れをめぐる地域内の意見対立や紛争に巻き込まれ、人生を揺るがされた。さらに、行政による高額な補償金が、自給自足の暮らしを営んできた人々の暮らしを一変させ、移転後にわたって住民の暮らしに影響を及ぼした。行政による「大金でほほをひっぱたくような」切り崩し策は、地方自治を揺るがすものだった。住民の生活を大きく変えるダム建設に対しては、各地で数多くの反対運動が展開された。1960 年以降、多目的ダム建設の計画数が増える一方で、根強い地域

住民の反対運動に直面し、長期間にわたって事業が膠着状態にあった事例も多い。とくに1980 年代後半以降は、公共事業の在り方全般が社会的争点と化し、その結果、計画の見直しや中止に至る事業も見られるようになった（帯谷, 2004）。

このように、戦後日本の各種開発計画を下支えするものとして、全国各地でダムは計画されてきたが、建設地の地域社会に様々な影響を及ぼしてきた。こうした社会的影響について、は環境社会学の分野において議論されてきている。次節では、環境社会学の分野における開発問題研究および、ダム建設の影響に関する研究についてまとめたい。

1-3　開発問題およびダム建設の影響に関する先行研究

1960年代から1980年代にかけては、高度経済成長期の大規模開発がもたらす社会的影響についての議論が行われた。各種開発事業は、建設過程・建設後の運用過程において様々な影響をもたらす。環境社会学分野においては、その発生メカニズムや問題構造の理解が大きな課題となった。空港や新幹線の周辺地域における騒音公害についての研究などがこれにあたる。他方で、事業の計画決定段階から、事業計画の受け入れをめぐって、地域社会では様々な利害対立や紛争が生じる。受益圏・受苦圏論は、こうした利害対立や紛争に目を向けた議論である。受益圏・受苦圏論においては、ある欲求（機能要件）の充足と別の欲求（機能要件）不充足とが同一主体によって共有されるか否か、受益圏と受苦圏が地域的に重なっているか分離しているかによって環境問題の解決可能性が異なることが指摘された（舩橋, 1988）。とくにダム建設事業の場合には、受益圏と受苦圏が空間的に離れており、「上流部＝農山村＝受苦圏」と「下流部＝都市＝受益圏」の対立構図があるとした（奥田, 1980）。これに対して梶田（1988）は立ち退き移転者が移転に伴う補償金によって大きな利益を得ている点に着目した。すなわち、立ち退き移転者はマクロレベルでは受苦圏に位置するとしながらも、ミクロレベルにおいて「疑似受益圏」の側面があると指摘している。さらに浜本（2001）は従来の研究の課題として、ダム建設の利益と犠牲を経済的側面からのみ捉える傾向が強く、精神的側面が捨象されがちである点を指摘した。さらに浜本（2001）は、ダム建設が生活基盤の喪失、職業・人間関係・ライフスタイルの大幅変更に伴う社会移動であると述べている。

この受益や受苦は、外部から客観的に観察が可能なものだけではなく、当事者の主観性に帰属するものも存在している。長期間にわたって事業が着工されず、計画段階にとどまっていたような地域コンフリクトを分析していく際には、新たな視点や枠組みが必要である。帯谷（2004）は、宮城県気仙沼市の新月ダムを対象に、主要なアクターのキーパーソンに焦点をあて、住民の多様なとらえ方や認識を、それぞれの利害連関や価値関心に関連付けている。

新月ダムにおいては計画判明当初、住民は強い反発・行政に対する不信感と不満のもとに結集し、反対同盟を結成したが、下流地域から離れた空間的・社会的距離のために孤立

を深めていった。こうした実情を踏まえて「先祖伝来の土地を守れ」という生活・財産防衛的だった当初の主張が、地域外部に通じる論理へと変化していく。専門家や研究者と連携しつつ、ダムサイトの地質、水質悪化の観点などから計画の問題点を指摘し、運動の主張としていった（帯谷, 2004）。こうした流れは苫田ダムの運動の展開過程も重なる部分が大きい[14]。

さらに帯谷（2004）は、市当局の対応について、衰退する地域産業や人口流出を背景に「ダム待望論」があるなか、地権者の「説得」を試みることが「賢明な選択」だったと説明する。県によって策定されたダム計画に対し、市においては協議会を設置して治水・利水策を検討したが、実質的には独自にほかの選択肢を設定する余地はなく、住民組織と行政の間に「公論形成の場」が設けられることもほとんどなかった。苫田ダムにおいては地元自治体奥津町が「ダム反対」の立場をとっているものの、計画主体の建設省と、その計画を支持し地元自治体・地域住民の「説得」を試みる県という構図（計画主体の建設省―問答無用で計画を推し進める県）で捉えると、新月ダムの構図（建設主体の県―問答無用で計画を推し進める市）に重なる。

また、当初は反対で一貫していた地域住民の間に、時間の経過とともに「ダム建設の推進」を掲げ、ダム建設による地域振興を志向する流れが生まれる。反対同盟に加入しない地権者を中心に「対策協議会」「地権者会」を結成し、行政との協力関係を強化する。こうした住民は、「ダムによって生活に大きな影響を受けない人たち」が多いとされ、農業に向かない土地を持つ人が多い傾向があった。すなわち、住民の間に新たな受益認識を有する住民が顕在化していく過程があったといえる。

反対運動の内部でも次第に離脱者が顕在化する。計画が長期化し、水没予定地への公共投資が抑制される中で、過疎化の進行や上下水道など の社会資本整備の遅れが住民に強く意識される。農林業が盛んだった同地域では、世代交代が進み職業形態が変容するなかで、ダム計画に対する考え方を変える人も現れる。反対運動は、当初生活防衛を主眼に始まったものであるため、皮肉にも、ライフチャンスの維持・増大をめぐって、住民の対立を生み出す結果となる。こうした過程も苫田ダムに通ずるものといえる。

浜本（2001）は、ダムによる重層的な被害過程をとらえるうえで、被害構造論によるアプローチを提唱している。被害構造論は飯島伸子が、労働災害（三井三池炭鉱の炭塵爆発）、薬害（スモン）、公害（熊本水俣病）の事例研究に基づき考案したモデルで、被害発生の社会的メカニズムをとらえている。被害構造は被害レベルと被害度からなるとしている。被害レベルとは、生命・健康レベル、生活レベル、人格レベル、地域環境・地域社会レベルの 4 つのレベルを指し、被害がドミノ倒しのように起こる現象を説明する。被害度は、それぞれの被害の深刻度合いを指し、これらはさまざまな社会的要因によって大きく影響を受けるとした。浜本（2001）は、ダム事業の社会的影響を論じるにあたって被害構造論を応用し、問題局面ごとの被害過程を説明した。

---

[14] 6 章 1 節　語りから浮かび上がる「苫田ダム闘争」の構図でも述べる。

徳山ダム移転住民の被害構造についての浜本の研究（2015）では、時期区分を移転前、移転後生活再建期、移転後ダム見直し論の展開期と整理した。さらに、それぞれの特徴として移転前では「地域内の人間関係悪化・地域社会の荒廃・将来の不安」、生活再建期では「生活基盤確立への模索・新コミュニティへの適応」、そしてダム見直し論の展開期では「移転後生活の落ち着き、町内情勢変化への戸惑い」を挙げた。それぞれで発生した問題については、移転前において「地域内対立（地域問題）、生活設計への影響（生活問題）」、生活再建期において「再就職問題（経済問題）、家庭内の不和・離婚（家族問題）」、そしてダム見直し論の展開期において「移転理由の揺らぎ（アイデンティ問題）」を挙げている。

また、移転住民の被害の特徴を、その多くが健康上あるいは経済的な被害ではなく、精神的被害であることを見出した。なお、ダム事業においては、被害のレベルが必ずしも生命・健康レベルから始まるわけではないことに留意が必要である。

さらに浜本（2015）は、戦後日本におけるダム事業をモデル化する作業を行っている。ダム事業の被影響者にもたらされる犠牲や苦痛を念頭におき、ダム事業を①予定地の局面、②生活再建の局面、③水源地域活性化の局面、④事業見直しの局面、⑤事業中止の局面の5 つの局面に分類した。それぞれの影響について、①地域内の人間関係悪化・対立、畑・森林・住宅・公共施設など地域社会の荒廃、将来の不安/生活設計への影響、②生活基盤確立への模索/再就職、新コミュニティへの適応（生活不適応・故郷喪失感）、再移転/残存地利用、③施設およびイベント運営、新たな時代環境への対応、高齢化と世代交代、④是非論争への疎外感、移転理由の揺らぎ、⑤慰謝料要求と行政不信、人間関係・社会関係修復、地域再生を挙げている。本研究においても、ここまでに上げた浜本の視点を念頭に置きながら考察を行う。

表 3　徳山ダム移転住民における被害構造（浜本, 2015）

時期区分		特　徴	発生した問題
移転前（1957-84 年）		地域内の人間関係悪化 地域社会の荒廃 将来の不安	地域内対立（地域問題） 生活設計への影響（生活問題）
移転後	生活再建期 （1984-95 年）	生活基盤確立への模索 新コミュニティへの適応	再就職問題（経済問題） 家庭内の不和・離婚（家族問題） 生活不適応・故郷喪失感（健康問題）
	ダム見直し論の展開期 （1995-2000 年）	移転後生活の落ち着き 時代情勢変化への戸惑い	移転理由の揺らぎ （アイデンティティ問題）

表 4　戦後日本におけるダム事業の社会的影響モデル（浜本, 2015）

	-1974 年	1974-95 年	1995 年-
①予定地の局面	地域内の人間関係悪化・対立 畑・森林・住宅・公共施設など地域社会の荒廃 将来の不安／生活設計への影響		
②生活再建の局面	生活基盤確立への模索／再就職 新コミュニティへの適応（生活不適応・故郷喪失感） 再移転／残存地利用		
③水源地域活性化の局面		施設およびイベント運営 新たな時代環境への対応 高齢化と世代交代	
④事業見直しの局面			是非論争への疎外感 移転理由の揺らぎ
⑤事業中止の局面			慰謝料要求と行政不信 人間関係・社会関係修復 地域再生

また、本研究では研究手法においても浜本の手法を参考にしている。浜本（2014）は御母衣ダムに関する一連の研究で、文献資料に基づいた社会的ストーリーの通史、地域住民 600 名を対象とする質問紙調査、すなわち「文献資料」と「数値」（量的データ）に基づくアプローチを行ったうえで、当時をリアルタイムに知る当事者の「語り」（質的データ）を分析対象とした調査を行っている。「語り」というデータについて、「語り手が語っている内容は個人的なものであり、当時の住民や移住者たちの平均像を映し出しているとはいえない」という“代表性の問題”があるとしつつ、リアリティに迫るための優れた手法として採用したとする。ここでいうリアリティとは、客観的事実を捉えるということを必ずしも意味せず、むしろ狙いとして一連の歴史を経験した個人の主観的意味世界を深く掘り

下げることで得られるリアリティを指している。すなわち、それぞれの「語り」は主観的で個人的であるが、それゆえに歴史の各断面を示すものであると考え、それぞれの立場で経験した複数のストーリーをつなぎ合わせることで、歴史を立体的にとらえることを試みた。この作業によって描き出したものを、本研究においては「社会的ストーリー」と呼びたい。ダムをめぐる多様な社会的ストーリーを掘り起こすうえで、①そもそも、どのような暮らしをしていた人々のところにダム計画がやってきたのか。②ダム事業がいかなる影響を地域社会にもたらしたのか、関係者の家族や人生にどのような意味をもたらしたのか。③移転した人々はどのような経緯で移住先を決め、その後の生活再建の状況はどのようなものだったのか。④半世紀以上が経過した現在、地域の当事者がこれら一連の出来事をどのように認識しているのか。の 4 点を分析の視点に置いている。

1-4　本研究の目的

本研究では、ダム開発に翻弄された奥津町の多様な社会的ストーリーを描き出し、苫田ダムが地域住民と地域社会にもたらした影響について明らかにするともに、私たちにとっての故郷や人の営み、公共事業がもたらす影響などについて考えることを目的とする。

事例として岡山県鏡野町の苫田ダムを選んだのは、全国に建設されたダムの中でもとくに問題が長期化し、水没戸数が多数に及んだ事例であること、地元社会において歴史の継承の必要性が高まっていることからだ。ダム建設においては、被害構造論に明らかなように、経済、自然環境、公共政策など様々な観点からその影響を分析できるが、本研究においてはそれらを地域住民の視点から総合的にとらえる。インタビュー調査によって得られた当事者の視点から、苫田ダムをめぐる多様な社会的ストーリーを描き出したい。

本研究では、以下の 4 つのテーマを議論していく。①そもそも、どのような暮らしをしていた人々のところにダム計画がやってきたのか。②ダム事業がいかなる影響を地域社会にもたらしたのか、関係者の家族や人生にどのような意味をもたらしたのか。③移転した人々はどのような経緯で移住先を決め、その後の生活再建の状況はどのようなものだったのか。④現在、地域の当事者がこれら一連の出来事をどのように認識しているのか。①については第 2 章で、②については第 3 章で、③については第 4 章で、④については第 5 章で論じる。

さらに 6 章においては、5 章までの議論をふまえ、苫田ダムをめぐる社会的ストーリーから読み解けることを考えたい。

1-5　調査概要

本研究ではまず、奥津町・鏡野町の郷土史、苫田ダム建設及び反対運動に関する文献や新聞、当時の配布物などを閲覧したうえで、移転住民および関係者へのインタビューを実施した。前章で述べた通り、浜本（2004）の手法にのっとり、当事者の「語り」を中心としつつ、各種文献資料を参考にしながら「苫田ダム問題」を捉える。ダムをめぐる多様な社会的ストーリーを掘り起こすことを目指すうえで、①そもそも、どのような暮らしをしていた人々のところにダム計画がやってきたのか。②ダム事業がいかなる影響を地域社会にもたらしたのか、関係者の家族や人生にどのような意味をもたらしたのか。③移転した人々はどのような経緯で移住先を決め、その後の生活再建の状況はどのようなものだったのか。④現在、地域の当事者がこれら一連の出来事をどのように認識しているのか　の 4 点を議論の観点におく。

インタビューは半構造化インタビューの形式をとった。聞き取りにあたっては、最大限語り手の自由な語りを尊重し、ダムに関係する/しないにとらわれず、自由に語ってもらうようにした。なお、インタビューで得られた語りについて、客観的事実よりも、当事者の認識を重視している。語られる記憶には正確ではないことも含まれることは留意しておかねばならない。こうした聞き取りの手法は、浜本（2014）を大いに参考にしている。

インタビュー調査にあたっては、「質問リスト」と「自分史記入表」を製作し、あらかじめ協力者に配布した。自分史記入表においては、ダムに関連する年表に沿う形で自分や家族の出来事を事前に記入してもらい、あらかじめ思い出していただいた。

インタビューの結果を踏まえて、分析の観点を設定した。移転前～移転期においては、主体間（移転者、町行政、町議、地域の名士、運動家）の関係性、運動の発展過程、地域振興、住民の人間関係、故郷への愛着、移転に際する葛藤などに注目した。また、移転後においては、生活再建の実態、奥津町アイデンティティ、湖岸に残る空間などについて注目して考察を行った。

考察の過程においては、インタビューで聞き取った内容に加えて、町史や文献、新聞、当時の運動の過程で配られた配布資料、行政の広報誌なども参照しつつ、当時の状況の理解に努めた。

続けて、インタビューに協力いただいた住民および関係者のプロフィールを挙げる。インタビューには 40 人の方に協力いただいた。

なお、住民の語りを記述するにあたりその世代を「当事者世代」「二世世代」に区分した。ここでいう当事者世代とは、いわゆる「苫田ダム闘争」を当事者として経験している、あるいは移転の意思決定に本人やその配偶者が主体としてかかわった人々のことを指す。一方で、親世代がそれらの当事者にあたり、本人は深くかかわっていないという住民は二世世代としている。すなわち、生年によって厳密に区分しているわけではない。

協力者の選定にあたり、幅広い世代・立場・属性の住民から話を聞くよう心がけたが、

男性への聞き取りの割合が多くなっている。背景には、男性中心である神社の総代を中心にインタビューを依頼したことや、奥津町に生まれ育った女性が町外で結婚することが多く、当事者としての関与が少ないことがある。

表 5　インタビュー回答者の一覧（五十音順）　※匿名の 5 名は含まない

	名前	属性	性別	生年	世代	移転前の居住地（水没地出身者のみ）	現在の居住地（移転者のみ）	インタビュー日時
1	朝田信修	元住民※1	男性	1948	当事者世代	久田下原（くたしものはら）		2023 年 4 月 19 日
2	朝田守	元住民※2	男性	1963	二世世代	久田下原	鏡野町	2023 年 4 月 20 日
3	生駒恵子	元住民※3	女性	1950	二世世代	黒木（くろぎ）	津山市	2023 年 12 月 28 日
4	井上陽悦	周辺住民※4	男性	1971	二世世代	箱		2023 年 9 月 10 日
5	大山隆歳	周辺住民※5	男性	1933	当事者世代	河内（こうち）		2023 年 9 月 10 日
6	大山富敏	移転者	男性	1954	当事者世代	河内	鏡野町	2023 年 10 月 28 日
7	大山由起子	移転者	女性	1963	当事者世代	河内	鏡野町	2023 年 11 月 5 日
8	大山吉貴	移転者	男性	1992	二世世代	河内	鏡野町	2023 年 11 月 5 日
9	奥利喜夫	移転者	男性	1944	当事者世代	久田下原	鏡野町	2023 年 4 月 20 日
10	日下隆春	関係者※6	男性	1973	二世世代			2023 年 9 月 7 日
11	古林勇二	元住民※7	男性	1944	二世世代			2023 年 10 月 26 日
12	駒牧映子	移転者	女性	1951	当事者世代	河内	津山市	2023 年 4 月 18 日
13	駒牧康弘	移転者	男性	1943	当事者世代	河内	津山市	2023 年 4 月 12 日
14	正躰徳治	移転者	男性	1963	二世世代	河内	鏡野町	2022 年 8 月 27 日
15	瀬尾五男	移転者	男性	1948	当事者世代	黒木	津山市	2022 年 10 月 11 日
16	武田英夫	運動家	男性	1947	当事者世代			2023 年 11 月 23 日
17	武元賢治	移転者	男性	1962	二世世代	久田下原	鏡野町	2022 年 10 月 9 日
18	竹本利夫	移転者	男性	1956	当事者世代	久田下原	鏡野町	2023 年 4 月 17 日
19	武元義和	元住民※8	男性	1954	二世世代	久田下原	赤磐市	2023 年 10 月 31 日
20	中谷由圭利	移転者	女性	1988	二世世代	河内	鏡野町	2023 年 11 月 5 日
21	中山章	移転者	男性	1943	当事者世代	久田下原	鏡野町	2023 年 4 月 14 日
22	南條節夫	運動家※9	男性	1934	当事者世代			2023 年 4 月 19 日
23	野條泰圓	移転者	男性	1935	当事者世代	土生（はぶ）	鏡野町	2023 年 4 月 17 日
24	日笠正邦	元住民※10	男性	1946	二世世代	土生	岡山市	2023 年 10 月 4 日
25	日原道子	元住民※11	女性	1950	二世世代	黒木	津山市	2023 年 12 月 28 日
26	藤田照子	関係者※12	女性	1955				2023 年 10 月 26 日
27	藤田豊司	移転者	男性	1940	当事者世代	河内	鏡野町	2023 年 9 月 7 日
28	堀内一二三	元住民※13	女性	1951	当事者世代	河内	鏡野町	2023 年 9 月 9 日
29	牧野雄一	移転者	男性	1962	二世世代	黒木	鏡野町	2023 年 11 月 6 日
30	牧野欣功	移転者	男性	1933	当事者世代	久田上原（くたかみばら）	鏡野町	2022 年 10 月 9 日
31	政岡千恵美	元住民※14	女性	1954	二世世代	久田下原		2924 年 1 月 6 日
32	宮元貴広	移転者	男性	1979	二世世代	久田下原	鏡野町	2023 年 11 月 6 日
33	宮本博司	関係者※15	男性	1949				2023 年 4 月 15 日
34	山崎政弘	移転者	男性	1945	当事者世代	河内	鏡野町	2023 年 11 月 3 日
35	山本勲夫	元住民※16	男性	1935	当事者世代	久田下原	岡山市	2023 年 10 月 30 日

※1 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※2 父親がダム補償を待たずに移転した。
※3 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※4 ダム湖畔に居住するが立ち退き移転とならなかった
※5 ダム湖畔に居住するが立ち退き移転とならなかった
※6 元奥津町・現鏡野町職員。
※7 中学卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※8 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※9 苫田ダムに反対する市民団体のメンバー。
※10 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった
※11 短大卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※12 元苫田小学校職員。移転者が多い瀬戸団地の近隣住民。
※13 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※14 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。
※15 元苫田ダム工事事務所長。
※16 高校卒業以来、生家を離れて暮らす。生家が移転対象になった。

1. 朝田信修さん

1948（昭和 23）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校卒業後、大阪で放射線技師の勉強をしたのち、大阪の病院に就職した。その後、20 代後半で妻とともに岡山に戻り、津山市内の病院に勤務するようになった。この時に、旧鏡野町に一軒家を建てたため、苫田ダム闘争とはかかわりが深くなかった。平成 5 年ごろに両親が生家を立ち退いてからは、離れを建てて二世帯で暮らした。久田川漁協で 12 年間役員を務め、川の変化を見てきた。

2. 朝田守さん

1963（昭和 38）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。1972（昭和 47）年に父親が移転を決めた当時、本人はまだ小学生だった。父親は当時建設会社を経営しており、自宅は事務所を兼ねていた。本人は高校卒業後に一度大阪に出が、数年後地元に戻り、父親の会社で職人として働いた。

3. 生駒恵子さん

1950（昭和 25）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。津山市内の短大を卒業するまで苫田地区に暮らしていたが、学校などでダム反対運動について話題に挙がった経験はないという。生家では、母親がひとりで豆腐屋を営んでいた。結婚後、保育士として勤めながら津山市内で暮らしていていたところ、母親は移転時にその近くに家を建てた。母親の他界後、その家に暮らしている。

4. 井上陽悦さん

1971（昭和 46）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。父親が上野寺の住職の家系で、父親の跡を継いで住職をしている。生家と寺は高台にあるため、移転を逃れた。登下校の途中に阻止同盟ののぼりを目にし、父親に連れられて環境運動の集会に行くことがあった。中学卒業後は高野山の学校に通っていたため、その間地元との接点が薄かった。地元に戻って以降は奥津町役場に就職した。住職として移転した檀家の話を聞くことも多かった。

5. 大山隆歳さん

1933（昭和 8）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。小学校を卒業後、津山の旧制中学に通い、和歌山の大学に進学した。その後は大阪で就職したため、ダムで阻止闘争が激化した頃は地元を離れていた。60 歳で定年を迎えて故郷に戻った。大山隆歳さんが住むのは、河内地区付近で唯一移転を逃れた世帯であり、当時は母親が暮らしていた。旧奥津町に帰ってからは 30 年ほどになるが、20 年近く久田神社の総代長を務めるなど、地域の活動に積極的に携わってきた。

6. 大山富敏さん

1954（昭和 29）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。父は出稼ぎで都市に出るなか、母や祖父母とともに農作業に励む幼少期～青年期を過ごす。その後は奥津町職員となり、移転時には妻・4 人の子供と暮らしていた。1998（平成 10）年に本人の意思で移転を決断した際には、妻や子供からの反発を受けることもあった。

奥津町職員として勤務を始めて 10 年がたった頃に久田神社の宮司を依頼され、神職の資格を取って宮司となった。現在は、地元の神社 8 社の宮司をしている。

7. 大山由起子さん

1963（昭和 38）年、津山市生まれ。大山富敏さんと結婚をした 1986（昭和 61）年に奥津町に来た。ダム問題を抱える奥津に住むことに対して、当時周囲から心配されることもあった。奥津では地域の催しに積極的に参加し、人間関係を築いてきた。移転先でも PTA に長年関わり、幅広く交友関係を築いてきた。

8. 大山吉貴さん

1992（平成 4）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。1998（平成 10）年の移転時は 6 歳だったが、兄弟とともに家の周りを駆け回った記憶があるという。移転後は鏡野町の小中学校、津山市の高校に通った。現在は鏡野町のケーブルテレビ局で勤務している。

9. 奥利喜夫さん

1944 年（昭和 19 年）、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。移転当時の家族構成は、母と叔母、妻と 4 人の子供。農業高校を卒業後、農業試験場職員を経て、津山圏域消防組合で勤務した。消防勤務の傍ら、家で農作業をする暮らしをしていた。最終盤まで反対の立場を貫き、住民が減り、荒廃していく故郷の光景を目にしてきた。現在は円宗寺に移転し、息子夫婦とともに暮らす。移転先では地域の体育指導員として、地域の活動に積極的に参加してきた。

10. 日下隆春さん

1973（昭和 48）年、四国に生まれる。奈良の大学を卒業後、1995（平成 7）年ごろから、岡山県文化財センターの臨時職員として勤務していた。1996（平成 9）年から奥津町職員として勤務を始め、2004 年の合併によって鏡野町職員になった。鏡野町の生涯学習課として、鏡野町史の編纂に携わるなかで、苫田ダムに関する章を執筆。現在は社会教育全般に携わる傍ら、苫田ダム関連の資料保存も担当している。

11. 古林勇二さん

1944（昭和 19）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。農家の長男として育つ。高校進学を機に津山市の母の実家に下宿。岡山市の大学を卒業後、出版社（東京）、新聞社（岡山市）に 4 年勤務して岡山市内の高校教員に転身した。1978 年 4 月、津山市内の私立高校に移り、2005 年の定年退職まで英語教員だった。

長年奥津町を離れているため、ダム反対運動との関わりは深くなかった。農繁期には実家に帰り、古里の変化を見聞きした。1987（昭和 62）年 3 月 22 日、両親は古里を出た。移転日はは弟妹 4 人が集まって実家との別れを惜しんだ。父母は、次女の嫁ぎ先のそばに移転したが、やがて津山市内に再移住した。

12. 駒牧映子さん

1951（昭和 26）年、旧鏡野町出身で、旧奥津町に暮らし始めたのは夫駒牧康弘さんとの結婚以降である。旧奥津町での思い出には、子供を川で遊ばせたことや、近隣住民と会話をしたことなどがある。結婚後の暮らしがしばらくあったが、周辺の住民の移転が進んできたため、1996（平成 8）年ごろ津山市に移転した。現在は密教婦人会での活動を通して、水没地から移転した安養寺に深くかかわる。境内の清掃、夕涼み会、合同研修会などの活動に参加している。

13. 駒牧康弘さん

1943（昭和 18）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。20 代から 30 代にかけて東京で仕事をしていたが、30 代前半で地元に戻り、それ以来地元の会社で勤務した。父親が高齢になってからは阻止同盟の集会に参加し、青年部長も務めた。移転時は本人、妻、次男、次女の 4 人で住んでいた。1994（平成 6）年と比較的後期の移転で、知人の紹介で津山市に移転した。移転先は新興住宅地で新築も多く、現在部落の中では「古株のうち」になっている。

14. 正躰徳治さん

1963（昭和 38）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。高校卒業後に大阪の専門学校に通った後、実家に戻って地元の会社に就職した。その後は両親・妻とともに生家で暮らしたが、父親が移転を決断し、母の実家がある鏡野町に移転した。移転後の近所づきあいは自身が取り組んだ。現在は父親の跡を継ぎ、自営で運送業を営んでいる。

15. 瀬尾五男さん

1948（昭和 23）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。中学生の頃に計画が判明し、大人になってからは反対運動に参加していた。町役場に長年勤務し、町の「ダム対策室」で勤務したこともある。移転当時は、母親と本人、妻、息子

3 人で暮らしており、長男の高校受験をきっかけに移転をした。県南の移転も考えたが、故郷から近く、子供の通学に便利な久米町（現在の津山市）に移転した。奥津町の観光課にいた頃に和太鼓のグループを立ち上げ、自身も和太鼓に取り組んでいた。移転先でも和太鼓のグループを作ることになり、地域の祭りや諸々の催しで披露してきた。

16. 武田英夫さん

1947（昭和 22）年生まれ。出身も現在の居住地も岡山市の吉井川の畔。県議会議員として苫田ダムをライフワークとし、1991 年から 20 年間、県議会で論戦。「苫田ダムに反対する県民の会」の活動に深くかかわり、阻止同盟に参加する住民や、その他の運動組織と交友がある。奥津町がダム推進に転じた後も、ダム反対の立場で活動を続けた。近年は関連資料の収集に取り組み、2021（令和 3）年には収集した資料を鏡野町に寄贈した。2024（令和 6）年 6 月には、鏡野町で資料展示会を計画している。

17. 武元賢治さん

1962（昭和 37）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。生家にはかつて両親と本人の 3 人で暮らしていた。武元さんの父親は、務めていた地元の会社の社長が容認派に動いたのを契機に、移転を決断した。鏡野町瀬戸に造成された団地に移転し、移転後も同郷出身者が多い環境で暮らしてきた。父親は当初阻止同盟の集会に通っていたが、武元さん本人は当時学生だったため、参加したことがない。

18. 竹本利夫さん

1956（昭和 31）年、旧苫田村（奥津町、現・鏡野町）生まれ。父親が大工だったが、町内に十分な仕事が無く、出稼ぎに出ることもあった。高校卒業後、大阪の大学に進学し、大学卒業後は地元に帰って奥津町役場に就職した。町職員という立場から、本人は阻止同盟の会合に行くことはなかったが、父親が参加する姿が記憶に残っている。すでに保有していた土地に、1988（昭和 63）年ごろ移転した。奥津町職員として勤続していたが、2005（平成 17）年の市町村合併に伴い、鏡野町職員となった。

19. 武元義和さん

1954（昭和 29）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校卒業まで地元で過ごした。警察官に採用され、転勤を重ねる中、長年地元を離れて暮らした。刑事一課での勤務を経て退職し、30 歳で岡山の法律事務所に入った。法律事務所退職後は、経営のプロとしてさまざまな会社に関わり、ゴルフ場、ドイツの森、製紙工場建設などの立ち上げに携わった。現在も県内企業の顧問を務めている。武元さんの父親は地権者協議会の幹部だった。その父親は移転先として県南地域の山陽町（現

在の赤磐市）を選び、晩年は息子夫婦（＝義和さん夫婦）とともに暮らした。

20. 中谷由圭利さん

1988（昭和 63）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。小学 4 年生の頃に移転のことを父親の大山富敏さんから告げられ、移転に対して抵抗を感じたことを覚えている。移転後は鏡野町の小中学校、津山市の高校に通った。神職の免許を取って、地元で神職をしながら、鏡野町のケーブルテレビ局で勤務する。現在は鏡野町で、夫・息子・両親とともに暮らす。

21. 中山章さん

1943（昭和 18）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ、農家の三男で、幼少期は農作業や子守り、食事の準備などよく両親の手伝いをしていた。学校までの登下校の道すがら、山を探検してまわって遊んできた。中学 1 年生の頃にダムの話が判明し、学校の先生から「大人はやんや言よるけど、君たちは関係ないからしっかり勉強せい」と言われたという。学校を卒業後は大工になり、移転当時は両親と本人の 3 人で暮らしていた。1989 年（平成元年）、瀬戸団地に移転をした。建設省が土地を買い上げていく様子を見た父親が、移転を決断した。現在は瀬戸団地で一人暮らしをしており、老人会の役員をするなど、団地の自治に深くかかわっている。

22. 南條節夫さん

1934（昭和 9）年生まれ。奥津町の非水没地域（旧奥津村）、下斎原（しもさいばら）出身で、高校卒業後は県の林業試験場で講習を受け、県の農林事務所に就職した。奥津地域を担当し、奥津町内にある事務所で勤務した。1965（昭和 40）年に岡山の地区労働組合協議会の事務局を担当することになり、以来現在に至るまで岡山市に暮らす。この頃、知人の誘いがきっかけで、苫田ダム反対運動に関わるようになった。1988（昭和 63）年に元社会党議員の矢山有作氏とともに立ち上げた「ストップ・ザ・苫田ダムの会」に参加し、学習会やシンポジウムの開催に携わった。

23. 野條泰圓さん

1935（昭和 10）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。学校の事務員として働きながら、生家でもある安養寺の住職を務めてきた。安養寺は鏡野町に移転し、現在もかつての檀家との付き合いがある。移転住民の一人でありながら、住職として移転後の住民の生活再建の様子を見つめてきた。空海の名言法話をまとめた書籍の編纂や、本山布教師としての活動に尽力する。

24. 日笠正邦さん

1946（昭和 21）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校卒業後、大学進学で故郷を離れる。銀行に就職後は転勤で県内外を転々としていた。移転したのは 35 年前の 1988（昭和 63）年頃。移転当時は妻と子供三人とともに岡山市で暮らしていた。両親の生活が立ち行かなくなったため、岡山に二世帯住宅を建て、晩年は一緒に暮らした。日笠家は地元では名士の家系で、日笠正邦さんの祖父に当たる日笠善一氏は奥津町の初代町長で父、日笠大二氏は第六代町長である。

25. 日原道子さん

1950（昭和 25）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校卒業まで苫田地区に暮らしていたが、学校などでダム反対運動について話題に挙がった経験はないという。岡山に出て就職した数年後、結婚して津山市で暮らすようになった。市内の公立学校の給食調理員として働きながら子育てに奔走する中、長らく地元との接点は薄かった。テレビのニュースで反対運動について目にすることがあったという。

26. 藤田照子さん

1955（昭和 30）年、旧鏡野町（現・鏡野町）生まれ。苫田ダムで多くの移転者が家を建てた瀬戸団地の周辺に暮らしており、移転者との接点があった。小中学校の養護教諭をしており、水没地域にあった久田小学校に 1 年間勤務していたことがある。教諭退職後は鏡野町議会議員を務めるほか、鏡野町にて『まちかどほけんしつ「結」』（現在は「みんなの居場所『結』」に発展している）を立ち上げ、子育てを支援するボランティア活動に取り組んでいる。

27. 藤田豊司さん

1940（昭和 15）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。郵便局員として奥津町近辺で勤務していた。阻止同盟の活動に参加し、吉井川下流域の住民へのビラ配布や会合に参加してきた。地元の情勢がダム受け入れの方向に移ろうのを感じ、最終的には移転を決断し、鏡野町に移転した。反対派の親せきの反発にあい、一時的に出入り禁止になった。現在は退職し、次男と一緒に住む。グランドゴルフなど、地域のサークル活動に参加している。

28. 堀内一二三さん

1951（昭和 26）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。河内出身で現在も河内の山間に暮らす。森林関係の仕事をしていた父親は山が好きだったので、移転先に市街地を選ばず、河内を選んだ。本人は結婚後は津山市に暮らしていたため、長年離れて暮らしていたが、20 年ほど前に高齢になった両親と一緒に暮らし始めた。定年前は、勤務先である美作の病院まで 1 時間ほどかけて通っていた。両親が他界し

たため現在はひとりで暮らしているが、娘が頻繁に訪れている。現在は河内の住民の間で月に 1 回程度食事会をしている。

29. 牧野雄一さん

1962（昭和 37）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。生家は地元の造り酒屋、牧野酒造本店で、元県議会議員で阻止期成同盟初代委員長の牧野英一氏を祖父に持つ。小学生の頃、阻止同盟の集会に連れていかれたこともある。大学を卒業した後は地元に戻り、家業を手伝った。牧野酒造本店は 1736 年から続く老舗だったが、父親浩一氏の決心により、1990（平成 2）年に鏡野町に移転した。浩一氏の代で一時休業に至ったが、雄一さんが事業を立て直し、鏡野町で経営を続けている。

30. 牧野欣功さん

1933（昭和 8）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。移転前は地元の会社での勤務に加え、冬季は牧野酒造本店の蔵人として働いていた。自然豊かな環境や、先祖代々受け継がれた土地での生活を大切に思い、ダム反対に終盤までこだわった。農業組合長として基盤整備事業に携わり、部落内の意見集約にも尽力した。地元の将来について思案し、容認派と地域振興について意見をぶつけ合うこともあった。

31. 政岡千恵美さん

1954（昭和 29）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校卒業まで生家で暮らした。大阪で 1 年間働いた後、岡山市にある企業に就職し、3 年間を過ごした。その後 1 年間生家に戻ったが、その後結婚したため以来は津山市に住む。父親が元奥津町長の森元三郎氏で、ダムに反対する様子や、ダム容認への町政転換にあたり苦悩する様子を目にしてきた。

32. 光永始治さん

1949（昭和 24）年、奥津川西（苫田地区ではなく、上流の温泉街に近い）に生まれ、現在も暮らしている。勝間田農林高等学校を卒業後、岡山県畜産公社を経得て奥津町役場に採用。総務課主査、議会事務局長、産業建設課課長補佐、企画観光課長補佐、企画財政課長、農村整備課長、奥津町助役などを経て 2003（平成 15）年に奥津町長に就任。2005（平成 17）年の合併まで務めた。議会事務局長時代は長野知事からの行政圧迫を目の当たりにし、産業建設課・企画観光課時代には振興政策を主に担当してきた。

33. 宮本博司さん

1952（昭和 27）年京都生まれ。1991（平成 3）年から 1993（平成 5）年の間、苫田ダム工事事務所長を担当した。京都大学大学院修士課程土木工学専攻修了後、1978（昭和 53）年に旧建設省に入り、技官として河川行政一筋に取り組む。河川開発課課長補佐などを経て、苫田ダム、奈川川河口堰を担当した。その後、国交省近畿地方整備局淀川河川事務所長として淀川水系流域委員会を立ち上げる。同局河川部長をへて本省河川局防災課長を最後に 2006（平成 18）年に辞職した。現在は（株）樽徳商店会長で、木の樽づくりに取り組む。また新淀川水系流域委員会には一市民として応募し、委員長に就任した[15]。

34. 宮元貴広さん

1976（昭和 51）年、旧奥津町（現・鏡野町）生まれ。祖父・祖母・母親・妹と暮らしていたが、平成元年に移転した。当時中学 2 年生で、中 3 までは奥津中学校に通った。祖父母が懇意にしていた近隣住民とともに瀬戸団地に移転し、現在に至るまで暮らす。祖父母は他界し、現在は母親と妻、長女、長男とともに暮らす。

35. 山崎政弘さん

1945（昭和 20）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。高校を卒業後、大阪の専門学校に進学し、卒業後大阪の企業で働いた。父親が体調を崩したため、大阪から奥津に戻り、父の代から続く写真館を継いだ。父親は 50 歳で早くに亡くなり、1995（平成 7）年の移転時は、母と妻、二人の子供と暮らしていた。息子・娘は奥津町にある久田小学校・奥津中学校に通い、高校は津山に通った。娘が京都の短大を卒業後、写真館を手伝うようになり、2 人で営んできた。

36. 山本勲夫さん

1935（昭和 10）年、旧久田村（苫田村、奥津町から現・鏡野町）生まれ。20 代前半までは暮らす。高校卒業後百姓をしたのち、町の臨時職員となり、結婚した。その後警察に採用され、子供とともに奥津の家を出て、勝英、倉敷、岡山と転勤を重ねた。母親が亡くなり、父親が体調を崩したころから岡山から毎週末奥津に通う暮らしを続けていたが、父親が移転を決断し 1991（平成 3）年、岡山市に移転した。のちに父親が亡くなり、現在は息子夫婦とともに 2 世帯で暮らす。

---

[15] 「都市環境デザイン会議関西ブロック　2007 年度第 10 回都市環境デザインセミナー記録　まともに見ようよ～川と地域と私たちの生活」（2023/12/19 閲覧）http://web.kyoto-inet.or.jp/org/gakugei/judi/semina/s0710/index.htm

2　在りし日の奥津町苫田地区

2-1　自然豊かな故郷の風景と風習

本章では、郷土史など文献の記述や実施した聞き取りをもとに、在りし日の奥津町苫田地区と、人々の暮らしを描き出す。これらを描き出すにあたり、①自然環境と風習、②生業、③豊かな人間関係、④生活環境　の 4 つのテーマを設定した。

第一節では、豊かな自然とともに営まれる、かつての暮らしを描き出す。かつての苫田地区の風景は、吉井川をはじめ谷水が湧き出る、水にめぐまれた環境に特徴づけられる。和賀（2001）は水没地区周辺の風景について次のように記述している[16]。

> 地名のとおり水にめぐまれたところだ。清冽な山水画、辻々の速攻を奔るように流れる。奥津の非水没地区を歩けば、水と親しんできた人々の暮らしが垣間見える。側溝から水をひき、庭に泉池をもうけてコイを飼い、夏は軒下のコンクリートの水槽にアユをはなす家も多い。

聞き取りに応じてくれた移転者の牧野欣功（よしのり）さんは、当時の暮らしを思い出し、水が豊かな故郷の風景を語った。

> 私らの住んどった家は、水車でコメをついて、取りに行って自分の飯を白米にしょうった。こまい谷でもそれだけ水が流れてきょうった。カタンカタンと一日中ついてな。それだけ水が豊かだった[17]。

また、牧野さんは少年時代に川で遊んだ思い出を語った。放課後に手製の漁具や水鉄砲を携えて川に通ったようだ。ちょんかけというのは、竹竿の先に付けた釣り針に鮎をひっかける漁法のことで、移転者の話の中にしばしば登場する。「お金がないとそこで魚を取って・・・」という語りからは、川でとれる魚は貧しい暮らしを支える食料だったと分かる。

> もう学校から戻るとすぐ魚を捕りに行った。ちょゃんかけや、水鉄砲もした。やりみたなもので魚を捕りょうった。ゴムで引っ張って、ばあっと外して。（やりみたいな？）子供の頃は走り回りょうったからな、山や川を。魚がいっぱいおった。

---

[16] 和賀正樹は著書『ダムで沈む村を歩く』（はる書房）で、奥津町の水没地区でのフィールドワークをもとに、苫田地区の民族誌を記述している。苫田ダム闘争や移転の様子に加え、地域に根付いた生業や風習についても詳細に記述している。

[17] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

お金がないと魚を捕って、焼いて食った[18]。

移転者に「故郷について、思い出に残っていることは」と質問すると、川や山での遊びが語られることが多い。関連する記述や語りをいくつか挙げながら、人々の印象に残る遊びについて描き出していきたい。

和賀（2001）は、「狩猟は村の青年の『娯楽の王者』だった」と表現し、バエ投げ猟[19]、ヨブリ（夜振り）、ヤヅケ（矢付け、夜漬け）、柴づけ漁、地獄網、ススキ漁、トンボ釣りなどが挙げられている。中山章さんは、「春はハエ釣り、夏の鰻、秋の山芋、冬のコボツ」と、四季折々の遊びの様子について語っている。

> わしらが子供のころは、春はハエ釣り、夏は鰻、秋は山芋です。中学校時代の日課でした。冬はコボツという罠をしかけるんですよ。鳥を獲るんですね。罠を仕掛けて鳥を捕まえるんです。それを食べるんですけどね。捕るんが楽しいんで、10 ヶ所ぐらい山の中に仕掛けて、夜仕掛けて次の日に見に行くんですよ。楽しみでね、もう毎日毎晩、親父に怒られてもやってました。多いときは 10 匹くらいとれましたからね。我々の頃はみんな、小学校から中学校にかけてはほとんどやってることが一緒でした[20]。

朝田信修さんもまた、川での遊びについて語った。川遊びの際には、流されないよう 3 人以上で行くことや、救助用の縄や竹を置いておくことが言い聞かされていたようだ。

> もう昔じゃから、みんな遊び場は川しかない。水が冷たいから、絶対に泳ぎに行くのは昼からと、そして最低 3 人以上でいくよう言い聞かされてた。絶対、川岸に竹と縄を置いとく。（中略）その当時じゃけん、海水パンツとかじゃなく、みんな普通のパンツじゃけんな。下着で[21]。

さらに、山では木の実を採りに行った。「山には何でもある」と朝田さんは話す。少年たちは幼いころから山を駆け回り、とれる食べ物や楽しみ方を知り尽くしていた。

> 生(な)り物を採りに行ったりね。やっぱり食べるもんじゃな。昔僕らの少年時代いうたら、買って食べるような時代じゃなかったから。山行ったら食べるものがなんぼ

[18] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより
[19] 藁づとの中に小石を入れ、油紙や枯れ草をまいたもの。空中に投げたときの擦過音が鷹の羽音に似ている。そのため、外にいたウサギがあわてて巣穴にもどる。この習性を利用し、猟師は巣穴や蓑や雪でふさぎ、隙間から手を伸ばして捕獲する（和賀, 2001）。
[20] 2023 年 10 月 4 日　日笠正邦さんへの聞き取りより
[21] 2023 年 4 月 19 日　朝田信修さんへの聞き取りより

でもある。アケビとか山ナスビとか。それ食べたら甘ずっぽうてな。マツタケも探しに行ったな[22]。

瀬尾五男さんも、柿やいちじくをよく拾って食べていたといい「よく近所に叱られた」と笑う。苫田地区の少年たちはスーパーやコンビニで菓子を買うことはないが、各所に実った果実を見つけ、腹の足しにしていた。

中山章さんは、学校まで 4km あった道のりを毎日歩いて通っていた。登校用のバスが運行されるまで、久田下原の子供たちは遠い道のりを歩いて登校していた。道のりを短縮するために、林をかき分け峠を越えて通ったという。同じく久田下原出身の政岡千恵美さんも、峠を越えて学校に通ったと話している。当時奥津町に生まれ育った子供はみんな、山を駆け回って遊んでいた。

久田小学校まで 4km、歩いていったんじゃけどね。（中略）ガキ大将ばっかりが集まって山を越えていった。（中略）子供の時から、俺らの世代の子はみんな山を駆け回っていますから。どの山に、どの道に、いつごろいったら栗が取れるとか柿が取れるとか、そんなん全部、記憶していました[23]。

中山さんは、幼い頃に駆け回った山にある遺構に興味を持った。社会人になってからも「社会クラブ」と呼ばれるサークルの活動を通して山を歩き、山城の跡をみにいったという。

この山に城があったんです。ここにも城があってね、おたがい狼煙を挙げたらわかる位置に城があったんです。鏡野町ぶんにかずらさがり（下城跡）があって、ここに橋があって、橋の付け根にむかしの戦争で死んだ人の墓じゃいうて、石をいっぱい積んだとこがある。やっぱりお城の近くには、そういうんがあります。（中略）俺は社会クラブであちこち山歩きしてたんで[24]。

少年時代から川での遊びが好きで、社会人になってからも川に通っていた正躰徳治さんは、カスミ網やアユ釣りの思い出を語った。カスミ網漁の解禁日は、地元の「久田川漁協」で決められており、川べりに人が集まって飲み会をしていた。

わしらもカスミ漁はよう行きょったけどな。小さいときから、ヨボリというんだけど、夜中にガスランプとか懐中電灯とかを持っていった。ウナギとったり、アユ

[22] 2023 年 4 月 19 日　朝田信修さんへの聞き取りより
[23] 2023 年 4 月 14 日　中山章さんへの聞き取りより
[24] 2023 年 4 月 14 日　中山章さんへの聞き取りより

とったり。小さいときから親父についていって、大きくなってからはひとりでいってた。高校生の時には友達といったりな。河でアユを取ったりしよったけん、（それが出来なくなったのは）めちゃくちゃ寂しかったなあ。

1 日のカスミアミの解禁のときは、川でドンチャン騒ぎじゃ。会社の人とか、下請けの人とか呼んで、発電機で一晩中カラオケを歌ったりとか。川でとれたやつを串にさして焼いたりとかしたね[25]。

一方で、川の氾濫が印象に残る人もいるようだ。台風の際に川が増水して、川の岸がめくれるくらいの濁流になったという話や、川に架かっていた木造の橋が流されたのを見たという話が聞かれた。

川がすごい濁流が流れて、上の橋が壊れて流れてた。昔は木の橋じゃったけん。私が行った頃も木の橋で、一番奥の田んぼがある方の橋は、手すりも何もない木の橋。そこを通っていくのが私はきょうとうて（怖くて）な。結構川幅があるところを猫車を持って渡っていくのが怖かったな。大水で流れて、車が通るような橋ができたけどな。そうそう、流れたんじゃ。あれはすごかったな。

谷からの水なんかすごかった。谷水が流れるがな。そこの横なんか山にヒノキがはえとるわな。2 メーターぐらい削ってるからな。削り取ってるっていうことは、そこまで水位がきてるよね。大水と小石が流れて川がみなめくれとった[26]。

続けて、苫田地区における象徴的な場所にまつわる語りをいくつか挙げていく。まず取り上げるのが、水没地区の吉井川の蛍についての語りだ。

正躰徳治さんは蛍がきれいだった川の記憶を語った。正躰さんは少年時代から川で遊ぶのが好きで、社会人になってからも川に通っていたという。朝早くに川に行くと、一面明るくなるくらい蛍がいたのだという。川では、蛍の餌となるカワニナという貝が捕れた。祖母がよく川まで捕りに行き、みそ汁に入れて食べていたという。

アユカケの解禁日には、朝 4 時とかに川に行くんです。そうすると、蛍がばあーっと、あたり一面明るくなるくらいいたので、すごく綺麗だった。カワニナがいるから蛍がとれるんじゃけど、おばあちゃんがカワニナを捕りにいっていた、それを自分らが食べるんです。それがたくさんおるから蛍がいるし、浅いところで捕って、煮て食べたりしていた。味噌汁とかに入れて[27]。

---

[25] 2022 年 8 月 27 日　正躰徳治さんへの聞き取りより
[26] 匿名の元住民への聞き取りより（以下、注のない語りは同じ）
[27] 2022 年 8 月 27 日　正躰徳治さんへの聞き取りより

写真館を営む山崎政弘さんは、当時の蛍の撮影をしていた。その写真は今もリビングルームに飾ってある。写真には一面に蛍が広がる様子が鮮やかに映っている。蛍の撮影のために試行錯誤した思い出が語られた。

> 私は結構ホタルが好きで。うちの家から 5 分歩いたら吉井川だった。仕事柄カメラの大きいのを持っていくんだけど、蛍は映らなかったんですよ。なんで映らなかったかといえば、カメラの絞りが深いんですよね、そのときは高感度が（ISO）200 のフイルムしか出てなかったんです、絞りが 3.5 のレンズを持っていって、200 じゃ蛍が映らんのです。それから何年かしてから 800 が出たんです、800 が出てね、これからの 35 ミリの単体レンズ。明るいレンズで、もうそりゃあ 0.なんぼゆうのはあるけど、このレンズは高い。1 が肉眼のあれじゃから、1.4 ぐらいを買うたんです。そしたらね、全然明るさが違うんです。そしたら映ったったんですよ[28]。

写真 1　山崎政弘さんが撮影した蛍の写真

旧久田村出身の古林勇二さんは、水没した故郷への思い出を新聞の投書に綴ってきた。投書には、今はない故郷への思いがにじむ。

古林勇二さんが投書でつづったのは、吉井川に架かる谷合橋（たにあいばし）の記憶だ。小学生時代に橋

[28] 2023 年 11 月 3 日　山崎政弘さんへの聞き取りより

を渡ったことや、橋の北側にあるバス停から高校へ通った青春時代などを回想している。ダムの湖面橋を訪れ、かつての谷合橋や過ぎた日々を思い出す様子も描かれている。

ぼくの古里は岡山県北の苫田村だ。山間を蛇行する吉井川にコンクリート橋があった。「たにあいばし」だ。橋をはさんで、造り酒屋、魚屋、よろず屋、割りばし工場などがあり、谷合銀座と呼ばれた。

小学校にはこの橋を渡って通った。端からはアユ、ハエ、等が泳ぐのが見えた。図工の時間には橋の下で写生をした。水遊びや魚取りもできた。

橋の北詰に同じ名前のバス停があった。僕の人生の「始発停」だ。バスで津山市の高校に通った。津山まで20km、1時間かかった。今は車で20分だ。大学時代は春と秋の農繁期に農作業の手伝いに帰った。日曜日の夕方、終バスに乗る僕に母が、おむすびを持たせ、見送ってくれた。

村に突如、ダムの構想が発表された。1957年、中学1年生の秋だった。苫田村は合併して奥津町になった。ダム反対を町是に反対運動が展開されたが、時の流れとともに、人の心も情勢も変わり、約500戸が去った。苫田ダムは半世紀後の2005年、完成した。「たにあいばし」や実家をのみ込んで古里は湖底に消えた。

他の木造の橋は取り壊されたが、唯一「たにあいばし」はそのまま生き埋めになった。河鹿の鳴く吉井川や、小学校、中学校も沈んでしまった。町名も平成の大合併で鏡野町に変わり、両親も旅立った。

退職後、たびたび古里を訪ねる。「たにあいばし」のすぐ下手の湾曲部に湖面橋が架かっている。橋からたゆたう湖面をながめると「たにあいばし」や過ぎた日々が思い出されて、鼻がつんとする[29]。

[29] 古林勇二「天声新語ーたにあいばし」　『朝日新聞』　2007年（平成19）年2月19日.

写真 2　牧野酒造本店の手前に架かる谷合橋（2023 年 11 月　牧野酒造本店にて筆者撮影）

日笠善一元町長、日笠大二元町長の自宅に立っていたモクレンの木は、苫田地区の象徴的な存在だった。日笠大二氏の息子にあたる、日笠正邦さんはモクレンの木を懐かしむ。モクレンの木は移転後の久田神社に移植されていたが、近年枯れてしまった。

> 今でも一番懐かしいのが、小学校と、我が家に樹齢 270 年のモクレンがあったんですよ。ダムに賛成した年、本当にびっくりするくらい綺麗に咲いたんよ。結構霜にやられたりする年もあるんだけど。そのときは、「こんな綺麗に咲いたん久しぶりじゃないか」「最後じゃなあ」と言って、女房と見ました[30]。

[30] 2023 年 10 月 4 日　日笠正邦さんへの聞き取りより

写真 3　日笠大二さん宅の大モクレン（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）[31]

最後に、久田神社の話を取り上げたい。水没地区、久田上原（かみばら）にあった久田神社は、現在は河内地区の高台に移転されている。かつての久田神社は子供たちの遊び場で、祭りの日に非日常を味わうハレの空間だった。現在の祭りは総代を中心に粛々と行われているが、移転前の祭りには、屋台や見世物小屋が並び、地元住民がひしめき合う光景があった。

現在赤磐市在住の武元義和さんは、久田神社の前を通ると必ず立ち寄ると話す。少年時代に久田神社の周りで遊び、祭りに行った思い出が深く印象に残っているという。また、そうした場に人々が集まることで感じられる「結束感」があったと語る。

> 今みたいにゲームセンターもないし、やっぱり神社は子供の集まる場所なんです。かくれんぼしたり、山の中走りまわったり、秋の大祭とかね。
>
> 子供にとってはお祭りの楽しみはどえらい楽しみだった。人が集まって賑やかにやるのは、めったにないからね。人が集まって、「結束感」というたらおかしいかもだけど、そこでグリップしている何かがある。（中略）今でも神社の前を通ったら、お参りするんです。やっぱ通りすぎません。手合わせて、昔のことをちょっと思い出したり。今は神社の場所が（移転前とは）全然違うんですよ。だけど、いろんなことを思い出すよね。そういう意味があるところかなと思います[32]。

[31] 苫田ダム記念誌編纂委員会が 1997（平成 9）年に発行した記念誌『ふるさと（写真編）』より、画像をスキャンして引用（以下同様）。
[32] 2023 年 10 月 31 日　武元義和さんへの聞き取りより

写真 4　久田神社に集まる人々（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 5　久田神社の「納涼のど自慢」（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 6　久田神社の「お化け屋敷」（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 7 かつての久田神社（現在の久田神社社務所にかけられた掛け軸を筆者が撮影）

宗教的行動に関連するものだと、久田神社の大祭のほかに「お日待ち」のことが語られる。「お日待ち」は正月の行事で、近隣の住民が集まって宴会をし、豊作や家内安全を祈

願するというものだ。

和賀（2001）は、ある家のお日待ちについて「床の間に祝いの掛け軸を飾り、三宝にスルメ一束五枚、ダイコン、ニンジン、ミカン、リンゴを盛った」を書いている。

> お日待ちという行事があった。神主さんが正月 3 日にきて、全部お祓いしてくれるんですよ。私が子供の頃、3 日に朝から風呂に入って、神主さんにお払いを受ける。そういう風習もあったんですよね。全ての家かどうかは分らないけど、結構している家があったと思います[33]。

ここまで、奥津町苫田地区における、地元住民にとって象徴的・印象的な場所や風景について描き出してきた。多くの住民が、生まれ育った故郷の自然豊かな風景や、少年時代の遊び、宗教的な行事などについて、懐かしそうに話した。

奥津町苫田地区は、吉井川や山々に囲まれた自然に恵まれた場所であり、こうした自然環境は人々の生活に大きな影響を与えている。川や山での遊びは、子供時代の思い出として印象的なものだった。一方で川の氾濫や台風による影響が、地域の人々にとって印象深いものとなっている。お日待ちの風習や久田神社の祭りなど、地域の行事が人々の心に深く刻まれ、地域社会に一体感や結束をもたらした。また、モクレンの木や久田神社などは、苫田地区の象徴的な場所といえる。

以降の議論で、住民の移転に際する葛藤や、移転後の思いについても触れるが、インタビューを通して、かつての暮らしを思い、懐かしむ住民の思いを感じることがあった。住民の意思決定や、移転が住民の暮らしに及ぼす影響を理解するうえで、故郷での思い出や郷愁の念は重要な要素になってくる。また、住民の心の中には、故郷がダム湖に沈んだ住民にしかわからない、「なんとも言い表し難い、失われた故郷への思い」があるように感じられた。

2-2　生業

続けて、苫田地区の生業の様子を描き出す。昭和の終わりから平成の始まりという時代、苫田地区には伝統的な農村の暮らしの名残が残り、現金収入に乏しい自給自足的な生活があった。

当時の生業については、和賀（2001）が詳細に綴っているが、焼き畑（ダイコン、ソバ、アズキ、アワ、キビなどを栽培）や、棚田、養蚕、農耕用の牛などについて説明されている。自家生産・自家消費の原則のもと、季節に合わせ、幾種類もの野菜が栽培されたという。また、かつてはほとんどの農家が副業として炭を焼いた。

---

[33] 2023 年 10 月 4 日　日笠正邦さんへの聞き取りより

苫田地区における伝統的な暮らしの特徴として、生業が人の輪を生み出していることが挙げられるだろう。古林勇二さんは津山市で働きながら、休日は生家でコメ作りを手伝った。隣人や子供たちが手伝い、総出で作業をしたそうだ。昔ながらの棚田では、脱穀機の上げ下ろしに苦労したという。

> 小学生時代は足踏み脱穀機でした。やがてエンジン脱穀機になって、父と担いで棚田の坂を降りるんですよ。母と弟妹たちは、はでばから乾燥した稲束を運び、父と僕が並んでダダダダと脱穀したんです。（中略）田植えは近所の人と共同作業するんです。これを手間代えといいました。小学校には農繁休校もありました。とにかく百姓仕事は家族総出でした[34]。

写真 8　田植えの様子（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

このように、人々が支えあい、生業が人の輪を生み出していたことも、かつての暮らしの特徴といえる。

こうした生業形態は、現金収入に恵まれないものだった。インタビューで「かつての暮らしで印象に残っていることはありますか」と質問をすると、「昔の暮らしは貧しかった」と話す方が多い。日原道子さんは自身の少女時代を振り返り、両親がよく「現金収入がない」と話していたと語る。地元の豆腐屋や酒屋で商品を買う際には、「つけ払い」をよくしていたという。

瀬尾五男（いつお）さんも少年時代の貧しい暮らしを回想する。父親が早くに亡くなり、母親は女手一つで 5 人の子供を育てていた。当時は「男ばっかりでもうむちゃくちゃ食うわ」「金はないし、隣の家に醤油を貸してとか、コメ一合貸してとか言っていたのを覚えている」と話す。金銭的に豊かではない当時の暮らしの様子が浮かび上がる。

[34] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

農業以外に関していえば、父親が都市部に出稼ぎしていたという話や、祖父が行商をしていたという話など、現代では聞きなれない話もしばしば聞かれた。複数の職業を掛け持ちしたり、遠方に出稼ぎにいったりという話は、当時珍しくなかった。

竹本利夫さんの父親は指物大工をしていたが、地元では十分な収入を得られず、出稼ぎに出ていた。

> 父親は指物大工で、タンスを造ってた。でもそれだけでは食っていけないので、姫路か大阪かに出稼ぎしていた。それから何年かして帰ってきたけど、田舎じゃけんやっぱり就職先が少ない[35]。

話を聞いた住民たちが故郷で暮らしていた頃は、ライフスタイルが変容し、都市化がすすんだ時代だ。農村部の苫田地区でも、現金収入が必要とされるようになり、生業の在り方が多様化している。自家消費分の農作物を生産する伝統的なくらしを残しつつ、人々は現金収入が得られる職業に就くようになっていった。

現金収入を求める人々は、町役場や農協、町内外の企業などに就職した。町内の企業には、造り酒屋の牧野酒造本店やモリテツ電気の工場、元町長の石田守氏が経営していた石田石材などがしばしば名前に挙がった。また、インタビューした住民には建設・土木業に従事した住民が多かった。このように、ダム闘争が本格化する以前は、町内に複数の企業があったことが分かる。

しかし、これらの企業もしだいにダム計画の影響を受け、廃業や移転が進んだだとされる。ダム推進側の建設省や県は、まず地元企業に補償金を立ち退き移転を働きかけたと聞く。また、水没予定地となった苫田地区では、建設や土木の仕事が滞った。ある住民は「働く場所がなくなったから、地元を出ていくしかなくなった」と話す。また、企業が移転する前から見切りをつけて転職をしたという住民の語りもあった。

ある住民は、学校を卒業後、地元の会社で働いていたが、ダム容認の流れが進んでいくのを感じ、転職を決断したと話す。ダム容認の流れが多数を占めるようになると、もはや地元での仕事を続けていくことは難しい状況になった。

> 移転を受け入れるという声が増えてきた頃、見切りをつけた。ちょうど、津山で会社の求人があったので、そこへ入って定年退職まで勤めた。苫田ダムで、これは賛成に傾いてきたと見極めた。20 代の後半の頃だった。

ここまで、苫田地区における生業の様子について記述してきた。農村の生活は現金収入に乏しい、自給自足的な暮らしだった。農作業では地域の人々が協力し合い、豊作を祝って祭りが行われるなど、生業を通じて人の輪が生まれていたといえる。町外の会社に働き

---

[35] 2023 年 4 月 17 日　竹本利夫さんへの聞き取りより

に出る住民も、休日に実家の農作業を手伝う。農村の伝統的な生活が根付いていた。

しかし、ダムの計画によって地元の企業も影響を受け、移転や廃業に追い込まれる形になった。町内の職場が少なくなると、住民の町外への流出に拍車がかかった。

2-3　豊かな人間関係

奥津町苫田地区では、農山村の豊かで密な人間関係が、人々の暮らしを支えていた。ダム史のなかでは地域社会のダム反対/受け入れをめぐる分断が印象付けられるが、住民の語りから見えてくるのは、意外にも微笑ましい住民交流の姿だ。

前節で述べた久田神社の祭りのように、かつては地域社会の「一体感」が見られる場面があった。苫田ダム記念誌『ふるさと』（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）の写真のなかには、和気あいあいと「団結もち」をつきながら、ダム阻止に向けて結束を高める人々の姿も見られた。在りし日の苫田地区には、これらに象徴される密な人間関係があったといえる。

以下では住民の語りを取り上げ、詳しくその様子について描き出していきたい。

写真 11　団結餅つき大会の様子（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 12　団結餅つき大会の様子（苦田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

故郷の自然豊かな環境について「いいところだった」と話していた牧野欣功さんは、お互いをよく知り、助け合える密な人間関係住民を懐かしむ。

> とにかく昔はどこに行っても何事があっても、すぐ家に寄ったり、近所でも寄ったりして、いろいろ話をしてたな。じゃけ、（お互いのことが）よう分かりょうったな。それで結婚じゃうたら、娘がおるぞいうて、あっこにええ息子がおるけ、世話しちゃりゃええぞとかな、そういうようなことで、結婚しょったんじゃけどな[36]。

奥津町で少年時代を送った宮元貴広さんは、当時は近所づきあいが密で、家族ぐるみの付き合いがあったと語る。宮元さんは祖父母と一緒に暮らしていたが、祖父母が不在のときには、親しくしていた隣人の家で夕食を食べさせてもらったり、風呂に入れさせてもらったりしたのだという。

> 近所のおじいちゃんおばあちゃんがお年玉くれて。祖父や祖母がおらんかったら、隣の家でご飯食べてきんちゃいとか、お風呂はいりんちゃいとか、もうそんなこと平気でやるような付き合いで。もう地域が家族みたいな感じ。それはダムがなければ、あのままだったのかどうかわからないんですけど[37]。

大山由起子さんによると、町内ではバレーボール大会などのイベントもあり、女性同士の親睦を深めたという。津山市出身の大山さんは、奥津町の家庭に嫁いだ。

> 婦人バレーボールをしていて、私もこっちに来たばかりで若いもんじゃけ、誘わ

[36] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより
[37] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより

れる。まあ嫌いじゃなかったけん、まあしようかと思って一緒にした。同好会みたいなもんじゃ。

（中略）家庭婦人のなんだかっていうバレーボールがあったんです。みんな強かったですよ。いっちょまえなアタッカーもおりましたし。そうやってコミュニケーションとるのも楽しかったですね。そういうのもまた 1 人減り 2 人減りになりましたけど、まあ若いときは楽しいです。それぞれの試合ごとにいろんなエピソードがあったりね[38]。

写真 13　町民運動会の一コマ　1990（平成 2）年撮影（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

大山由起子さんが嫁入りをしたのは、23 歳のころだった。当時は苫田ダム闘争の渦中で、周囲からは心配する声もあったというが、本人は「不便さもなんか面白かった」と奥津でのよい思い出を語った。近所の女性たちが暖かく迎えてくれたことが嬉しく、講組などの付き合いも面白かったという。移転でそうした人々が散り散りになったのは、「寂しかった」と語った。

不便さもなんか面白かったですね。雪の量も（自分の生まれ育った故郷と）めちゃめちゃ違いましたし。近所のおばちゃんたちもすごく個性的で面白かったですし、やっぱり仕切る方がおられてっていう、そういう関係が面白かったですね。逆に大事にもされましたし。「チズさんとこの嫁さんか〜」言うて、すごくウェルカムで喜んでくれましたし。

そういう人たちのなかで嫁さんとして大事にしてもらってたから。余計にね。その人たちも分散しましたし、あちこち行ってしまったし、やっぱそれも寂しかったですね[39]。

[38] 2023 年 11 月 5 日　大山由起子さんへの聞き取りより
[39] 2023 年 11 月 5 日　大山由起子さんへの聞き取りより

また、他の女性は、株内の女性たちと一緒にお茶会をすることがよくあったという。畑仕事や牛飼いの仕事が終わった後には女性たちが家を訪れるので、女性同士の人間関係を深めることができたという。

> それから、近所周りもやっぱりね、密だった。畑仕事が終わった後、昼までの間に下の株内のおばちゃん連中が、家に来て話をする。それで嫁きて、まだ仕事もしてないとき、そこへいっておばあちゃんたちの話を聞きながら過ごした。（結構この輪の中に入っていくのも、大変じゃなかったですか？）そうそう、大変だったけど、そのおかげで周りのことがよく分かるようになりましたよね。全然知らずに来てたから。

第 3 節では、苫田地区における住民交流の姿を描き出してきた。水没地区の地域社会においてはダム建設をめぐる意見の分断はあったものの、豊かな住民交流が根付いていたといえる。カスミ網漁の解禁日に開かれる飲み会や久田神社の祭り、久田小学校のスポーツ大会など、地域の行事やイベントが盛んに開催され、住民たちが一堂に会して「一体感」を共有していたことが分かる。また、日々のお茶会や畑仕事の後の交流が、嫁入りをした女性たちが地域社会に馴染んでいく機会となっていた。ここからは、ダム闘争の歴史の裏側にある、素朴で調和のとれた住民交流の姿を捉えることができる。こうした姿は、町行政や各種住民組織（苫田ダム阻止期成同盟や地権者団体など）の動きを中心に描いた記録では捉えられない一面だ。

2-4　生活環境について

奥津町苫田地区の生活環境について、多くの住民は「不便だった」と振り返る。さらに移転後の生活について、生活環境の向上を認めている。（移転後における人々の認識については 5 章以降で議論する）住民の移転の意思決定、生活再建の過程を理解するうえで、かつての生活環境は重要な要素になってくる。

現在、苫田地区は鏡野町中心部から車で 15 分程度、商業施設が立ち並ぶ津山市市街からは 30 分程度のところにある。しかし、かつては現在のバイパス（ダム着工後に付け替えられた国道 179 号線）が整備されておらず、津山市市街までは路線バスで 1 時間ほどかかかったという。奥津町内には大きな店舗や公共施設が少なく、宮元貴広さんは「津山が都会っていう感覚だった」と話す。

当時、小売店やスーパーが立ち並ぶ津山市は時間がかかるため、現在ほど気軽に行ける場所ではなく、病院に関しても町内にある診療所が頼みの綱だった。教育機関に関しては、

小中学校は町内にあり、高校は津山東高校[40]の分校が1校あった（旧久田高校）が、別の高校に通うため、高校進学時に地元を出て下宿や寮生活をする若者も多かった。

武元賢治さんは、バスで津山市内の高校に通っていたが、「バス代の負担が大きかった」と話す。他の住民の話によると、バスは朝 6 時半に出発し、高校まで 1 時間以上はかかったという。

また、町内には働く場が少なかったため、ある住民は津山市内にある職場に通い、ある住民は出稼ぎに出るなどしていた。ライフスタイルが変化し、社会全体の暮らしが豊かになっていく中、奥津町の住民は、農村部での暮らしの不便さを感じていたように思われる。

また、鳥越地区[41]にくらしていた宮元貴広さんは、住宅周りの生活環境について「すごく不便なところ」と話す。鳥越地区では、斜面に沿うように家が密集しており、車が通るのもやっとという環境だった。行商を営み、多くの荷物を運んでいた祖父にとって、家の前の坂は厄介な障壁だった。

> 僕らは物心つくかつかないかの頃だったので、出るか出ないかっていう部分にそれほど執着がなかったんです。でも今思うと、ものすごく不便なところに住んでいた。鳥越地区は坂道で、冬とかでも凍ると危ないですし、祖父とか祖母は高齢ですから、バスが下で止まって、坂の上にある我が家に歩いて上がっていた。
>
> だから、祖父や祖母は、早くそういうとこから離れて、便利のいい土地に移り住みたいっていう気持ちだったと思います。僕らはそこで遊んだりしてるので、出たい出たくないっていうのは、無かったんですけど[42]。

同じく、鳥越地区に暮らしていた女性も、当時の暮らしを思い出し、不便だったと話す。ダムがなくても引っ越していたかもしれないと思いを巡らす。

> もしダムができず、あのままあそこにおったら、う～んとか思ってな。できてこっち来たけん、まだ生活がしやすい。あのままおったら、どねなっとったじゃろうかなと。もしダムが出来なかったら出来なかったで、自分たちでこっち来たのかなとか思ったり。ちょっとわからんけどな。車も門先まで入らんし、坂道も冬凍ったら危ないんよ。そんな感じだったかな。もしあのままずっと生活してたら、娘らも帰ってはこんだろうし。

---

[40] 岡山県津山市市街にある普通科高校。

[41] 地元住民は久田下原の畝（うね）地区、成（なる）地区を合わせて「鳥越地区」と呼んでいる。

[42] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより

写真 14　山間に整然と並ぶ民家　1987（昭和 62）年撮影（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

このように当時の苫田地区は、現在の鏡野町中心部や津山市へのアクセスが悪く、小売店やスーパーが立ち並ぶ市街地には時間がかかって不便だった。高校をはじめとする教育機関、病院、職場などは、町内にあっても十分ではなかった。とくに町内に働く場が少なかったことで、住民の一部は出稼ぎをするほかに、近隣の市町で仕事を探すなどする必要があった。こうしたことが、地元に住み続けることに対する不安や課題となっていたと考えられる。また、久田下原の鳥越地区では家が斜面に密集し、車が通ることが難しい環境だった。こうした環境が住民の生活の障壁になっていたことが、聞き取りを通して明らかになった。

2-5　小括

本章では、郷土史をはじめとする文献の記述や実施した聞き取りをもとに、在りし日の奥津町苫田地区の人々の暮らしを描き出してきた。ここから読み取れる苫田地区の暮らしの特徴を 4 点にまとめたい。

苫田地区の暮らしについては、第一に、**自然環境と共存する人々の営み**に特徴づけれられる。苫田地区は吉井川や山々に囲まれた自然豊かな場所で、自然環境が生活に大きな影

響を与えた。川や山での遊びは地域住民にとって印象深いものであると同時に、川の氾濫の様子も地域の人々に強く記憶された出来事だ。第二に、**行事や風習が重要な暮らしに組み込まれ、地域社会の一体感を生み出していたこと**が読み取れる。お日待ちや久田神社の祭りは、人々が集まり、交流する場を生み出していた。第三に、**農村の生活では現金収入が得られず、自給自足に近い生活が営まれていたこと**が分かる、焼き畑や棚田、養蚕、牛による農耕など、伝統的な生業の様子があったといえる。農作業では近隣住民や親族間の協力が欠かせず、生業を通じて人のつながりが築かれていた。隣の家との助け合いや地域コミュニティの力が彼らの生活を支えていたことが伝わる。助け合いの精神が根付いており、特に貧しいなかでも地域の人々が結びついていた。そして最後に、**不便な生活環境**がある。当時の苫田地区はアクセスが悪く、教育機関や病院、働く場も不足していた。こうした状況の中、ダム問題によって町内の環境整備が遅れることになり、ますます生活環境は悪化することになった。こうしたことが将来への懸念になり、移転が行われた一因とも考えられる。

本研究テーマに取り組むにあたり、かつて存在していた奥津町苫田地区の暮らしを理解することは重要だろう。苫田地区では厳しい状況の中で地域社会が助け合い、結束し、自然との調和を大切にした生活様式が根付いていたことが伺える。苫田地区においては、豊かな自然や密な人間関係に支えられたかつての暮らしに関する語りから、住民がふるさとに愛着を抱いていたことが分かった。しかし一方で、農村の地理的・経済的に厳しい環境や、将来世代にわたって暮らし続けることへの懸念などが垣間見えた。

3　苫田ダム闘争にゆれる奥津町のくらし

3-1　苫田ダム闘争をめぐる出来事の整理

3-1-1　ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政

本章ではまず、ダム建設に揺れる奥津町の様子、すなわち計画判明から反対運動展開期の「苫田ダム闘争」について描き出していきたい。ダム計画が明らかになって以降、苫田ダム阻止期成同盟会（以下「阻止同盟」）をはじめとする反対派の活動と、先の見えないダム問題に決着を望む容認派の活動が顕在化する。こうした苫田ダム闘争は半世紀近くに及び、計画判明からダム完成までには 47 年が経過した。世代によってその実感の大小はあれど、多くの住民の人生がダムに翻弄された。

本章では、町史などの資料をもとに「苫田ダム闘争」の過程を整理したうえで、住民や当事者の語りを引用し、そこに生きた人々の視点から出来事を描き出したい。

なお、本章を論じるにあたり、苫田ダム建設に至る過程を大きく 3 つの時代区分に分けておきたい。すなわち、**①ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政、②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年、③町政転換後、反対派住民の移転が本格化したころ**　の 3 つに分けることとする[43]。

なお、本章で論じる苫田ダム闘争は①～②の時代区分にあたる。この過程は浜本（2015）の議論では、「予定地の局面」とされる期間であり、「地域内の人間関係の悪化・対立、畑・森林・住宅・公共施設など地域社会の荒廃、将来の不安/将来設計への影響」等が生じるとされる。

最初に、**①ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政**　の時期についてまとめる。この期間では町民の多くが「まさかダムができるわけがない」と感じており、住民の話では当時の状況について、「ほぼ全町民が断固反対という考えだった」あるいは「賛成も反対もない」と語られる。以下では少し詳しく記述していきたい。

なお本研究において、この時期について多くの語りを得ることはできなかった。闘争書記を知る当事者の多くが他界した今、半世紀前の状況についての鮮明な語りを得ることは難しかったといえる。

ここからは、インタビューの語りや資料の中にある当事者の語りを引用しながら、当時の状況を描き出す。奥津町民にとっての苫田ダムの歴史の始まりは、苫田ダムの計画が地元紙「山陽新聞」の報道によって判明した 1957（昭和 32）年 11 月 17 日のことである。「寝

[43] 時代区分はあくまで当事者の認識に基づいて設定した。多くの住民が「長野士郎県知事の 2 期目以降に、ダム計画が積極的に進められた」と認識している。なお厳密には、長野知事は 1 期目の 3 年目にあたる 1974（昭和 49）年に「苫田ダムは地元との話し合いを経て向こう 1 年位を目途に解決したい」と意欲を見せている。

耳に水」の報道に対して、村内は大きく動揺し、その日のうちに村民集会[44]が開かれた。

当時中学生だった古林勇二さんは、報道を目にした後、そのことについて学校で友人と話したことを覚えている。周囲の大人がダム反対の声を上げるようになったが、当時中学生だった古林さんは「賛成も反対も考えられなかった」という。

> 中学 1 年の 11 月 17 日、山陽新聞に大見出しで発表があったんですよ。そこでみんなびっくりしました。僕は子供ですから、新聞をとってない人もおるし、「ダムができんか、ほおお」と、その日に話したことは印象に残っております。
>
> 大人は絶対反対しょうったなあ。「馬鹿なことを言うな、田んぼも畑もあるのに」などと言っていました。けど僕は中学 1 年ですから、賛成も反対も分からなかったです。「そうじゃなあ、家がなくなるんか」というくらいの実感でした[45]。

ダムに反対する地元住民はこの報道を受けて、「苫田ダム建設阻止期成同盟会（以下、阻止同盟）」を結成し、以降多くの住民を巻き込んだ反対運動が展開されるようになった[46]。当時中学生だった瀬尾五男さんは、「当時はみんな阻止できるような気分だった」と話す。「最初は計画は無くなるだろう、阻止できると思うとったけんな」「その頃はみんな阻止でまとまっとった。（反対と容認で）いがみ合うことは無かった」と話す。

その後奥津町[47]では 1959（昭和 34）年 6 月 29 日、町議会で「ダム絶対反対、建設阻止」を議決し、「苫田ダム阻止特別委員会条例」を可決した。「苫田ダム絶対反対」の町是のもとで、阻止同盟は説明会時のデモ行進、県庁に出向いて反対の陳情をするなどした。

三村合併後も結束は堅固だった。鉢巻き姿の町民の手で町役場には「町是　苫田ダム絶対反対」の看板が、ダムサイト予定地にはカンパにより「団結の碑」が建てられた。ここには住民千九百八人の氏名と「われわれは将来、正には正をもって対し『一握の阿堵物も以てすれば民はよらしめ得る』との人権の侮蔑にたいしては飽くまで団結の力を以て対処する[48]」との宣言文が刻まれた（和賀, 2001）。

---

[44] 当時、水没地区は苫田村だった。
[45] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより
[46] 1958（昭和 33）年時点で会員は 1908 名だった（奥津町, 2005）。
[47] 計画判明から 2 年後の 1959（昭和 34）年、合併により奥津町が誕生した。
[48] 阿堵物とは金銭の異称。中国・宋代の俗語で「この物」の意。労働の正当な対価以外の金銭を忌む心意気が込められている言葉である。

写真 15　団結の碑（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

1965（昭和 40）年の 3 月には、中国地方建設局が苫田ダム立ち入り調査実施を試みた。作業員 14 名がトラック 4 台に機材を積んで現地に入ったが、阻止同盟会員約 500 名がスクラムを組んで抗議をした。トラックを囲み「鬼ども帰れ」と怒声を浴びせるなど、非常に激しい攻防となった。一時引き上げた調査隊はその 3 日後にボーリング調査をゲリラ強行するが、また阻止同盟に阻まれる事態となった。阻止同盟は日夜立ち番をして警戒に当たったとされる（奥津町, 2005)。

写真 16　鉢巻き姿で気勢を上げる阻止同盟の人々　1967（昭和 42）年撮影
（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

1967（昭和 42）年には調査隊が機動隊を動員した機材搬入を試みるが、阻止同盟の岸川委員長、奥津町の伊丹町長をはじめとする奥津町側と、工事事務所側で交渉に臨んだ。岸川委員長が抗議集会の抗議文、伊丹町長が阻止特別委員会の決議文を朗読して事務所長に手渡し、ダム計画の撤回を要求する要請文を手渡したが、結果的に町と阻止同盟は河川敷のボーリングを許した（奥津町, 2005)。

写真 17　奥津町に入る調査隊と県機動隊 40 人 （苫田ダム阻止写真集刊行委員会, 1993）

写真 18　抗議文を読み上げる阻止同盟の岸川委員長
（苫田ダム阻止写真集刊行委員会, 1993）

このように、町内は突然のダム計画に一時激しく揺れ動いたが、この後一時沈静化することになる。すなわち、1967（昭和 42）年に中国地方建設局長と奥津町長伊丹氏との間「吉井川総合開発事業苫田ダム調査協定書（いわゆる「四二協定書」）」が締結されたことがその契機となった。内容は、「昭和 42 年度以降の予備調査実施について奥津町は、積極的協力はできないが地元住民が妨害することのないようにする。（中略）調査の必要あるときは、奥津町と十分協議し、奥津町の承諾なくしては調査を実施しない。奥津町の承諾とは町民の総意が、ダム建設賛成の方向に向かい、少なくとも旧苫田村在住の町議全員の賛成を含む町議会の賛成決議がなくてはならぬことを意味する」というもので、町内でダム反対の声が根強い状況の中で、これ以上事業が前進することはないと思われた。町史では当時の住民の心境について「勝利にも似た安堵の中に平穏を取り戻した」と記されている（奥津町, 2005）。

当時の写真からは町内の混乱と白熱した攻防の印象がある一方で、当時の状況は「牧歌的」という語りもある。和賀（2001）の著書には、当時の状況について住民が語った言葉が残っている。一度目のボーリング調査と同年の 1965（昭和 40）に、阻止同盟 270 人が県議会、建設省中国地方建設局の岡山工事事務所に陳情に出向いたときのことだ。

> まだ、あのころは遠足か日帰り旅行のように牧歌的な雰囲気でのう。こげに地域が一丸となって異を唱えているのだ。民主主義国家で我々の願いが通じないことはありゃせん。楽観しておりました[49]。

写真 19　岡山へ向かう陳情団のバスの車中　1965 年 5 月 22 日
（苫田ダム阻止写真集刊行委員会, 1993）

[49] 和賀正樹（2001）で描かれた住民の語りより

また、当時少年だった武元義和さんは、当時の状況について「村祭りのような感覚で見ていた」と話す。

> 反対集会するときなんかは、むしろ旗たてたり、鉢巻きしたりしてワーワーようるから、外の人から見るとすごく生々しい感じがすると思います。けど、ぼくらは村祭りのような感じで見てました。「あのおっちゃん、鉢巻きしとるじゃないかい！」って。
>
> でも、ヘルメットで口にタオルをかけた得体のしれないひとたちが、ワーワーやってきたのは、なんだろうと思った記憶があります[50]。

当時奥津町（水没地区ではない）に暮らしていた南條節夫さんの語りからは、非水没地区を含む奥津町全体の状況が浮かび上がる。「久田・泉地区は別として、奥津町全体では反対の動きはそれほどはなかった」と話す。町政は「反対」の意を示していたが、住民レベルまで反対の声が浸透していなかった。当然のことながら、町外に暮らす人々の関心が向けられることもなかった。（むしろ近隣市町村の立場は、ダム推進の立場が多かった）

ここまで、①ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政　の時期の地域社会の様子について描き出してきた。ここからは、ダム計画が明らかになったことで地域全体が大きな動揺を経験し、町民の強い結束のもとで苫田ダム反対運動が始まった様子が分かる。中国地方建設局による立ち入り調査は町民を刺激し、一時非常に激しい攻防が生まれたが、1967（昭和 42）年に建設局と町長の間で交わされた「四二協定書」により、町内は平穏を取り戻した。

当時の状況は住民の声が反対で一体となっていた状態、あるいは「まさかできるわけがない」との認識のもと、ダム容認の声が現れる余地もない状態だったといえる[51]。激しい攻防の様子が印象的である一方で、その実態について「牧歌的」「村祭りのような感覚」とする語りもあった。しかし、こうした状況は年月の経過とともに変化していくことになる。続いて、**②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年**　における状況をみていきたい。

---

[50] 2023 年 10 月 31 日　武元義和さんへの聞き取りより

[51] ただし、初期の段階で「苫田ダム賛成」を表明した部落もあった。久田下原の次に通産省が目を付けたとされる、鏡野町山城地区に田畑を持っていた住民たち（久田下原に居住）だ。苫田ダム同様に阻止運動への協力を久田村議会に仰いだが、取り合ってもらえなかった。その後の地区総会で、「己の土地を守るため、苫田ダム賛成の苦渋の選択をした」とされる（奥津町, 2005）。

3-1-2　ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年

長野士郎知事が二度目の当選を迎えた 1976（昭和 51）年ごろからは、県当局による強硬策が目立つようになったといわれる。

岡山県津山地方振興局は、地域住民の理解と協力を得るため 1977（昭和 52）に奥津町久田下原に吉井川総合開発連絡事務所を開設した。さらにこの頃、県の意向を受けた吉井川下流 17 町村が、「苫田ダム問題協力会」を設立した。県は地元側へ約 400 億円の補償投資をする意向を示すとともに、12 月になると「県の考え方について」と題した津山振興局長名の文書を町内全戸に郵送し、補償額を公式に明らかにした。1978（昭和 53）年には津山振興局にダム問題専任の次長を配置し、現地に設置している苫田ダム出張所の職員も増員するなど、体制が強化された。

このなか、地元では 7 月 30 日には久田下原に新しく結成された「苫田ダム解決協議会（神田繋夫会長）」が「苫田ダム建設銭次第」の大野立て看板を設置した。また津山振興局が広報誌「苫田ダム　あなたと私」が町内全世帯に郵送で届けるなど、ダム建設に向けての機運が高まりをみせた。1979（昭和 54）年には長野士郎岡山県知事が初めて奥津町入りし、2 日間にわたり「知事を囲む懇談会」が開かれた。これに合わせて阻止同盟はデモ行進をして抗議した。

この頃から多くの住民がダム容認・反対をめぐる緊張感を感じ始める。奥津町史には、1972（昭和 47）年の「苫田ダム解決協議会」の旗揚げ[52]を契機として、阻止同盟が分裂し、阻止運動にひびが入っていったと書かれている。さらに 1981（昭和 56）年、久田下原畝地区の住民らで組織する「苫田ダム同志会」（会長朝田数夫）や、町内の企業者を中心として「苫田ダム対策研究会」（会長石田守）が発足した。一方の阻止同盟（山奥諫委員長）は 1981（昭和 56）年に久田小学校体育館で総決起大会を開き、約 500 名が建設阻止を再確認し、「ダムをめぐる双方の住民の感情は日を追って激しくなった」とされる（奥津町, 2005）。

1981（昭和 56）年 9 月の定例岡山県議会では、苫田ダム建設基本計画の同意案が一番に取り上げられ、長野知事は「関係住民の多数の理解が得られ、また、地元関係住民の中でも早期解決を望む声が高くなっている。一方、いまだに根強い反対のあることも承知しており、一層理解を得られるように今後も努力をしてゆく」と現況を述べた。議会最終日には地元住民が採決を見守る中、同意案が賛成多数で可決され、苫田ダム計画の了承を建設省に回答した（奥津町, 2005）。

1982（昭和 57）年、町政の混乱を露呈したのが岡田町長の辞表提出だ。当時町執行部は県による行政圧迫にあえぎ、医療センター、へき地学校教員宿舎、大釣園地整備事業、美

[52] 1979（昭和 54）年には「苫田ダム解決協議会」が「苫田ダム地権者協議会」に改組し、勢力を拡大した（奥津町, 2005）。

作北 2 号線などの整備が補助金の停止によって進まない状況だった。後日町長は辞表を撤回したが、行政の混乱ぶりが露わになった。こうした状況の中、県当局は住民団体の要請で停止していた公共事業を実施する方針を打ち出した。奥津町の頭越しに国・県の補助事業を認めるというもので、奥津町の遅れている各事業に対応する一方で、奥津町当局の行政能力を軽視することを狙った。

こうした動きを受けた町執行部は、積極的に県との対話をすすめる方針を打ち出した。岡田町長と渡邊功副知事（県苫田ダム対策本部長）との首脳会談もあって、翌日には「1, 奥津町は、苫田ダムに関する法手続きがなされていることを認識し、その上に立って町は将来の町振興計画策定を本格的に検討する。2, 県は、前期の状況をふまえて、町が実施しようとする次の 57 年度事業の推進をはかる[53]。 3, 上記以外の事業の実施については、県と奥津町が協議する。 4, 奥津町は、上記各号の実施に必要な執行体制を整備する。」の 4 点の覚書が交わされ、停止していた事業が実施されることになった。山陽新聞は町執行部の対応について「現実直視の姿勢に転換」として解説した（奥津町, 2005）。

岡田町長が再選ののち再び任期半ばで辞表を提出したのは、1986（昭和 61）年だった。同年 5 月 30 日、推進派の地権者三団体と鏡野町の苫田ダム第二地権者協議会は、建設省、県と総額 350 億円にのぼる損失補償基準協定、生活再建対策費等協定の調印を行った。こうして、流れはダム建設の方向へ向かっていく。8 月 1 日に開かれた町議会で町役場に水没予定者の相談窓口を設置すると表明。推進派、阻止派住民が拮抗する中、共有林や共同墓地、共有施設など町が処理しなければならない課題も多く、推進派住民から窓口の設置を強く要望されていた。

ここからは住民の語りをもとに、当時の状況を描き出していきたい。ダム建設が現実味を帯びてきた当時を象徴するのが、苫田ダム解決協議会が設置した野立て看板だ。「苫田ダム銭次第」と書かれたこの看板は目立ち、町民はもちろん、周辺に住む人々にも強く印象づいた。古林勇二さんは「銭次第」の看板をみて、反対一色だった地元の意見が割れていくのを感じたと話す。

> 田んぼの中に「銭次第」の、大きな看板が立った。それを見て「やっぱり（賛成・反対で地域が）割れてきょうるな」と思った。賛成派が 2 グループ 3 グループできたな。みんながみんな賛成じゃなかったけど、ボロボロと団結が崩れ始めた[54]。

住民の間には「銭次第」看板に批判的な声もあったが、この頃すでに、町全体が反対を続けることがままならない状況に追い込まれていた。計画判明から四半世紀が経過し、生活設計を見通せない状況は地元住民の不安を招いた。こうした状況の中で、若者が地元を

---

[53] 事業は主に、①医療センター、②へき地学校教員宿舎、③大釣園地整備事業、④美作北 2 号線の 4 つがあった。

[54] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

離れていくと、地域の将来にも暗闇が立ち込めてくる。こうした不安や葛藤は容認派の人々がダムへの反対運動をやめ、対話の道を検討し始める契機になった。容認派の心境については次節で詳しく紐解いていきたい。

また、生活設計への不安に加えて、町内の環境整備の遅れが大きな課題となっていた。背景には県による行政圧迫（補助金の意図的な停止）があり、公共事業の財源を県の補助金に頼る町行政は、町内のインフラ整備を進めることができない状況にあった。インタビューした住民のなかにも環境整備の遅れについての話はよく聞かれた。「奥津町に入った途端、道路がガタガタだった」といった声が多かった。

> 要は道路の整備であるとか、そういったものが公共工事として他の地域から比べたらかなり遅れてまして、締め付けがあったようだね。だから、そういう整備がなかなか出来なかったんですね。小学校でもあの当時で 7、80 年は経ってましたからね[55]。

> 奥津町に入った途端にもう道が悪くなるんです。車の時代だから、道路の幅を広げたいでしょ。でも補助が出ないから広がらないんです。
>
> うちの家だけは自分とこの田んぼのところで道を広げてね。家の前で車が回るようにはしたんですけど。もうほとんどの道が、自転車が通って人がすれ違うぐらいの状態で。大半の道がもう自分で田んぼを出して広げん限りは、道が広がらないような状態だったんですよ[56]。

旧奥津町役場に勤めていた井上陽悦さんは、行政圧迫があった当時学生だったが、奥津町役場への就職後、先輩職員から当時の苦い心境を語られたことがある。

> 奥津町がダム反対でいたときは、公共事業の補助金申請をしても認められない。そういう行政的な軋轢を、奥津町役場はかなり受けていた。でも町にはそんなに収益がないから、補助金に頼るじゃないですか。何か事業をするにしても何にしても、「認めちゃらん」って蹴られて、事業ができない時代がかなりあったと聞いてます。「仕事が進まないのは、かなり苦しかった」って先輩から言われましたね[57]。

各種公共事業の中でもとりわけ大きく問題化されたのが、奥津町庁舎の移転問題である。当時の岡田幹夫町長のもと水没予定地にあたる黒木に新庁舎を建設することが検討され、1981（昭和 56）年の新年度予算には新庁舎建設費が計上された。これに対して、岡山県苫

---

[55] 2023 年 4 月 20 日　朝田守さんへの聞き取りより
[56] 2023 年 10 月 4 日　日笠正邦さんへの聞き取りより
[57] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

田ダム対策本部は再考を要請した。町臨時議会での審議では議論が紛糾し、町役場の位置を定める条例の制定が否決された。山陽新聞は「普通の自治体の場合は、庁舎の建設地については、十分に住民のコンセンサス（同意）をとり、議会ではスムーズに可決されるはずだが、奥津町の場合は、苫田ダム建設問題がからみ『全国でも異常なケース』（県市町村課）となった（中略）町役場の位置を決める条例の制定案の採決で反対に回った議員 6 人は、非水没地（羽出、奥津両地区）の 5 人と水没予定地区のダム建設をめぐる住民間の根深いあつれきを浮きぼりにした」と報じた。

その後町執行部は現在地での建て替えに考えを変えるが、これに対して建設省・県は建設地を非水没地に変更するよう「警告」をした。最終的に「岡田町長の熾烈な執念の庁舎問題」は、現庁舎の一部改修で決着した。

そして翌 1982（昭和 57）年は、奥津町の事業が一向に進まず、町行政が再び混乱に陥ることになった。県は「水源地域対策特別措置法の事前協議に応じない限り、事業の前身は難しい」との立場で、これに対して岡田町長は議会の席上で「苫田ダムに反対する以上、ある程度の圧迫はやむを得ないと思っていたが、入札予定の町民医療センターの新築事業[58]についても、県の承諾が出ず延期をせざるを得なくなった。こうなった以上町長として対処していく自信はない」とその場で辞表を提出し、議場を去った（奥津町, 2005）。

町民医療センターのほかにも、「町民レストラン大釣」やへき地学校の教員宿舎、広域林道整備など、町政は県による行政圧迫を受けていた。岡田町長は後日「県の圧力で町の主要事業ができず、かといってダム阻止派私の信念。これまでの経緯から県との話し合いに応じることはできない。このままでは町民に大きな迷惑をかけることになり、辞職を決意した。手を変え品を替え、無理やり従わせようとする県のやり方は卑劣で我慢できない」と話した。

岡田町長は後日辞表を撤回し、議会で「町民が血で血を洗うような憂慮すべき状態が心苦しい。大の虫を生かすため、小の虫を殺すような県のやり方は納得できない」と行政圧迫を強調した（奥津町, 2005）。

岡田町長に対する住民の信頼は厚かったといわれる。古林勇二さんは、岡田町長が「誰が見ても政治家らしい、庶民の派」だったと話す。また、長野知事に対しては「悪い」印象を持っていると話し、「岡田さんを泣かすようにして作るべきだったのか」と振り返った。

> 岡田町長は、だれがみても政治家らしく庶民の派だった。元々奥津町の職員で、筋を通す人だった。一旦辞めるって退きかけたけど、やっぱり推されて、その後も

[58] 同センターは 56 年に県と協議したうえで事業に着手しており、用地改修を済ませ、昭和 57 年の冬季の降雪期を避けるため、7 月ころに県より事前着工の了解を受け、9 月には入札業者の指名まで済ませていた。にもかかわらず、県は入札の 1 週間前になって「国（科学技術庁）より正式な通知がない」との理由で突然入札を中止させた（奥津町, 2005）

町長を務めた。それで『故郷』にもコラムを書いとるでしょう。国から圧力をかけられたと。

長野さんは僕らが見ても、ちょっと強引ですね。ダム、それから岡山空港、児島湾干拓、この三つじゃないかな。三大事業を成し遂げたって言われている。けど、あっこまで岡田さんを泣かすようにして、造るべきじゃなかったと思うけどな[59]。

写真 20　再選が決まった際の岡田幹夫町長　1979（昭和 54）年撮影
（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

長野知事の強権的な手法に対して、疑問や怒りを感じたという声もあった。自治省官僚で「地方自治の神様」と呼ばれ、『逐条地方自治法』を執筆した長野知事に対し、ある男性は「これがほんまに地方自治法かい」と怒りをぶつける。

『逐条地方自治法』の本を書いとる人ですからね、これがほんまに地方自治法かいと、自治大臣さまに書いてやろうかと思いました。「本当にこれが自治のある日本か？」いうて、治外法権じゃないかいうて、書きたかったです。

岡田町長の苦悩については、住民の話に挙がることが多い。行政圧迫による行政の混乱は住民の目にも印象的に映った。なかでも、牧野酒造本店で若い頃配達をしていた牧野雄一さんは、配達で岡田町長宅を訪れた際、やつれた岡田町長の姿を目にしている。

岡田さんはボロボロになっとった。真っ青な顔をして。それはもう町長さんじゃけん、もう小学校の入学式からだったら必ず来る。25 歳で俺はもどってきて酒屋しょうるから、この頃はまだ近所にはビールを売ったりしよったし、配達をしょうっ

[59] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

たけえ、岡田さんとこへ直接行くこともあった。それはもう悲惨な顔をしとった[60]。

1986（昭和 61）年 4 月 25 日、岡田町長が突然辞表を提出して行方をくらます事件が起きた。翌月には、推進派 3 団体が国・県と補償基準に本調印をする見通しだった。岡田幹夫氏は移転後に、当時のことについて「何もかもが嫌になっていた」と話している（奥津町, 2005）。

昭和 57 年（1982）10 月、ある人に呼ばれて津山市の料理店に行くと副知事がいて、こう言うんだ。「ダム問題で協議に応じないと、国や県の補助金は出さないぞ」という訳だ。元々、非水没地区で、ダムとは関係のない事業なのに、林道はなかなか県費が付かず完成が 1 年遅れた。それくらいはほんの手初めで、道路改良から圃場整備と、何から何まで「ダム関連」にされた。しかし、町議会も水没予定地区の住民も反対派が多く私も頑張れた。昭和 61 年（1986）になると水没地区の半数が容認派になった。県との喧嘩は構わないが、町民と喧嘩はできない。三期の途中で辞表を出した。他の県でもダム問題はあるが県が、地元と国の間を取り持つのが普通だ。ところが、岡山県では県が地元を圧迫した。県の強引さは結局、長野知事の個性だと思う。昭和 55 年（1980）ころだったと思うが、県の幹部がセットして知事室で知事と二人きりで会ったことがあるが、「協力してくれないか」と言う知事に「町には町の事情がある。そう簡単には行かない」と答えると「理屈を言いなさんな」といきなり怒り出した。反論すれば怒られる。それなら何も言うまいと、1 時間くらい無言で向き合って知事が帰れというまで動かなかった。
（中略）三期目にもまた、長野さんに無理難題を突き付けられて、精神的にも疲れた。任期途中に再び辞表を出して辞めた[61]。

岡田町長辞職後、1986（昭和 61）年 6 月に行われた奥津町長選挙では、反対派の坂手可甫氏（阻止同盟副委員長）が選出された。容認派の牧野忠明氏と争い、坂手氏 1464 票、牧野氏 1330 票の接戦だったが、ダム反対の声がなお強いことを証明した。しかし、町民の半数近くが容認派という状況で、坂手町長は難しい町政のかじ取りを担うことになった。坂手町長は就任後、県との公式会議（津山地方振興局肥塚稔局長）に臨み、県が水没者の生活再建のため町に相談窓口を設けることを要望。坂手町長は後日、「町是」に反しない範囲で窓口を開設することを決めた。

建設省とダム推進は地権者の補償交渉が進み、1986（昭和 61）年 11 月 10 日からは、補償契約者に補償金の支払いがされる見込みとなっていた。またこの頃、非水没地区の羽出、奥津地区住民の有志が「苫田ダム阻止特別委員会条例の廃止を求める実行委員会」（会長

[60] 2023 年 11 月 6 日　牧野雄一さんへの聞き取りより
[61] 平成 8 年 8 月 17 日　毎日新聞　より岡田幹夫元奥津町長の語り

友保稲造氏）を発足し、条例廃止を求める住民直接請求の署名を集めた。署名は 240 名を集め、町選挙管理委員会に渡されたのち、坂手町長に請求した。

奥津町の 1987（昭和 62）年度事業を実施するにあたり、県は①長期振興計画の策定、②水没地権者の生活再建対策に取り組む、③ダム問題を担当する行政窓口の設置　を条件とした。坂手町長はこれを受け入れたが、ダム阻止を掲げておきながらこの条件を受け入れたことに責任を感じ、森本議長に「昨年町長に就任した当時よりかなり情勢も変化しており、このあたりで身を退きたい」と辞意をほのめかした。その後坂手町長は辞表を提出し、自宅での記者会見に「自民党県議団の斡旋案をもらって断腸の思いで受諾した。政治の動きは町民のためのものでなくてはならないので、この辺で身を退き、新しい町長にゆだねるのが最善の道と考えた。岡田前町長が中途時辞職し、また途中で辞職するというのは尋常ではない。しかし、これが奥津町の現状だ」と話した。

奥津町職員の男性は、当時の坂手町長の印象を「辛そうだった」と語る。温厚で職員思いの坂手氏を信頼しており、当時「こういう人材がだんだんおらんようになってしまう」と感じたという。

> 辛そうだった。いつも出張から夜中に帰ってこられたときに、私の部屋だけ灯がついてたんです。坂手さん、どえらいええ人だったんすよ。「光永さんまだ仕事しょんかい、大変だな」って。こういう人材が段々とおらんようになってしまうと思ったですね。本当に温厚な人だったしね。

当時の奥津町内は、一枚岩ではなかった。奥津町内の非水没地区、すなわち上流の旧奥津村出身の男性は、町是「ダム反対」へのジレンマを語る。ダムに反対することで、奥津町では非水没地域も含む事業全体が滞った。ゆえに、反対運動に協力し続けることは、非水没地区の住民にとって大きな負担だった。しかし、水没地区では移転を承諾する住民が増えていった。補償金を得られない非水没地区の住民からしてみれば、「補償金をもらって出ていく水没地区住民」に、疑問の念を抱かずにいられなかったのだろう。

> 「阻止阻止」いうのはわかるんだけど、私たちは水没地区ではない。じゃけ「私たちに一生懸命阻止活動をさせるなら、もし移転受け入れの判子をついた時、貰った補償金の半額を置いていきなさい」と言いました。（非水没地区の住民は）どれだけ反対しても、次の日に（水没地区の住民が）判子をおしたら、こちらが協力してもなんにもならない。（中略）他のダムの研究を見たことがあるんですけど、ダムより上流の集落が栄えたことはないんです。

ここまで、②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年　の時期について、時系列に出来事を整理しつつ、関連する住民の語

りを取り上げてきた。

計画から四半世紀が経過した頃、先行きの見えない将来に、地元住民の不安が高まりつつあった。地権者団体が設置した「苫田ダム銭次第」の野立て看板は目立ち、町民や周辺住民に強い印象を与えた。看板を設置した容認派住民は、将来の生活設計を考慮し、条件つきで容認の立場を示した。長野県知事がダム問題解決に意欲を見せて以降は、行政圧迫が町内の環境整備を滞らせた。町内の道路の状態が悪化し、奥津町庁舎の移転も難航した。

県の強権的な手法に対しては、住民から疑問や怒りの声が上がっている。住民の話によれば、岡田町長の苦悩は非常に印象的であり、特に行政圧迫による混乱が住民にも浸透していた。また非水没地区の奥津町民の間には、反対運動に協力することへのジレンマが生じた。ダム反対により公共事業全体が滞る一方で、水没地区の住民が移転を承諾していることへの不満がのぞかれた。

こうした状況の中、当初は「ダムなんて、出来るわけがない」と考えていた住民も、しだいに苫田ダムを現実のこととして意識し始める。インタビューの中でも、町政の混乱をみたり、補償金を手にする家が現れるのをみたりして、情勢の変化を感じたという話がいくつも聞かれた。

次節以降では、苫田ダム建設阻止期成同盟（反対派）を主体とする苫田ダム阻止闘争および、地権者団体（容認派）の動向を整理する。住民は激動のダム闘争の中で何を感じ、どのように振る舞い、暮らしてきたのだろうか。

3-2　多様な立場から捉える苫田ダム阻止闘争

3-2-1　反対派住民の立場と思い

苫田ダム建設阻止期成同盟は、1957（昭和 32）年の結成以来、1995（平成 7）年に至るまでの 38 年間、反対運動を展開してきた。本節ではこの反対運動に関する住民の語りを取り上げる。

残念ながら、阻止期成同盟の幹部などはすでに他界しており、話を聞くことができない。話を聞くことができたのは、この一回り若い世代で、首脳陣より一回り若い世代だ。しかし、多くの住民が阻止闘争に人生を翻弄されたことは間違いない。本節では、反対派住民の視点から阻止闘争に関する語りを取り上げ、当時の様子を描き出していく。

山崎正弘さんは阻止同盟の活動として、岡山県庁や津山の商店街に他の会員とともに赴き、声を上げていた[62]。

いろいろありましたね。県庁にバス何台かで押しかけるとかね。それから、津山

[62] 奥津町発行の記念誌『ふるさと』には、1979（昭和 54）年の津山市商店街のデモ行進の様子、1986（昭和 61）年の県庁前広場での抗議活動の様子が写真で掲載されている。

のアーケードの中かな。のぼりを持ったりしてね、バス 5，6 台ぐらいで行って練り歩いたことがありますね[63]。

写真 21　津山商店街でのデモ行進（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

藤田豊司さんは、阻止同盟で週末にチラシ配りをしたと話す。ダム反対を呼び掛ける印刷物を、吉井川下流域の住民を訪問して配った。藤田さんのお宅には当時の出来事をまとめた新聞記事のスクラップや、河川行政に関する書籍、他県のダムへの視察の記録などが保管されていた。

こんなチラシ、それからこの基本計画に、いろんなものを持っちゃあな、吉井川の下流、柵原のあたりまで行って配った。30 人くらい日曜日に集めて、若い者が運転して、後ろに女性の運転できん人とか何人か乗せて[64]。

ある住民は、県庁の前で座り込みをした時の記憶を語った。県職員の呼びかけや、冷ややかな態度を受け、悔しい思いをしたと語る。

阻止派が、車 5 台ぐらいに乗って県庁の周りにいって、苫田ダム反対と書いたのをぶら下げたりして、県庁の周りで座り込んだりしていた。県庁の上にヘリコプターを飛ばして「無駄な抵抗するな」と言われたのがショックだった。ここまで馬鹿

[63] 2023 年 11 月 3 日　山崎政弘さんへの聞き取りより
[64] 2023 年 9 月 7 日　藤田豊司さんへの聞き取りより

にするんかと思うて。

私たちが地面に座り込んで反対して、一生懸命やるでしょ。そしたら、県庁の窓からニヤニヤしてそれを眺めてて。「そこまでするんか」と思った。そんなことは思い出しますね。

写真 22　阻止同盟 400 人が県庁前広場で抗議　1986（昭和 61）年撮影
（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

人々が反対をした背景には、「先祖伝来の墳墓の地を守りたい」という、素朴な郷土愛があった。こうした思いは上の年代ほど強かったいわれる。上の世代ほど故郷に暮らした時間が長いうえ、生きていくうえで故郷の自然環境と人間関係が重要な要素だった。

牧野欣功さんは友人から移転を勧められたこともあったが、あくまで反対の立場にこだわった。ダムで地域振興を図ろうという意見に対し反論したこともある。牧野さんに反対にこだわった理由を尋ねると、故郷への思いをにじませた。

それはもう一番の故郷だからな。災害がないしな。台風がきても、うちはちょっと入り組んだとこだから風が全然あたらず、建具がガタともいわんしな。ちょっと日当たりが悪かったぐらい。それから先祖が住んどったなと思って。その思いががずっとあって育っとるけ、出とうなかった。いいとこだったけえな[65]。

[65] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

写真 23　奥津中学校体育館で開かれたシンポジウムの様子　1983（昭和 58）年撮影（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

大山隆歳さんが住む一軒家は、立ち退き移転を逃れ、かつての趣を今に残す。大山さんは、先祖が建てたこの家に愛着を感じている。一度は移転対象となっていたが、母親が拒否し続けたため、最終的に立ち退きを逃れることになった。大山さんの母親は、黒木出身で、結婚後に長年暮らしてきた家に愛着を感じていた。

> 大正 6 年か 7 年に建てた家なんです。いろんな立派な材料を使っているし、建てる位置も北からの風が当たらんようになっている。しかも、埋め立てたような土地でなくて、生きている土地。子孫のことを考えてやってくれたんだなと、今でも感謝しております。
> （お母様がそのおうちにこだわられたのは、どういう思いだったんでしょう？）それはわかりませんね。でも長年住んどるからということで、こだわったんかもしれない。100 歳まで生きましたからね、ここへ住んでる期間が長いですから。確か 15, 16 歳でここへ来てからだから。やっぱり執着があったんでしょう[66]。

闘争に参加した経験が少ない「二世世代」にあたる朝田守さんは、当時の状況を振り返り、反対を根強くやっていたのは高齢者で、生まれた土地を離れたくないという思いがあ

[66] 2023 年 9 月 10 日　大山隆歳さんへの聞き取りより

ったのだろうと話す。朝田さん自身は早期に移転しており、反対運動との接点は深くないようだった。

> 反対って本当に根強くやってたのは、それこそ本当に高齢の方が多かった。結局単純に言う地元愛ですわね。だから生まれた土地を離れたくないと、それがやっぱり一番強かったんです[67]。

山本勲夫さんは、当初移転に反対していた父親の心境を語った。父親は奥津町の外の生活を知らないので、離れるのは非常に不安だっただろうと推察する。貧しい農村の暮らしとはいえ、長年底に暮らしてきた高齢者は、その暮らしに親しみがあったのだろう。高額な補償金を手にして故郷を離れる必要も感じなかった。

> 親父はは外の生活を全然知らんから、あっこが一番ええと思うとる。外に知り合いはないしな。だから、「よそへ出たら生活ができるんじゃろうか」いう不安もあったわな。移転しなくても、家があって、田んぼがあって、食うことと寝ることは困らんから、少ない金でも必要な分だけ儲けたらそれでええという気持ちだったんでしょう[68]。

また、山本勲夫さん自身は故郷を離れて暮らしていたが、退職後は地元に戻ろうと考えており、当時は移転に反対していた。反対の気持ちが強かった背景には、反対派をリードしてきた人物と付き合いが深かったことがあるという。

> 知り合いがいわゆる反対派の系統だったからね。女房の兄やこうも、反対の親分じゃけ。それから、池上さんとか、それから藤田薫さんだとかな。そういう人が、いわゆるつきあいの範疇だったわけ。じゃけん、できん方がええいう気持ちが強かったな[69]。

反対運動に参加してきた住民に当時の心境を尋ねると、複雑な思いがにじんだ。単純な地元愛だけではなく、地域全体の反対運動の雰囲気や、周囲の住民に配慮する気持ちが、住民を活動に向かわせた側面があるかもしれない。反対運動が結束した背景には、村社会特有の密な人間関係があるようだ。

> （集会に参加するときの気持ちとして、「おっしゃっやったろうって」いうことな

[67] 2023 年 4 月 20 日　朝田守さんへの聞き取りより
[68] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより
[69] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより

のか、やっぱりみんなやってるからという、半分義務感もあるのか？）どういうんかなあ、どっちも当てはまるかな。なんか 1 人だけせんのもいや、そねいやあ、みんながしょうるけんっていうようなことになるかもわからんけど。

反対運動への熱量は人によって様々であるようだ。ある住民（二世世代）は、「両親は阻止同盟に行っていたが、付き合いみたいなものだった」と話す。また、本人は学生時代だったため、参加することはなかったという。

うちは力が入った反対派じゃないですから、大きい声を出さずに、ちょっと言って帰るだけで、付き合いみたいなもんでした。昔ははなからダムができるなんて思ってないですから。（ご自身はその阻止同盟の活動への関わりは？）私は全然ないですね。ノータッチですね。学校に行っても全然（話題に上がらなかった）。

また、高校卒業後、故郷を離れていた古林勇二さんは、両親の様子を振り返り、それほど反対を掲げていた印象はないと話す。また、強く反対している人は「地づいている人たち」だったという。

（お父さんやお母さんご兄弟は、そういう場には関わりがなかったんですか？）お袋は参加はしてないんじゃないかな。僕聞いてないけど。親父も、最初のうちは集会に行ったんでしょう。強力な反対論者じゃなくて「仕方ないわな」のような感じだった。（結構お聞きしてそういう方が多かったそうですね）「移転するのは辛いけど、仕方ないわなあ…」という人が、おそらく多いでしょう。地元に地づいている人が、強く反対していたはずです[70]。

仕事で忙しく、反対運動に顔を出せていないと、周囲の住民から疑いの目を向けられたという話も聞いた。ある住民は「あそこは賛成なんだろう」「こんな田舎出ていきたいんだろう」と言われ、そのことをきっかけに反対運動に顔を出すようになったという。

また、ある住民は反対運動でのジレンマを思い出す。長野知事来町の際の抗議活動のときのことである。町役場の前に集まった阻止同盟の住人たちは、役場に入ろうとする長野知事を妨げ、罵声を浴びせた。この住民は、隣にいた住民から長野知事を罵倒するよう促され、戸惑ったという。

そういう運動に出ていかないと、「〇〇さん賛成なんじゃない？」と言われるわけですよね。もうとにかく何か無茶苦茶なんよね。「〇〇さんは出たいんじゃろう？」いうようなことを言われて居づらくなってしまう。

[70] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

長野さんが役場に来られたときは、「声出して帰れ」と言われてね。周りが「〇〇さん黙っとるらしい」とか言うから、「長野さん風邪引いてしまえ」って言ったんですよ、そしたらなんか、「風邪ぐらいじゃいけん、殺せ！」と言って、「長野、死んでしまえ」って言う。

写真 24　奥津町役場を訪れた長野県知事らに抗議する反対派住民 1981（昭和 56）年（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

また、奥津町で有名だった牧野酒造本店は、周囲の住民から動向を注視されていた。当主の牧野栄一氏が初代の阻止同盟委員長だったことも背景にある。現在、牧野酒造本店社長の牧野雄一さんは当時、周囲からの視線を感じている。

反対派に亀裂が走ってくると、疑心暗鬼になってくる。「あんた本当はハンコつきたいって聞いたで」とか。

田舎では大きな店で、注目されとった。牧野酒造が“転んだかどうか”、賛成の方に転んだかどうかで、みんな後のことを決めるみたいな。じゃけん「牧野を絶対行かしたらいけん」みたいなことを言われていた[71]。

ここまで、反対派住民の視点から阻止闘争に関する語りを取り上げ、当時の様子を描き出してきた。反対運動の具体的な活動としては、岡山県庁や津山の商店街などで他のメンバーとともに活動し、ダム建設に反対の声を上げた話、吉井川下流域の住民を訪れてダム反対を呼びかけた話などが聞かれた。住民の話からは、ダムを推進する県当局に対して感じた悔しさや疑念が垣間見える。活動の動機としては、先祖伝来の地を守りたいという郷

[71] 2023 年 11 月 6 日　牧野雄一さんへの聞き取りより

土愛がある。世代間で違いもあり、上の世代ほど、長く故郷に住んできた経験があり、地元を離れることへの抵抗が大きかった。また、反対運動の動向や周囲への配慮が住民の意思決定や意思表示に影響しているようであった。

反対運動に参加した住民の心の中には、様々なジレンマがあったといえる。周囲から反対に対する姿勢を疑われ、それがきっかけで反対運動に参加したという話や、知事に対して罵声を浴びせることを強いられたという話からは、地元社会のプレッシャーに戸惑う住民の姿が浮かび上がる。

同じ反対派住民であってもかかわり方は様々で、その参加動機は複雑な心情であることが分かるが、総じてダム闘争の歴史が住民の人生に長きにわたり影響を及ぼしてきたことは間違いない。多くの時間をダム関連の活動に費やし、様々な逡巡を巡らし、葛藤してきた。このことはダム容認派の話にも共通する。本節の後半では、ダム容認の立場と論理に焦点を当てていく。

3-2-2　ダム容認派の立場と論理[72]

町是として「ダム反対」が掲げられた奥津町であるが、早期にダム計画を受け入れ、補償交渉に入った住民もいた。反対派の論理が強かった当時の状況の中で、彼らが容認の意思表示をすることは難しかったものと思われる。彼らの論理はどういうものだったのだろうか。本稿では、初期に立ち上げられた地元の地権者団体（苫田ダム地権者協議会、苫田ダム同志会、苫田ダム対策研究会）の動きを念頭に、彼らが何を考え、どのような論理で動いていたのかを紐解く。

---

[72] なお、一般的には早期にダム容認の立場をとった住民について「賛成派」と呼ぶことが多く、本研究で引用する文献や語りでも同様に表現されることが多い。しかし、本研究では住民及び関係者の語りをふまえて、「容認派」と表現することにした。具体的には大山富敏さんの「最初はみんな反対だった」という語りや、宮本博司さんの「移転を決めた人たちも、建設省には心を許していない」「出ていかれた方も、ものすごく苦しまれている」という話を踏まえたものだ。

写真 25　苫田ダム早期解決を呼び掛ける地権者協議会事務所　1983（昭和 58）年ごろ（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 26　苫田ダム対策研究会の発会式　1981（昭和 56）年（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

反対を表明する人々も容認を表明する人びとも、それぞれ住民の職業や地域に傾向や特徴を見ることができる（必ずしも因果関係が認められるものではなく、例外もあるが）。すなわち、住民の話によると、もともと地主で田畑や山を所有しており、生活の基盤がしっかりしている人達が反対派には多かった。反対に、田畑を借りて耕していた人々や居住環境が良くなかった人々は、早期に移転を考え始めた。

子供心に感じたことですが、反対派は村の名士とか、産業なり事業をしている人。つまり、あの地区で基盤がきっちりしてる人が反対派。そんなイメージがあります。反対する理由は、先祖伝来の土地を水没させるわけにはいかん。そういう意見で大体一致です。でも、地主さんであっても、将来の構想をきちっと持って、天秤にかけたとき移転の方がメリットが大きいと考えた人は、多分賛成したと思う。

当時学生時代だった宮元貴広さんは、当時の状況について、地域の中でも立場が明確に分かれていたと話す。やはり、宮元さんが暮らしていた鳥越地区周辺では移転を望む声が多く、北部の苫田地区では反対の声が根強いという印象がある。また、畑も土地を借りていたので「先祖伝来の畑を守ろう」というような気持ちではなかった。また、2 章で取り上げたように、鳥越地区は坂が急なうえ道が狭く、生活環境が良くなかったといわれる。かつての生活環境に住民が不安を感じていたことも、背景にある。

久田の地域でも、すごく差はあったと思いますね。僕らみたいな鏡野より（町内の南部にある鳥越地区は、旧鏡野町に接している）の人間は出た方がいいって思って、久田でも上（北）の方は地域の愛が強いというか、山があったりとかっていう方も多いかと思うので。（中略）だから僕らの近所まわりは出るっていう感じだったんで、「どこ出る？どこ出る？」みたいな話をして、でもなんか上（北）の方の人はもうやたら「反対！反対！」っていう。

祖父は祖母も戦後に来た人間なので、畑とかもやってましたけど、土地自体は借りてやってたんで。（田畑を守ろうっていうようなでは？）では無いんですよ[73]。

所有地（各世帯が所有する屋敷や田畑）に対する認識や価値観は、住民の意思表示（反対/容認）に関係すると考えられる。ある住民は早期移転を容認した父親の価値観を思い起こす。住民は「登記上自分のものといえど、自分が土地を作ったわけでもないし、簡単に言えば地球の一部だ」と表現した。 一方の反対派住民は、所有地を失うことへの抵抗が強かったと考えている。

うちが持っている土地は少なかったです。土地そのものは登記上自分のものだけど、自分がそこの土地を作ったわけでもない。簡単にいったら「地球の一部」です。所有権は別として、本来の事を考えたら、「これがわしのもんじゃ」とはいえない。ということを、父親から時々言われました。

反対派の中には、父親のような考え方を良しとして捉えない気持ちもあったと思うんですよ。だから、わしゃここでも立派に事業成り立っていきょんのに。今更外

[73] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより

へ出て、一からやり直すのは、面倒くさいじゃないかい。そんな気持ちがあると思います。

写真 27　容認派住民による立て看板（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

これらの語りから、土地所有や生活環境の差異が容認・反対の意思決定に影響を与えており、奥津町内での異なる立場や価値観が対立を生む一因となっていたことが分かる。容認派の住民は、生活環境の向上を求める思いから、ダム建設を容認し、移転を考え始めるようになったといえる。こうして容認派は地権者団体を結成し、建設省との補償交渉に臨んだが、反対派との間での摩擦を生む結果となった。なお、移転の意思表示をした際の親族や近隣住民との摩擦については続く第 4 章でも詳しく議論していく。

続けて、地権者団体とのかかわりが深かった建設省職員、宮本博司さんの語りを取り上げ、ダム容認の立場をとった住民の心境をもう少し多面的にとらえていきたい。1990（平成 2）年から 1993（平成 5）年までの 3 年間、苫田ダム工事事務所長として赴任した宮本さんは、容認派住民の複雑な心境にふれてきた。自分が生まれたころからダムに悩まされてきた住民の存在を知った当時の経験は今も鮮明で、住民の苦しみやダムへの恨みを感じながら、推進側としてダム事業にかかわってきたことは、「ずうっと、死ぬまで何とも言えない気持ち」だと話す。

反対している人たちも地獄です。でも移転していかれた人たちも、反対している人たちと同じか、それ以上に地獄なんですよ。ものすごい傷を負っておられるわけです。行ってはじめて分かった。

この問題は、1957 年に山陽新聞に出て、それからずっとでしょ。私生まれたのは

1952年なんです。私が生まれてすぐの時から38歳でそこへいくまで、ずっとダムで振り回されているわけですよ。

そのことによって、それまで仲良くしてた人たちでも、近所で対立するし、親兄弟でも対立するようになっているわけでしょ。私は38歳で行ったときまで、のほほんと生きてたわけですよ。ずーっとこんなことやってたんだと思ったら、もう何とも言えないよね。

私もダムを進める側の立場なわけですよね。3 年しかおらんから、その時の一瞬しか分からないけど、それでさえ、そこの地元の方々のなんともいえん怨念とかね、感じてたからね。その中で 3 年いて、結果的に（事業を）すすめてきたわけです。これはずっと、死ぬまで何とも言えない気持ちなんです。

あの時私が行って中止にできたかと、常に反芻しているどね。仮に私が「やめましょう」と言うたら、それでひっくり返るような状況じゃあないと思ったんよね。

その当時までは建設省は岡山県任せでみてたんやけども、それやったら早いこと、皆さんがここまで苦しまれてるから、できるだけ早く円満円滑に進めたほうがええんかなと、逃げの気持ちかもしれないけど、思ったわけですよ、その当時[74]。

宮本さんは地権者団体の人々と何度も協議を重ねたが、「移転を決めた人たちも、建設省に対して心を許していない」と痛感してきた。

反対派の人は当然、建設省に「コノヤロウ」と思っているけど、移転を決めた人たちも、建設省に対して心を許して仲良くなったとか、まったく思ってないんですよ。普段は久しくしゃべって、一緒に飲みに行ったりしたら、カラオケとか行って楽しくしてたんですよ。だけど、出て行かれた方も、ものすごく苦しまれている。いまだに傷も癒されていない。それはものすごく感じた。

A さん（地権者団体の幹部）があるとき「岡山県が悪いと言うてるけども、本当に悪いのは建設省やぞ」と言った。要するに、その当時建設省は岡山県の陰に隠れて、矢面は岡山県になってたわけですよ。だけど、建設主体はお前らなんだし、一番悪いのは建設省やぞと（言われた）[75]。

また、宮本さんは、地権者団体の会長だった仲西忠雄氏から怒りをぶつけられた時のことを思い出す。仲西氏の語った言葉は、ダムをめぐって苦しんできた容認派住民の思いを代弁したものだった。

休日に津山の夏祭りがあったんですよ。そこにみんなテントはってやるわけです

[74] 2023 年 4 月 15 日　宮本博司さんへの聞き取りより
[75] 2023 年 4 月 15 日　宮本博司さんへの聞き取りより

が、苫田ダムも例年テントはって、ハンカチ配ったりティッシュ配ったりするわけじゃないですか。私も行って配ったりしてたわけです。

つぎの日に出勤して月曜か火曜日に、仲西忠雄さんがきはった。それで怒られたんです。「俺らが移転で長年苦しんでるのに、お前ら建設省は祭りで何をしてるんだ？」と。ニコニコものを配ったりとかしていたからね。そういわれて「そらそうやわな」と思った[76]。

当時、「苫田ダム銭次第」の看板を設置した解決協議会は、その経緯について「生かさず殺さずでは、将来の生活設計もたたない。早く結論を出し、安心して生活できる状態をつくりだしてほしいのが本心。そのための条件付き賛成の立場を端的に示した」と説明している（奥津町, 2005）。

ダム計画が持ち上がって以降、町内の暮らしは厳しい状況に追い込まれていた。しだいに町内の会社が減っていったのだ。県が町内の会社に移転を誘導したことが、この誘因となった。

町内に仕事が無くなったんよ。県は津山に事務所をたてて、地元の経営者を説得して、「あんたら賛成してくれたら、下請けをやらせてあげるけん」というて。会社が立ち退いたら、働くとこが無くなるけん。従業員なんかお手上げじゃがん。そしたら出稼ぎに出て仕事しょうった[77]。

1979（昭和 54）年 7 月 4 日の新聞には、神田繋夫会長の言葉がある。その言葉には、将来が見通せない暮らしを続けてきた住民の苦しみがにじむ。

苫田ダムの計画が新聞に載ってから 22 年間、計画はずっと続いたままだ。このために水没予定地の者は家の建て替えもできん。いつ立ち退かにゃならんか分からんので、生活はずっと一時しのぎ。それを半生も続けてきたんじゃ。すでに今までがダムの犠牲になっとる。おかげで、この地区には若いものがおらん。みんな不安なから外へ出て行っとる。このまま 5 年も 10 年も今の状態が続いたらみんなが困るだけじゃ。早う決着をつけてもらわなにゃ[78]。

父親が地権者団体の幹部だった武元義和さんは、「たとえ賛成派でも、故郷に対する郷愁の念は必ずあったと思う」と話す。故郷を離れる決断をしたからと言って、うまれそだった土地のことを忘れることはできない。容認・反対の立場の違いはあっても、故郷への

[76] 2023 年 4 月 15 日　宮本博司さんへの聞き取りより
[77] 2023 年 4 月 12 日　駒牧康弘さんへの聞き取りより
[78] 1979（昭和 54）年 7 月 4 日の新聞 （スクラップ記事のため、紙名が不明）

思いは全員に共通していると、武元さんは話す。

宮本さんの話からは、計画判明から四半世紀が経過し、故郷の先が見通せない状況に苦しみ、葛藤してきた住民の姿が浮かんだ。容認派の住民と反対派の住民との間では対立が生まれ、それまで親しくしていた親族や近隣住民と対立を生むこともあった。宮本さんが見た彼らの表情には、自分たちを苦しめてきた苫田ダム事業やその開発主体である建設省に対し、やりきれない思いや怒りの感情がにじんでいた。容認派の住民も、反対派の住民と同様に苦しみ、葛藤を続けてきたことが分かる。

3-2-3　多様な視点から捉える苫田ダム闘争の記憶

ここまでは、反対派・容認派それぞれの視点から苫田ダム闘争の歴史を捉えてきた。しかし、こうした立場は本来明確に色分けできるものではなく、議論するにあたって便宜的に色分けしてしまった点は留意が必要である。また当時の状況を描き出すにあたって、明確な立場を持たない人々、すなわち女性や二世世代、町職員などの視点からもその歴史をとらえることが重要だろう。

したがって、ここからは女性や二世世代、町職員など、反対派や容認派の主体ではない人々（明確に色分けができない人々）の視点から苫田ダム闘争を描いていく。

まずは、結婚をきっかけに奥津町にやってきた女性の視点から、苫田ダム闘争をとらえていきたい。ある女性の語りからは、結婚して奥津町に来た当時、ダム闘争にゆれる状況を目にして驚く様子が浮かびあがる。

> （お嫁に入られる当時は、反対運動でいろいろあるっていうのを聞いてて？）そこは全然聞いてなかったんです。お見合いだったんですけど、そういうのは全然あんまり認識なくって、きたらすごいとしょうるなあと。（ちょっと入ってきてびっくりするような？）ほんまにびっくりした。（中略）うちのお母さんたちは婦人会として反対派のビラをどっかの地区に配りに行くいうて、言ってたような気がします。

一方で、続々と移転を受け入れる人が出始めた時期だったため、反対・容認をめぐってとりわけ気を遣うことはなかったと話す。

> （部落の付き合いで、何か特別気にされたり、神経使うようなことってありましたか）いえ、私自身は全然そういうのはなかったと思います、そこまでね。もう本当に（反対が賛成に）変わり始めるいう頃かね。それこそ株内の人が、賛成してハ

ンコを押そう思うんじゃいいうて、お爺さんに話を言われたりしたんじゃけど、そういう時期でもあったから。そんなに賛成する人がどうのこうのとか、反対でないといけんいうような頭は全然なかった。

当時子供だった世代（＝二世世代）は、移転の決断にこそ関わらないものの、ダムに関して特有の経験をしている。

上野寺[79]の住職、井上陽悦さんは、親に連れられて津山の文化センターまで環境関係のシンポジウムに参加したことを思い出す[80]。

私達も、子供のときに津山文化センターで、いういろんな反対運動の関係を見に行くっていうので。（中略）講演というか、映像をみてってことを経験した覚えがあるんです。小学校低学年でしたかね。「反対ののろしを消さないでください！」みたいなことを言われた記憶があるんです[81]。

また、井上さんは少年時代に父親から、郵便が来ても勝手に判子をつかないように言い聞かされたと話す。誤ってダム関係の手続きをしないよう、注意を払っていた。

郵便物なんかで、受け取りの判子くださいってあるじゃないですか。父親に「勝手に判子つくな」って言われました。何の判子かわからず、子供だったらついちゃうから。ダムの関係のものだったら困るからね[82]。

また、通学路に「苫田ダム阻止」ののぼり旗がたっていたことも覚えている。地域を挙げて反対していた様子が印象的に残っている。

「苫田ダム阻止」ののぼり旗が、各家々に立ってた記憶があります。小学校に、歩いて行く道中にもそういう看板がありました。地域挙げて「苫田ダムは、反対

---

[79] 明徳山上野寺は奥津町（現鏡野町）箱地区に所在した仏閣で、本尊不空絹索観世音菩薩が祀られている。水没を逃れ、現在もかつての趣を残している。

[80] 1980 年代後半ごろから、矢山有作氏、橋本省吾氏など、県南の有識者を中心とした住民運動が高まり、様々なグループが連帯して「苫田ダム反対」を訴える活動が盛んになった。1988 年には、元社会党議員の矢山有作氏を中心とした「ストップ・ザ・苫田ダムの会」が立ち上げられ、インタビューした南條節夫さんも事務局長補佐として参加している。彼らは県外の環境運動家や知識人を巻き込みつつ、シンポジウムなどの啓蒙活動を展開していた。1995（平成 7）年には、筑紫哲也氏、近藤正臣氏、本田勝一氏を招いて、水問題や河川政策の在り方、民主主義を議論するシンポジウム「緑と水とわたしたちのくらしは今…」を開催している。

[81] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

[82] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

だ！」っていう雰囲気がもう絶対多数でしたよ[83]。

写真 28　苫田ダム阻止ののぼり旗　1990（平成 2）年（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

宮元貴広さんは、小学生の頃、友人との間で移転の話題になったことがあると話す。友人から「君のうちは賛成？反対？」と問われたとき、自分の家庭がどちらの立場なのかということに、初めて興味を持ったという。自分の予想に反して、祖父母がすでに移転受け入れを決めていたことを知り、驚いたそうだ。

「たかちゃんでるん？」って聞かれたりする。その子は「うち反対派なんで～」とか言ってましたけど、僕は「よう知らん、聞いてみる！」とか言って。

最初その話になったときは、出るとか出ないとかには、まだ無頓着だったんですけど、その同級生から「反対派なんだろう？」って聞かれて、僕反対派なのか賛成派なんかも分からんかったんです。でもなんか反対派の方が、正義みたいなところがありましたね。家帰って祖母に「うちって反対派なんよな」って聞いたら、「何を言っているの、うちは出るよ！」って言われたから、「ええ出るんじゃ！？」って。ちょっとびっくりしたのは覚えています[84]。

町職員もまた、反対運動に関して特有の経験をしているといえる。長年奥津町職員だった男性は、役場内にはダムが「タブー」な空気があったと語る。公的立場にいる職員は、ダムに関して意見を言うことが憚られた。

ダムの話は一切禁句でした。ダムの話はおまえらがする話じゃないということで、先輩とか議員さんとか、町民の方が、職員がやーやーいことじゃないいうて。ずっ

[83] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより
[84] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより

と最初そういう雰囲気はありましたね。ダムはさせんのじゃけん、そんな話をするなというのが、一般的な考えでした。

ここまで、女性や二世世代、町職員など、反対派や容認派の主体ではない人々（明確に色分けができない人々）の視点から苫田ダム闘争を描いてきた。最初に取り上げたように、結婚で久田地区にやってきた女性たちは、闘争に揺れる町内での暮らしに戸惑いを感じることがあり、結婚後に築き上げた人間関係に少なからぬ愛着を感じている。一方で彼女たちは、「そこで生まれ育った住民の感情ははかり知れない」と語ることも多かった。また、奥津町に生まれ育ち、就職や結婚を機に町外に離れた女性たちは、闘争の記憶こそないものの、故郷が失われたことへのやるせなさや悲しさを吐露していた。

また、闘争の時代に子供たった世代（現在は 50~60 代）は、反対派・容認派の活動に関わって人間関係の緊張感や軋轢を感じた経験は少ないといえる。しかし、こうした人々もまた、苫田ダム闘争に関して特有の経験を持っている。故郷の光景に対して純粋な愛着を持ち、両親や周りの大人の姿を鮮明に覚えているようだった。

3-2-4　開発主体との対話や移転受け入れに伴う摩擦

本節後半では、開発主体との対話や移転受け入れにともなって住民間に生じた摩擦に焦点を当てていく。事業の受け入れをめぐっては、地域内で対立が生じると指摘されてきた。浜本（2015）は、ダム事業の予定地の局面における被害として、「地域内の人間関係悪化・対立」を挙げている。

奥津町においても、**②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年**　の時期に差し掛かると、反対・容認の立場が顕在化し、対立や摩擦が生じた。

ある男性は町政の行き詰まりを感じて移転を決めたが、まだ反対を続けていた親族との間に軋轢が生じた。かつては一緒に農作業をしていたが、しばらく出入り禁止になってしまったという。

移転を決めた住民が、反対を続けている住民に移転を促すこともあった。商店の店先で店番をしていた男性は、来客から移転を執拗に勧められたことがあるという。

「ぽんと判子つけえ」とからんでくるおっさんがおったんです。親父の世代のおっさんが。（その人が）「話が進まんがな、こんな田舎に追ってもしょうがなかろうがな」と言って。

終盤まで反対にこだわり続けた牧野欣功さんは、早くに移転した知人から移転を勧めら

れることがあったという。

> 友達が「はよ出てこいよ！」という。「よっちゃんはよでてこいや」って言って。わしを賛成にさせようとしてな。悪びれん感じで「ええぞ」というんでな。2、3 人そういう話を言われたことがある[85]。

容認派に対して批判的に話す人もいた。ある男性は「銭次第」の看板をみて「気が悪い」と感じたと振り返る。

> 「苫田ダムは銭次第」だ言うて、看板も出してな。それを見て、気が悪いなと思って。いわゆる賛成する組織ができたわけ。「銭次第」で固まってな。逆に阻止同盟は看板立てて「絶対反対」だよね。それで反対と賛成とでひどうなってきてな、戦争と一緒じゃな。

ある男性は、反対派・推進派双方の住民の直接的な軋轢はなかったと話すが、町政の混乱期には、容認派が町長を責めあげていたと話す。語りからは、容認派・反対派は部落やコミュニティで棲み分けがあったあったため、直接衝突することは避けられたと考えられる。一方、町議会では両派の衝突が激しく繰り広げられた。

> （推進派の方々と軋轢はあったんですか？）いや、もともと付き合いがないんで、直接軋轢というのはなかったですね。こっちが出ていかん限りは。だけど推進の方はその議会とかにそういうのを、もう半ばやくざみたいな人間を送りこんで、町長をせめあげてね。

一方で、早期に移転した住民は、周囲の住民から後ろ指をさされ、批判されることがあった。部落総出で反対をしていた当時、対話の意を示せば、周囲からの非難にさらされることになった。ひとたび対話の意を示した住民は、集会への声がかからなかったり、回覧板が回されなかったりしたという。ある住民は、こうした仕打ちをしたことについて、近隣住民から謝罪を受けたことがある。「強制的に（悪口を）言わされた」と泣きながら謝られたという。

反対運動について、ある住民は「強制的な形」と表現した。濃密な人間関係に立脚した農村社会の暮らしは、同調と排除という形で牙をむくことがあった。こうした状況の中で立ち上げられた容認派団体の活動は「各家庭の生活設計」を獲得する動きだったともいえようか。

昭和 54 年 3 月 17 日読売新聞の記事に「人権侵害がらみ“ダムの町”　脅しや不買運動

[85] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

協力金 100 万円で対立激化」という記事がある。長野士郎知事の現地訪問以降、ダム容認表明者への嫌がらせが相次いだ。「100 万円を借りた一人暮らしの老人が、もう地区の通知などをしてやらぬと、ダム反対派の人に言われた」「商店の不買運動が行われている」「家に放火してやると脅され、津山署にパトロールを頼んだり、あわてて火災保険に加入した人がある」などの記述もあった。

このように、ダムをめぐる世論形成や反対運動の展開は、ムラ社会特有の人間関係の上に成り立っていたといえる。こうした構図は町政内部にもあり、町長は早期解決をめざす容認派とダム阻止を譲らない阻止同盟の板挟み状態だった。（3 人の町長が立て続けに辞任した背景にはこうした力学があった）住民の語りからは、当時のピリピリとした空気感が浮かび上がる。生活の見通しが定まらない不安の中にあっても、「推進側との対話」や「移転を前提とした将来設計」が抑圧され、いざ移転を表明すれば周囲からの非難にさらされかねないという、緊張感ある状況が想像できる。

上野寺の先代住職（お話を伺った井上陽悦さんの父）は、檀家との付き合いがあったため、容認・反対の意思表示に慎重だった。当初は地域全体が反対の立場だったため、反対の意思を示していた。しかし次第に移転を決断する檀家が出てくると、反対運動に積極的にかかわることはなくなっていった。

> （お父さんは明確にどちらかの立場だったんですか？）最初はもちろん、とても反対という立場で、絶対反対というたてり（原則）ではいたと思います。けど、やっぱり地域が賛成反対で割れてくると、反対の活動はそんなにしてなかったと思います。寺として檀家さんがいらっしゃいましたから[86]。

こうした語りからは、緊張感に満ちた地域社会の様相が想像されるが、一方で（3 章 1 節で述べたように）「対立や摩擦は感じなかった」という声もある。この捉え方は人によって様々である。例えば、反対運動に深くかかわっていない二世世代（苫田ダム闘争の間幼年・少年・青年期を送った世代）は、当事者世代に比べて「対立や摩擦」の記憶が薄い。ある住民は、当時の状況について、「激しい対立というのは感じなかった」と語る。

> 僕が物心ついたときから、苫田ダム問題がワサワサしてました。でも、皆さんが想像するように、村の意見を二分して対立するとかいうのは全く感じなかったな。賛成派・反対派いろいろおりましたけど。村の生活そのものは平穏でした。反対派とはものを言わんとか、あいつは賛成派じゃけん村八部にしちゃるとか、そういう感じは全くなかったね。（中略）よく村を二分して大騒動というような書き方をしますね。創作といったらあれだけど、そういう方が話が面白いから、そういうふうに描かれるんだろうと思います。田舎の町で「おまえんところは、もう賛成派じゃ

[86] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

けん、何か仕事はしゃあせん」とか、そんな構図ができてたら、子供たちの間にも絶対でてきます。だけど、高校生まで学校でそういうことが話題になることも全くないし、議論になることもない。あいつは反対側じゃけ、あるいは賛成派じゃけん、どうこういうのは、全く記憶にないんです。

中学 3 年生まで奥津町に暮らしていた古林勇二さんは、そこまで激しい闘争を見た記憶はないと話す。「僕らの世代は子供だから」と世代による感覚の違いを要因にあげた。

僕はね、中学 3 年で津山にでて、凄まじいその渦中におらなんだから、分からんですよ。だから、すごい激しいと一般に言うんだけど、ピケを張っとるとか、声を出すとか、鍬持ってとかいうのは見てないし。言葉としては知っとるけど、そう強く感じなかったな。僕らの年代は子供だから、（阻止闘争に参加した経験は）少ないんじゃないかな。親がするのは見とるけどね[87]。

本節後半では、開発主体との対話や移転受け入れにともない、住民の間に生じた摩擦について焦点を当ててきた。町内では阻止同盟を中心に反対運動が展開される一方で、対話の意思を示す容認派が現れた。反対の熱が強かった当初は、対話の意思を表明することで近隣住民からの非難の対象になることがあった。容認派に回覧板を回さないなどの行為が行われることもあり、地域社会には同調と排除が生まれたといえる。また、親族の間の関係性にも亀裂が入ることもあった。この過程からは、農村社会の豊かな人間関係が、ダム闘争によって分断される様子が見て取れる。一方で、一部の住民からは対立や摩擦を感じなかったとの声もあり、このことはダム闘争をめぐる社会的ストーリーの多様さと複雑さを示している。

3-2-5　小括

本節では、ダム建設に揺れる奥津町行政や、反対運動、地権者団体、住民の暮らしなどについて、町史などの資料や住民の語りをもとに描いてきた。ここまでの議論を総括する。

本節前半では、ダム建設に反対する地元住民の立場や思いを描いたが、反対運動の具体的な活動としては、岡山県庁や津山の商店街などで他のメンバーとともに活動し、ダム建設に反対の声を上げた話、吉井川下流域の地域を訪れてダム反対を呼びかけた話などが聞かれた。住民の話からは、ダムを推進する県当局に対して感じた悔しさや疑念が垣間見える。活動の動機としては、先祖伝来の地を守りたいという郷土愛がある。こうした思いには世代間での違いがあり、上の世代ほど長く故郷に住んできた経験があり、地元を離れることへの抵抗が大きかった。一方、若い世代の住民は反対運動と接点がない場合もあった。

[87] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

また、反対・容認をめぐる住民の意思決定や意思表示には、反対運動の動向や近隣住民への配慮があったと考えられる。反対運動に参加した住民の心の中には、様々なジレンマがあった。周囲から反対に対する姿勢を疑われ、それがきっかけで反対運動に参加したという話や、知事に対して罵声を浴びせることを強いられたという話からは、地元社会のプレッシャーに戸惑う住民の姿が浮かび上がる。

後半では、ダム建設に容認の住民や容認派の動き、論理、そして容認・反対双方の摩擦に焦点を当ててきた。早期に移転を受け入れたいわゆる「賛成派」の住民は、生活環境の向上を求めた。不便な生活環境を改善したいという思いから、ダム建設を容認する立場を取った。容認派は地権者団体を結成して建設省との補償交渉に臨んだが、反対派との間での摩擦を生む結果となった。特に「②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年」の時期は反対派への同調圧力が強く、ダム容認表明者への嫌がらせや不買運動が相次いだとされる。こうした緊張感の中、双方の対話が難しい状況が生まれ、町役場においてもダムに関する意見を言うことが憚られる空気があったとされる。 寺の住職は、檀家との関係があるため、容認・反対の意思表示に慎重だった。

また、町議会においても双方の立場の激しい攻防が巻き起こり、町長は県当局・容認派と阻止同盟との間で板挟みになった。町長 3 人が立て続けに辞任した背景には、これらの複雑な力関係が影響していた。

一方で、こうした摩擦や衝突の経験は、経験している住民と経験していない住民がおり、若い世代になるほど衝突の経験が少ない傾向にある。

以上のように、住民のダム闘争に関する社会的ストーリーは多種多様で、その切り口によってさまざまな断面がみられるものだ。しかし苫田ダム闘争が、長きにわたって住民の人生に影響を及ぼしていることは、どの住民にも共通していえることだろう。特に当事者世代は多くの時間（ある住民は「人生の半分がダム闘争」と話した）を阻止同盟の活動や、移転をめぐる意思決定に費やしてきた。

4　多様な移転受け入れの過程と移転後の暮らし

4-1　移転の決断と移転の日

ここまでは、各住民の移転開始までの活動や心境を描いてきたが、本章では移転受け入れの過程やその後の住民の暮らし、地域社会の様子に焦点を当てていく。浜本（2015）は「生活基盤の模索の葛藤」を「移転後：生活再建期局面」の被害として挙げている[88]、本章では、「予定地の局面」と「移転後：生活再建期局面」を横断的にみていくことになる。

住民が故郷を離れる決断に至るまでには、幾多の逡巡や葛藤、そしてその結果としての心境変化がある。本章ではその内実を詳しく描き出していきたい。

移転の時期は住民によってさまざまで、時期によってその性格が異なる。住民の移転が進んだのは、4 章で示した時代区分　**②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年　および、③町政転換後、反対派住民の移転が本格化したころ**　の時期になる。なお、**①ダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第一期長野県政**　の時期においてはダム計画が本格化しておらず、「当時はまさかできるとは思っていなかった」という声が一般的だ。

②の時期においては、町内半数以上の住民が、補償交渉の先陣を切った地権者三団体（苫田ダム地権者協議会、苫田ダム同志会、苫田ダム対策研究会）に参加し、移転の検討を始めた[89]。こうした住民は、反対派住民から、「賛成派」「推進派」と表現されることが多い。

③の時期においては、上記の地権者団体に参加しなかった住民（いわゆる反対派）も移転を検討し始める。当時の森元三郎町長がダム建設容認の立場をとった「町政の転換」や、移転が進み、故郷の風景の変化を見たことがきっかけになっている。

移転に際して住民は様々な葛藤や苦労を経験している。また一方で、住民は移転に意味を見出し、前向きにとらえて決断をしていたようにも映る。本章では「移転の決断」「移

---

[88] 浜本（2015）は、戦後日本におけるダム事業をモデル化する作業を行っている。ダム事業の被影響者にもたらされる犠牲や苦痛を念頭におき、ダム事業を①予定地の局面、②生活再建の局面、③水源地域活性化の局面、④事業見直しの局面、⑤事業中止の局面の 5 つの局面に分類した。それぞれの影響について、①地域内の人間関係悪化・対立、畑・森林・住宅・公共施設など地域社会の荒廃、将来の不安/生活設計への影響、②生活基盤確立への模索/再就職、新コミュニティへの適応（生活不適応・故郷喪失感）、再移転/残存地利用、③施設およびイベント運営、新たな時代環境への対応、高齢化と世代交代、④是非論争への疎外感、移転理由の揺らぎ、⑤慰謝料要求と行政不信、人間関係・社会関係修復、地域再生を挙げている。

[89] 1986（昭和 61）年に開かれた県議連と推進派の初懇談の時点で、苫田ダム地権者協議会 231 戸、苫田ダム対策協議会 38 戸、苫田ダム同志会 30 戸の合計 299 戸が参加していた（奥津町, 2005）。

転の手続き」「それぞれにとっての移転」という 3 つのテーマを軸に、住民の移転受け入れの過程を描き出していきたい。

まず本節では、「移転の決断」に関するエピソードを取り上げていく。多くの住民が町政の行き詰まりを感じる中で、当初示していた反対の意を翻し、移転を検討し始めた。インタビューした住民の中にも「もうだめだと思った」「生活できなくなっていた」という語りがいくつもあった。

前章で区分した時代区分、②ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年　に移転した住民は、自分の家族の将来にわたる生活設計を考え、合理的な決断として地元を離れる選択をした。武元義和さんは、父親の決断の背景には「子供の世代のことを考えて、可能性がある道を選んだほうがよい」という考えがあったという。

> 治水利水が必要だったかどうかいうのは、別問題だからね。その当時、理解したのは、国の事業ならせにゃいけんというのが一つ。それから将来のことを考えて、ここの山間の鄙(ひな)びたところにおっても、自分は食うていけるけど、それよりも、可能性を求めた方が良いという考えだったと思います。

早期の移転では、周囲の目を気にすることもあった。比較的早期に移転をした男性は、「周囲の住民から、陰口を言われたこともあった気がする」と当時を思い出す。

> 親のところには、不幸の手紙が来たことがあったなあ。（それは早く出たからっていうことですか？）かもしれんとかいって、勝手に思ってましたけど。わざとふるえた筆跡で書いてたね。気持ちが悪いからすぐ処分したんです。
> （表立って対立したことはありますか？）それは無かったと思うけど、まだ反対が家のまわりに多かったですからね。なんやかんや陰口とか言ってたかもしれないですけども、仕方ないことだから放っとかんと。いちいち構ってたらいけないね。

反対の意思を強く持っていた住民（反対派）から、早期の移転住民（容認派）に対する心境は複雑だ。牧野浩一氏は、ダムを容認する考えはなかったが、容認派の心境も理解できると語っている。一方で、「ひとの弱いところ」を衝く行政のやり方を批判する（和賀, 2001）。

> でも、賛成派を敵視できませんでした。心情もわかります。子供は大都市に住んでいる。やがて、向こうで同居するかもしれない。ならば、山奥の古い家を国が破格の高値で買うのは、千載一遇の好機。補償金を手土産に村を出よう。この夢をはなから間違っていると非難はできないでしょう。許せないのは国家や県のやり口。

ひとの弱いところを衝いてきたのが行政だったということです[90]。

前章で区分した時代区分、③町政転換後、反対派住民の移転が本格化したころ　においては、人口が極端に減り、商店や診療所がなくなったことで、町内が非常に不便な環境になった。このことは移転のきっかけになったと考えられる。また、植木などを盗む空き巣の被害があったという話も聞かれた。ある男性は、生活環境が悪くなり、高齢な両親が生活できなくなったと話す。

両親も歳をとって、生活できんようになった。店もない、病院もない、周り近所には誰もいないということで、夜は賛成した人がどんどこどんどこ脅しにくるし、泥棒がはいって蔵なんかも破られるし、植木なんかもごっそり掘っていくのがおるしね。

反対の意思を表明し続けた住民の中には、故郷に暮らしていけなくなったことへの悔しさがにじむ。次の語りは、ダムほとりに移転し余生を送った、藤田あつ子氏の語りで、夫の藤田薫氏のことを思い出している。藤田薫氏は奥津町議を 4 期つとめ、阻止同盟副委員長としてダム反対の意思を表明してきた（和賀, 2001）。

団結は堅い。そう思うとりましたらなあ、知らんまに崩されていきよりましたが。終始一貫、必要性のないダムにはどうしても賛成できません。でも、まわりが無人の荒野になって、住めんようになったから引っ越しただけ。納得して出たわけじゃありません。そうお父さんは言っておりました[91]。

しだいに住民の移転が進み、家が取り壊されていくなかで、住民は寂れていく故郷の光景を目にしてきた。中学卒業後から四国の学校で寮生活を送っていた井上陽悦さんは、「帰ってくるたびに家の明かりが少なくなっていくのを感じた」と話す。

長期の休みとか、帰ってくるたびに家の明かりがちょっとずつ少なくなっていくのは分かりました。帰るたびにここの家なくなってるわとか、この家もなくなってるわとか、変化が見えました。地元に帰ってきて、同級生が引っ越したらしいねていうような声もちらほら聞こえました[92]。

---

[90] 和賀正樹,2001『ダムで沈む村を歩く』（はる書房）に記されている牧野浩一氏の語りより

[91] 和賀正樹,2001『ダムで沈む村を歩く』（はる書房）に記されている藤田あつ子氏の語りより

[92] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

写真 29　取り壊し作業の様子（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

写真 30　取り壊し作業の様子（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）

古林勇二さんは転勤で津山に居を構え、農繁期の手伝いなどでたびたび地元に足を運んでいたが、帰るたびにダムの工事が進んでいく様子を目にしてきた。

> 昔は農繁期には、まだ小さかった自分の子供を連れて（生家に）帰っていたなあ。帰るたんびに、どんどんダムの工事が進んでいた。道が日に日に仕上がってきました[93]。

[93] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

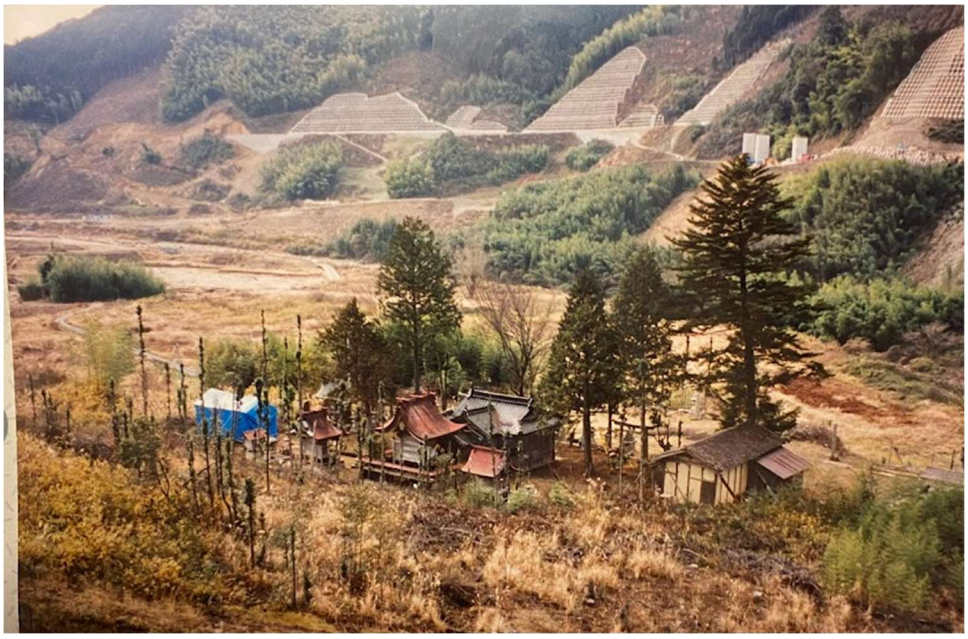

写真 31　工事が進む湖岸道と久田神社

移転は子供世代の進学に合わせて行われることも多かったようで、瀬尾五男さんは、津山の高校に行くことになった長男の高校進学のタイミングで移転をした。「とにかく子供の教育が頭にあったけ、小学校はすぐそこだし、高校は津山に自転車でいけるし」と話す。病気だった母親にとって、通院が不便だったことも理由として挙げられた。

井上陽悦さんの生家である上野寺は移転を免れたが、自身の学生時代が移転の過渡期にあたる。多くの同級生が、中学校を卒業し、町外の高校に進学するタイミングで移転した。

> だから私達は、水没地域の子供らが自転車で通ってた時代なんですよね。卒業すると同時に、弟とか妹とかおったとしても、それを起点に、転居することが増えたように思いますね[94]。

これまで反対で団結していた阻止同盟から抜け、方針を転換するとき、住民は周囲に気を遣うことが多かった。いまだ反対している住民との摩擦も想定され、心細さもあった。同じ時期に移転受け入れをする住民とタイミングを合わせることもあったようだ。

> 1 軒だけじゃ問題が出てくるから、強い反対のとことかいろいろあるから。株内同士とか懇意のところが一緒にまとまって、パッと変わっていきょうった[95]。

[94] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより
[95] 2023 年 9 月 7 日　藤田豊司さんへの聞き取りより

山本勲夫さんは、父が移転を決意した経緯について、周囲からの働きかけがあったと話す。また、山本さんの父は地権者団体に入ることで移転について情報収集をしていた。

> 本家が森林組合の専務か何かだったんじゃないか。その人が早う出てしもうたわけじゃ。それで家も壊してしもうた。それで何とかせにゃいけんと思うたんだろう、それで地権者団体に入って、いろいろ様子聞いてた。あれには当時付き合いしょった人、河内高倉の人が多かったん。その人らがよう家にきて、何とか考えないといけんぞと（言っていた）。息子（＝勲夫さん）が反対ばあしょうるんじゃ言うても、息子は（町外に）でとるわけじゃけえな、息子は息子で生活しょんじゃから、あんたの生活が成り立つようにせないけんいうようなことを、だいぶ言われたらしいんよな[96]。

家業を続けていた住民は、事業を続けるかどうか悩んだ。牧野酒造の牧野雄一さんは移転を決めた当時、父浩一氏と母と三人で家族会議をしたことを思い出す。浩一氏は事業を続けることに不安を抱えていたが、最終的に「続けたい」という思いがあった。息子の雄一さんには、移転は事業再生の契機になるという前向きな考えがあった。

> それにそもそもその頃、酒屋がものすごく落ち込んどって、親父もなかなか決断せなんだんです。商売辞めるかどうかいうこともあったんで、酒屋をそれまで約二百何十年やっとんのに、それをダムができるけんいうて潰されるんが、やめるんは自由なんだけど、要するに潰されるようなもんですから。だからどうしようかと。
> でも、このまま久田でやっても酒屋は持たないだろうけど、移転して新しいとこで設備変えてやれるんなら、いけるんじゃないかって思いました。やめてしまったら、どねえにもならんから。日本酒の免許な取れんので、新規には。1 回止めたらおしまいなので[97]。

もとは「一致団結して苫田ダムを阻止」することを誓い合ったもの同士、移転をする住民は、残る住民に対して申し訳なさや後ろめたい気持ちがあった。移転する際は隣人に黙ったまま移転することも多かったようで、最終盤まで故郷に残った奥利喜夫さんは、こうした状況について寂しそうに語った。

> だいたい（移転を考えているのは）分かりますね。知らんまにトラックが来たなと思ったら、知らん間におらんなる。ほんならとあいさつも何もないですね。「もうちょっと頑張るんじゃな」とかそういうのもなしに。でも、生まれてからずっと

[96] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより
[97] 2023 年 11 月 6 日　牧野雄一さんへの聞き取りより

皆さん付き合いをしてきたのにね[98]。

移転日の話も聞いた。古林勇二さんは、移転日に家族で集まって、いろいろと片づけをして実家との別れをしたそうだ。

移転日は晴れだった。春の彼岸で山桜が咲いていた。両親はずっと以前から片づけを続けていた。庭木を切り、池も埋め、井戸は神官に頼んで祈とうも済ませていた。墓はスコップで掘り起こすわけにはいかないので、お寺さんに拝んでもらった。幸い母の実家が石材店なので頼んだ。墓は僕の住む町内の共同墓地に決めた[99]。

ある住民は、移転の日の光景を何度も夢に見ると話す。家財を搬入し終え、掃除をしている光景が浮かぶという。移転の日は印象的な出来事なのかもしれない。

なんか夢を見て、家の家財を運び出して、掃除をして、ごみを集めてっていうのを、リアルに目の前にあるような夢を、3回か4回くらいは夢に見た。じゃから私、大事なものを忘れたんじゃないかと思って。

他にも、家の取り壊しについての語りがある。当時小学生だった中谷由圭利さんは、移転への抵抗感と生家への愛着を感じていた。家の取り壊しに立ち会いたかったが、学校があったため行けなかったと話す。

最終盤まで故郷に残った住民もいた「なんか出る気がしなかった」と話す。仕事終わりに自宅の田畑で農作業をしたり、移転住民が手放して荒れた土地の草刈りをしたりして過ごしていた。

最終的に新居がたってからも、ひっさ（長い間）出なかったですからね。完成してから1年くらい。周りに人がおらん状況でも、なんか居心地がよかった。

家族も「出ようか」というのは誰もおらんかった。みんなどねに思っとったかわからんけど。わしが言わんから、女房も気兼ねしとったんかな。最後、水をためますからいつまでに出てくださいというのを言われてた頃で、大雨が降って水がたまり始めてありゃまあと思ったこともあった[100]。

日原道子さんは、水をためたダムの湖を家族で見に行った時、涙が流れたと話す。故郷が水に沈む様子を見ると辛かったという。両親は既に亡くなっていたが、「両親に見せた

[98] 2023年4月20日　奥利喜夫さんへの聞き取りより
[99] 2023年10月26日　古林勇二さんへの聞き取りより
[100] 2023年4月20日　奥利喜夫さんへの聞き取りより

ら、つらかっただろうから、見せなくてよかった」と振り返る。

本節では、奥津町の住民たちが移転に至る決断のエピソードやその背景について描きだしてきた。住民の移転が本格的に進んだ時期は、②ダム計画を推し進めた第二期長野県政から、森元町長がダム容認に傾いた 1990 年以降、および、③町政転換後、反対派住民の移転が本格化した時期であった。早期の移転者は、家族の将来や地元の状況を考慮して合理的な決断を下した。早期の移転者は周囲の目を気にすることもあり、移転を決断する際、同じ時期に移転する住民同士で相談し合ったり、タイミングを合わせたりすることがあった。

しだいに、反対派も含めて多くの住民が町政の行き詰まりを感じ、反対の意を翻して移転を検討し始める。生活に非常に不便な状況があり、移転を迫られた。こうした移転者は、移転後もダムを容認する気持ちはない場合が多く、故郷に暮らしていけなくなったことへの悔しさや寂しさがにじんでいる。

移転の際には、反対派から離脱することで周囲との摩擦が生じることもあった。移転住民からは、移転後も故郷のことを思い出し、寂れていく様子を目にする住民がいた。移転の日や家の取り壊しに関するエピソードが語られることもあり、これらの瞬間は住民にとって印象的で感慨深いものだったといえる。

4-2　移転先の決定と生活再建に向けた準備

ここまで、移転の決断に至るまでの心境、あるいは故郷を離れる場面における住民の感情を描いてきた。一方で、住民はひとまず移転を決断したあとも、移転先探しや新居の新築、補償金の使い道をめぐって様々な意思決定の場面に直面する。本節では、そうした移転決定後のさまざまな苦労の様子を描き出していきたい。

移転時に非常に重要な問題が、移転先の決定であった。終盤まで「苫田ダム阻止」を町是に掲げていた奥津町政は、移転者のための窓口を開かなかった。出先の事務所にいる県の職員が面倒を見てくれたが[101]、移転先は自力で探すしかなかった。

> 県の出張所があって職員が張り付いていたから、手続きのてご（手伝い）をしてくれた。奥津町はひどうせんわな、出ていく側の（世話）はな。だから、業者に頼まなければ仕方がない[102]。

---

[101] 苫田ダム工事事務所は移転先の選定について「その面積、形状、位置など、それぞれ皆様の個々の事情により異なり、非常に複雑な問題が介在する性格のものですから、皆さま方でお求めいただくことが最良の方法と考えます」としている（苫田ダム工事事務所が配布したパンフレット「用地補償のあらまし」より（配布年不明））。

[102] 2023 年 9 月 7 日　藤田豊司さんへの聞き取りより

移転者の多くが奥津町の隣の旧鏡野町[103]や津山市[104]などに移転する一方、地元旧奥津町に残る住民や、岡山市など県南地域、および県外に移転する人もいた[105]。

多くの住民が移転先に選んだのが、近隣の旧鏡野町や津山市である。移転先の選定においては、学校や病院などの施設や小売店に近く、生活に便利であることが重視されたと考えられる。

土地を手に入れる過程において、仲介者の紹介で土地が選ばれることも多かった。あるいは母方の実家など、親戚が暮らしている土地を選ぶこともあった。

> 私の姉がそこへ行っとるんです。嫁いだ先の T いう姓があるけど、そこの田んぼを貰ったわけ。親父が「もしダムで出るんじゃったら、T に無理を言ってもらえ」いうてな。お姉さんが行っとるとこは、大百姓じゃけえな。そこの田んぼをわけて貰えいうて、そういう話をしょうった[106]。

なかでも鏡野町瀬戸地域には、ダム移転者に向けて瀬戸団地と呼ばれる団地が整備され、ここへ移転する住民が多かった。団地に移転すれば、土地の造成や上水道などの整備、移転先での人間関係構築などへの不安が他の住民に比べて少なく、周囲に同郷者が多いという安心感もあった。

> できるならなるべく知った人と、というのと、付き合いのある人がそこを造成していたから。あと、瀬戸団地には水道が通っていたのもよかった。一から水道ひくのは大変ですからね。地元の人が田んぼをなかなか売ってくれない、宅地にさせてくれないとか、（他のところではよく聞く話だが）瀬戸団地では全然なかった[107]。

住民の間には、移転時期や移転先について近隣住民との間で相談し合う動きもあったようだ。宮元貴広さんの祖父母は、懇意にしていた近所と話を合わせて移転をした。移転先を選ぶにあたって、同郷出身者が多い鏡野町を選んだ。

> これも祖母が約束してたという感じですけど、目の前の N さんとか、おばあちゃんとおじいちゃんがおられて、うちのおばあちゃんが当時仲よかったので、家族ぐるみの付き合いをしようやみたいな感じでした。N さんがおるからここでても安心

---

[103] 古川地区を中心におよそ 100 戸、同地区は久田から南に 3ｋｍ。
[104] 大都市近郊のニュータウンにも似た東一宮、隣接する津山市小原に二十数個が集まる。
[105] 初期は 10 戸が岡山市北郊、山陽町の新興住宅地、岡山ネオポリスに集団移転。これを嚆矢に、全国に散っていった。子供を頼って鹿児島、群馬に赴いた老夫婦もいる。岡山市、京阪神、東京周辺に合わせて 40 数戸。
[106] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより
[107] 2022 年 10 月 9 日　武元賢治さんへの聞き取りより

だと、祖母はそう思って出てきたんだと思います。毎日のように行き来してましたし。

祖母や祖父は、周りに知った人がおるところがええなと言ってました。津山とかだと、全く知らない人の土地に行くようになっちゃうけど、鏡野にはでる人が多かったので。やっぱり知ってる人のところに出るんが一番いいかというのが、鏡野に越す理由じゃないかなと思ってます[108]。

ダム湖畔に移転した家を訪問した際、屋敷の移転の過程、ダム工事の様子などを収めたたくさんの写真を見せてもらった。かつての景色や変わりゆく故郷の様子を記録した写真には、愛郷心がにじむ。

また、年中行事の様子を写した写真もあり、とんどやお日待ちで集まる人々の笑顔がみられた。移転後の新居でも、かつての人間関係や風習を続けていたようだ。部落の交流や伝統への愛着、それらを守る使命感などが、湖畔への移転の動機となったのだろうか。（写真を撮った本人はすでに他界している）

また、父親が町内の移転にこだわり、河内地区の山間に移転した堀内一二三さんは、地元に移転した理由について語る。山仕事が好きだった父親が、市街地には出たくなかったのだろうと話す。

元気でしたよ、父親は森林の仕事をしてたんですよ。いろんなとこの枝打ちをしたりとかね。父親は、あそこはどこの家の山じゃとか、よく知っていた。

山が好きなんで、大体街に出るのがあんまり好きじゃなかったみたい。津山にはやっぱり住みたくないの。やっぱりこういう田舎のこういうとこが好きだったんだ思いますよ。出なんだということはね[109]。

しかし、旧奥津町にとどまった住民はごくわずかとなった。その大きな原因として、町が町内移転の窓口を開くのが遅くなったことがある。これまで述べてきた通り、奥津町は1990（平成 2）年の町政の転換を迎えるまで、一貫してダム反対を貫いてきた。そのため、ダム建設を前提とした長期振興計画の策定は見送られ、県が当初青写真を提示していた町内の大規模な団地整備も実現することはなかった。また、住民に話を聞くと、移転先には交通や買い物の便が良い土地を望んだ人が多かった。

ある男性は、町が窓口を開かなかったため、しびれをきらして移転を決断したと話す。

奥津町が早くに振興計画いうのに乗ってたらいいけど、ダム反対の町是をつくって窓口をひらかなかったから、宅地造成も何もできない。ほいでそこに残っとるの

[108] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより
[109] 2023 年 9 月 9 日　堀内一二三さんへの聞き取りより

がダムの横へ 4 軒あるゆうたろ、それがあるだけで。〔岡山県が作成した振興計画の資料をみながら〕住宅いっぱい作るような形になっとるでしょ。だけど窓口開かんから、みんなしびれを切らしてな。だから私らあ残るかようったんじゃけど、はじめはな。だけど窓口を開かないから、こういう計画が全然出てこないわけよ。

移転した先で、地盤の造成や合併浄化槽の整備、農業用水路の整備などに腐心したという話も聞かれた。藤田豊司さんは、当時の苦労を鮮明に語った。藤田さんは知人の紹介で土地を売ってくれる地権者を探し、現在の居住地にたどり着いた。農地だった土地をかさ上げするのには時間がかかり、公共下水道が引かれていないので、周囲に引っ越してきた移転者とともに、合併浄化槽を整備したという。

僕らも仕事の上で、知り合いもおったりするけん、この辺なんぼでも売るようるでっていう話聞いてな。土地改良区の世話してる人がおったんよ。いろんな売りたい人がいっぱいおるだろうから、そこ行って聞いてみろと言われた。

それでここの人から「わしの田んぼがそこへあるんだけど、よかったらここを買うてくれ」と言われて、ここを買うた。

その頃は公共下水道がないから、自分で引かないといけない。地元の農業排水路もそのころは流しちゃいけないと言われていた。だから、数軒で合併浄化槽を作って、川へ流すようにした。後から出た人は、農業排水路に流すようになったけどね[110]。

ちなみに、藤田豊司さん宅の周辺にはダム移転住民が集中しており、移転者が新しい町内会を立ち上げた。話によると、単独で移転先の部落に溶け込むのは苦労が大きいため、同郷出身者がいるこの土地を選んでやってくる住民が多かったのだという。

県南に移転をした山本勲夫さんは、移転先の手続きで苦労した。建設の許可がなかなかおりず、介護が必要な父親を早く移転させるため奔走したという。仕事をしながら複雑な移転の手続きをするのは、大きな負担だった。

1 年半くらいの間、県と喧嘩ばあしょうったんじゃ。融通が利かんのんじゃ。「早くしてくれ、早くしてくれ」といって。親父も体が弱って、奥津で一人で生活しているから、早うこっち連れてこにゃいけんと思って。

それで、女房もわしも（奥津に）毎週帰りょうったけどな。面倒みきれんようになるから、こっちに出てこにゃいけんといって、急かしたんだけども、結局年末のギリギリになってここへ来たんじゃけん[111]。

[110] 2023 年 9 月 7 日　藤田豊司さんへの聞き取りより
[111] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより

移転住民は家の建設に際しても、家族の状況を考慮して様々な検討をしている。補償金を使って建てた家は大きな家が多く、「ダム御殿」と呼ばれることもあるが、住民の話を聞くうちに背景にある事情が見えてきた。

山本勲夫さんは、「本家だからと思って、新居をある程度の広さにした」と言う。当時は冠婚葬祭を家庭で行い、来訪する親戚を泊めていたからだ[112]。

> 大きな家はいらんとは言っていたけど、一応本家だし、兄弟家族が来た時には泊めにゃあいけん。ある程度の家を作っておかないと思って、こういう家にしたわけじゃ。昔はみんなを呼んで法事とか祝い事をしょうったけんな、そのために十分な家をこしらえようとした。じゃけん布団も仰山ある。
>
> 家が完成して 2 年後くらいの時、おじいさんが亡くなって家でお葬式ができた。皆さんに来てもらって、昔の講組の人に手伝いをしてもらって。でも、もう次の年ぐらいからお葬式はみなホールになっていって。ちょうど葬儀会場が家からホールに代わっていく狭間の頃じゃな[113]。

住宅の移転に続いて厄介だったのが、墓の移転だ。水没地にあった墓の移転は当然のことであるが、墓が非水没地にある場合でも、子供の世代にわたって墓の管理ができるように、新居の近隣や市街地付近に墓を移した住民は多い。

> よう相談くる人もおられた。「ええ墓地がないか」というてな。お金をいっぱい出しゃあなんぼでもあるんだけど、余裕がないけん「安いとこないか？」と言うわけじゃ。墓地いうのは高いんよ。坪単価から言うたら屋敷よりは高いからな。

上野寺住職の井上陽悦さんからは、先代の住職が無縁仏の供養に奔走していたという記憶が語られた。工事業者が山などを掘削していると、無縁仏がたくさん出てきたという。こうしたものは現在も上野寺で供養されている。

こうした手続きの過程で、親戚間や近隣住民との間のトラブルがあったようだ。親族間では、多額の補償金を手に入れたことで、相続の際にもめることがあった。インタビューした住民の中にも、配分に対して納得していないという声も聞かれた。また、近隣住民との間では、地権をめぐるトラブルがあった。ある男性は、近隣住民に土地を奪われたと話

---

[112] このほかにも、住民が節税を目的に大きな家を建てることが多かったこと、移転者に土地を売る際には譲渡税が安かったため、地元の農家から休耕田を売られることが多かったことなどが背景にある。平均して 1 枚 3 反の水田を購入し、2 反を自家用の田畑に、1 反を宅地に造成して新築するのが一般的だった。土地の斡旋と建物はともに、地元の土建業者が請け負った（和賀，2001）。

[113] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより

す。早期の移転住民が、行政職員立会いのもとで補償金の評価をした際に、土地の境界を偽装していた。自宅の移転時に土地の境界を調べて、そのことが分かったのだが、どうすることもできなかった。

> 僕らが出た時にはね、はじめの頃に出た人が測量して「なんでこんなところまで来るんだ」というところまで測量して、わしらが水路をこしらえとったのも、その人たちが自分の家のようにしてた。話し合いもなんもないからね。ダムの担当者に「これおかしいがな」といったら、「それは先に出られた地権者と話をしてください」と。できるわけがないがなと。

また、ある住民は、旧来のコミュニティとの関りや伝統的な家族観を自分の子供世代に残すことの悩ましさを吐露した。例えば、地元の名士の家に生まれた住民は、周囲からの視線を負担に感じることがあった。

> 家によっては、「どこどこの子供だから」といわれることもあったんです。そういうことは自分の子供にも結構負担になるんですよ。そういうことはやめさせた方がいいかなと思って、こっちに離れた方がいいかなというのは、あったんですけど。

山本勲夫さんの父親は、当初津山に家を建てたいと言っていたが、勲夫さんは息子の代まで家を継ぐことを考えて、県南に家を建てることにした。山本さんは、「今は感覚が変わっているけど、当時としては家を続けていかなければという意識があった」と話す。

> わしの子供が 2 人おるんじゃけど、どっちも岡山県南で育っとるわけじゃ。上の子は昭和35年生まれだから、（当時）20歳を過ぎとるかな。それで、「おじいさんが津山に家を建てたいとよおるけど、家を建ったらどねえにするか」と聞いたんよ。いうたら、「こっち（南）で育ってるから、津山の方にはいかんぜ」という。
>
> それで、子供が跡を継いでくれにゃどうもならん。今は全然違うけど、当時はそういう考えだったわけで、わしとすれば、家をそういう方向で続けていかにゃいけんと思った。ほんなら子供が言うように、こっち（県南）の方に家を建てたらいいんじゃないかと思ったわけじゃ[114]。

また、山本勲夫さんが県南に移転した背景には、旧奥津町の過疎を憂えた側面があったという。もともと退職後に奥津に戻って実家で暮らすつもりだったが、高齢化が進む故郷では退職後の大人が一番若いくらいだという。山本さんはそうした故郷の将来に不安を感じていた。

---

[114] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより

途中で考え方が変わってしもうた。ダムできたけんっていうのもあるけども、ダムができんでも、最近のような状態になったらずっと帰っとらんかもわからん。言われよおったもん、「帰ったらおまえは一番若けえんぞ」と、自分が若いもんになると。たとえ60過ぎて帰っても、その町内では一番若いと[115]。

本節では、移転における手続きや戦略、苦労に焦点を当ててきた。移転先の決定には苦労する住民が多く、移転先は多様である。移転者の多くが奥津町の隣の旧鏡野町や津山市に移転したが、県南地域や県外に移転した住民もいる。

移転先の選定には学校や病院、生活の便利さが重視され、土地の選定には仲介者の紹介や親戚が住んでいる土地も考慮された。一部の移転者は移転者でまとまり、新天地での安心をを確保した。鏡野町瀬戸地域には、ダム移転者向けに瀬戸団地が整備され、安心感や生活の利便性があったといえる。

一方、子供世代がすでに県南に生活の拠点を置いていたために県南地域に移転して二世帯同居する移転者もいた。県南地域への移転理由としては、奥津町（現鏡野町）の将来の過疎化への懸念も含まれる。こうした意思決定は、各世帯の将来世代の暮らしを考えて行われた。とくに移転先や新居の間取りは、当時住民が想定した生活設計に基づいたものになっているが、時代の変化によって見込みが外れることもあった。

住民の語りからは、移転の過程が複雑であり、様々な問題や努力が伴うことが分かる。また近隣住民や親族との間で問題が生じることもあった。補償金交渉時の地権をめぐる問題や、固定資産税の評価に関する問題などがあったとされる。

4-3　それぞれにとっての移転

ここまで、移転の決断や移転時の苦労について中心に述べてきたが、移転した住民にはその他にも様々な思いや葛藤があった。多くの場合、移転の決断や手続きは世帯主の男性が決めることが多かったようであるが、その周囲にいた女性や二世世代も、それとは違う立場から様々な思いを抱えていた。本節ではこうした語りを中心に描いていきたい。

大山富敏さんの妻、大山由起子さんは、夫に対して不安な思いを吐露したことがある。由起子さんにとって、嫁いで以来地元で積み上げてきた人間関係は大切なものであった。移転は新たな居住地・新たな職場で一からやり直さなければならないことを意味し、当時は先行きを不安に思う気持ちがあったという。一方で、移転先では子育てを通じた人付き合いが生まれ、比較的早く地域に馴染むことができたそうだ。夫の富敏さんの語り、妻の由起子さんの語りを順番に取り上げる。

[115] 2023年10月30日　山本勲夫さんへの聞き取りより

女房は最初はね「ええがなあんたは」という。というのが「あんたは役場におるんじゃけん、何にも変わらんけど」「私は鏡野から出たら周りには知っとるものがおらんし」と。地区の人間関係は強いものがあったけんな、やはり醤油を貸してとか、なにやら貸してとか、昔ですから近所づきあいの絆が凄く強かったですよね[116]。

結婚してきた当初と同じことですよね。2 回目みたいなもんでしょ。1 から付き合って、1 からどんな人がおっていうことを、もう一度繰り返さないけんでしょ。

でも、子供がいるとやっぱり地域と馴染むのが早いんですよ。だけどやっぱりお年寄りはそうはいかないんだなっていうのはつくづく思います。私は子供がおって、学校があって地域があって繋がっていてっていろんなものが横へ横へ広がっていったりしました。だから、かえって人数が広がってきましたよね、奥津は狭いでしょ。行事しても何しても、鏡野では大人数になりますから。だからそれはそれで楽しいんです。でも当時は不安いっぱいでしたね[117]。

結婚してから、地域の中での人間関係を築き、家族を支えてきた女性にとって、移転によって失われるものは大きかった。大山由起子さんは、奥津町での人間関係や地域の行事に愛着を感じていたようで、「町から行事が消えていくのが寂しかった」と話す。

ダムが決定して、徐々に徐々にいろんなものが減って、知り合いがどんどんどんどん減っていった。うちらは最後の方ですから、ギリギリまでいました。だから、いろんな町の行事が消えていくのを身にしみて感じましたね。

お祭りにしても、最後のお神輿さんが下りていくとか、昔の久田神社とかの行事が、もうこれで最後みんなで法被着てっていうのも感じた。

今って、もうお神輿を担ぎませんからね。もう今、軽トラに乗せて出すだけ。だからあの頃の賑やかさ、祭りの楽しさは別格ですよね。それよりもっと前になると、もっと楽しかったんでしょうけど、私が来てからは縮小されていくばあでしたから。やっぱり地元に根付いた行事とかは、無くなっていくのも本当に寂しかったし、子供たちに楽しさを味わわせてやれないのも、かわいそうだった[118]。

続けて、二世世代の語りを取り上げる。移転の意思決定をしたのは、現在 60 代以上の方が多い。これより若い方になると、両親や祖父母などが移転を決断している。二世世代にとっての移転は、環境の良い新居へのあこがれ、友人と別れる寂しさなど、様々な受け止め方がある。

---

[116] 2023 年 10 月 28 日　大山富敏さんへの聞き取りより
[117] 2023 年 11 月 5 日　大山由起子さんへの聞き取りより
[118] 2023 年 11 月 5 日　大山由起子さんへの聞き取りより

古い家は私から言う。爺さんが建てた家で、それこそかやぶきの古い家だったんです。こっちで新築したのは、昔で言えばスタイル的に新しいものだったんで、ワクワクするような気持もあったと思います[119]。

中学校在学中に移転することになった宮元貴広さんは、旧鏡野町への移転後も旧奥津町内の奥津中学校に通ったという。転校することに抵抗があったので、時間をかけても奥津中学校への登校を続けた。

僕は（鏡野に移転した後も）、鏡野中に転校しなかったんですよ。嫌だったんですよね、やっぱり、みんな保育園から一緒だったんで、あと 1 年ちょっとじゃないですか。そっから転校するのってちょっと抵抗があったんで、祖父と祖母に言いました。「ちょっと悪いけど奥津の中学校に通わしてくれ」って。学校までバスで結構距離があるんですけど、そこは無理言って中学校までは通わしてもらいましたね[120]。

また、宮元さんは奥津町での暮らしについては、「苦は全くなかった」「いたらいたで、このままでよかった」と話し、生活環境に不便を感じていた祖父母（2 章 4 節で述べた）とは感じ方が異なることがわかる。しかし、祖父母の心境は理解できるし、「子供のときだから、仕方ない。受け入れないといけない」と考えて移転をしたのだろう。

住んでて苦は全くなかったんです。でもしょうがないんだろうなとは思うんです。今の家、祖父の家がもう出たくてしょうがないという感覚は全くない。多分みんなそうだったと思いますよ。僕らの同級生たち。いたらいたで、このままでよかったと思っていると思います。それは受け入れないといけない。じゃないですか、どうしようもできない。とくに子供のときですから[121]。

小学校の頃に移転を経験した中谷由圭利さんは、久田神社宮司の大山富敏さんの娘である。父から移転の半年前にそのことを告げられるまで、ダム計画があることを知らなかった。中谷さんは当時、「なんで引っ越さないといけないの？」と父に反発した。

親から引っ越すという話を聞いたのが、4 年生のとき。もうそれまでは全然そんなことは次も思わなかった。「実はダムができるから、こっちに引越ささなきゃい

[119] 2023 年 4 月 20 日　朝田守さんへの聞き取りより
[120] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより
[121] 2023 年 11 月 6 日　宮元貴広さんへの聞き取りより

けないんだ」という話で、そこから意識しましたね。じゃああと 1 年しか行けないの？みたいなそういう感じで[122]。

（あのその話があったとき、すごく反対をされてたんですね？）そうですね。その頃、どれだけ嫌だと言ってたかは、あまり記憶には残ってないんですけど。

家を取り壊すときに、私は学校で行けなかったんですけど、「見たい行きたい」って言ってました。でも、取り壊す前に家の障子を破ったのは覚えてます。力いっぱいみんなで、「クソ～ダムが」とか言いながら、障子を兄弟とか幼なじみが近くにいたのでその子たちと一緒に怒りをぶつけて、こうばんばんって、遊びですけどね。

（悔しいっていう気持ちだったんですか？）私は小学生の考えなのでお友達と別れるとか、家が壊されるとか、多分そういうのが嫌だっていう、その程度なんですけど、その当時はやっぱり、単に「嫌だ」っていう気持ちが強かったと思います[123]。

大山吉貴さんは大山富敏さんの息子で、中谷由圭利さんの弟にあたる。中谷さんよりも数年若いが、旧家での思い出は残っていると語る。一方で、移転が小学校入学前のことだったので、移転に際して友達付き合いなどで不自由を感じることや、姉の中谷さんのように抵抗を感じることはなかった。

うっすらとはいえ前の家の記憶があります。僕の記憶があるときには、もう既に周りの人たちは立ち退いた後だったんで、廃墟みたいな、家のコンクリートの跡、基礎の跡とかが残ってました。「なんでここんなコンクリートだけなんだろう」みたいな思っていて、大きくなっていったら何となく、ここに元々家があったんだみたいな、そういう感じでやっと記憶と繋がってくるみたいな感じです。家が全くない状態が、当たり前のイメージだったんですよね。

（中略）僕と僕の下の妹とか弟とかっていうのは、もうこっちで育ってる世代なんで、もうこっちがもうほぼ地元みたいな。向こうはちょっと記憶はあるけど、あそこの地域で育ったっていうイメージはあまりないですね[124]。

写真館を営んでいた山崎正弘さんは、行政が故郷の記録を残さないのを見かねて、故郷の写真の撮影を始めた。山崎さんの写真は記念誌『ふるさと』に収められている。奥津町の豊かな自然環境や、生業、風習、シンボリックな場所などが写真に収められている。

---

[122] 2023 年 11 月 5 日　中谷由圭利さんへの聞き取りより
[123] 2023 年 11 月 5 日　中谷由圭利さんへの聞き取りより
[124] 2023 年 11 月 5 日　大山吉貴さんへの聞き取りより

役場の職員なんか、もっと動いてね、記録残しゃーええのにという気はするんですけど、反対運動が強かったから気がひけて、写真もほとんど撮ってないですよ、残してないです。田植えをしたりとか、普通の生活状態でも撮ってなかったからね。

だから、昭和 62 年に仕事がら、写真を撮ったんです。あんまり誰も撮らなかったから、もうこれじゃいけんと思うてね。役場の人でもどんどん記録撮ってたら、あんまり口出しせんでもええかなと思うけど 240 ページくらいはれるアルバムが、20 冊ぐらいたまりました。

結局本気でやったのが、山陽新聞の OB でしたね。写真集と資料集で『ふるさと』というのをしました。あの写真集の 8 割ほどは僕が撮ってると思いますよ[125]。

本節では、移転した住民たちの様々な思いや葛藤に焦点をあててきた。移転の決断や手続きは主に男性が行ったが、その周囲にいた女性や子供たちも異なる立場から様々な思いを抱えていた。特に女性にとって移転は、新しい居住地・職場で一からやり直すことを意味し、地元で積み上げてきた人間関係や行事が失われることに不安を感じた。

移転の意思決定を経験した当事者世代の住民は、現在 60 代以上の住民が多いが、それより若い二世世代にとっては新しい環境へのあこがれや友人との別れへの寂しさなど、様々な受け止めがあった。二世世代からは、生まれ育った家や地元の友人づきあいへの愛着が、移転に反発する感情として表出することがあった。一方で語りからは、故郷の環境に愛着を感じつつも、親世代の思いを汲んで移転を受け入れる二世世代の姿も浮かび上がった。

写真館を営む山崎正弘さんもまた、特有の経験をしているといえる。行政が故郷の記録を残さないのを見かねて、写真で故郷の風景や生業、風習を残すことに取り組んだ。本稿において引用している苫田ダム記念誌『ふるさと』（苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997）の写真の中にも、山崎さんが撮影したものが含まれている。

4-4　移転後の住民の暮らしと地域社会

ここまでは、移転の過程に焦点を当てて取り上げてきたが、ここからは、移転後の住民の暮らしと地域社会の姿についてみていきたい。移転を受け入れた住民は、移転後 30 年あまりの人生を歩んできた。住民は移転後、どのような人生を歩んできたのだろうか。また、多くの住民の移転が進んだ苫田地区の地域社会は、現在どのような姿になっているのだろうか。

住民の話に多く見られるのは、移転を前向きにとらえようとする姿勢だ。鏡野町に移転した牧野雄一さんは、移転の結果、生活が便利になったと振り返る。しかし、これまでの県当局のやり方や、その意義が判然としないダムの存在に疑問やいら立ちもある。

[125] 2023 年 11 月 3 日　山崎正弘さんへの聞き取りより

あれだけ奥津町は反対したけど、現在になってみて、すごい便利になったと思うわけ。だから、ダムの治水利水に関しては「あんな役に立たんもの作りやがって」という気持ちはあっても、それがあったからこそ、引っ越しできたんで。あそこを潰せというのは腹が立つんだけど、ものすごい便利になったっていうのはある[126]。

武元賢治さんも、鏡野に移転をしたことで生活が便利になったと話す。親にとっては通院が楽になったこともよかったという。

便利になりましたね。買い物もすぐにいけるし、うちの親は病気だったから、すぐ病院にいけるのもよかったね。歩いてではないけど、タクシー呼んでひとりですぐ行けるから。

（かつて奥に住まれてた頃は、通院されてた？）少々のことじゃ病院にはかからなかった。昔は町医者がいたんですけどね、それもやめてしまっていたから[127]。

古林勇二さんは「多くの人が南部の土地に出てよかったと思っているでしょう」と言う。若者が都市部に出ていく流れの中で、旧奥津町で跡取りを残すことは難しい現実だろう、とも。こういう時代だから鏡野町や津山市、県南などへの移転は合理的な選択だったのではと話す。

出て良かったと多くの人が思うとるんじゃないかなあ。僕らの年代と話をすると、「出てよかった」という人が多い。田舎におっても農業も衰退でしょう。勤めるにしても津山や岡山に出んといけんでしょう。僕の年代ぐらいだったら、子供がもう跡取りですけど、久田におっても「跡取りをさせるのは無理だろうな」と思う人がほとんどだろう。こういう世の中だったらね[128]。

牧野欣功さんは、移転後の暮らしについて「長年くたびれたけ、今を一番ええとせにゃといけんわ、と思って」と話す。移転を前向きにとらえようとする心境がうかがえる。新居で育てている庭木や、前の家の庭木を使って作った現在の住居に愛着を感じるようになったという。一方で「長年くたびれた」という言葉には、ダム闘争への敗北感ややるせなさがにじんでいるように感じられる。

出てからまあ、気持ちを切り替えて、長年くたびれたけえ、今を一番ええとせに

[126] 2023 年 11 月 6 日　牧野雄一さんへの聞き取りより
[127] 2023 年 10 月 31 日　武元賢治さんへの聞き取りより
[128] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

ゃいけんわと思って。それで、自分で庭木をやったりとかな。そしたら愛情ができるし、土地になじんでくるわな。この屋敷の木なんかでも、前の家の木を 5 本ほど使っとるわな[129]。

聞き取りをした住民は 50〜80 代の方が多いが、こうした住民は移転期には 30〜60 代の現役世代だった。子供世代のことを考えて利便性の高い移転先を選んだり、移転先での地域交流に積極的に参加したりなど、移転の背景には様々な逡巡や様々な苦労がある。こうした苦労を乗り越えた今だからこそ、移転を前向きにとらえることができるのかもしれない。

ダムで移転した人たちは移転先や職場で、「ダム御殿だ」「金があってええな」と皮肉を言われることがあった。多くの移転が昭和の終わりから平成はじめの頃で、現代とは集落の人間関係や地域での活動に対する考え方も大きく違う。集落によって温度差はあるが、排他的な集落ではコミュニティに溶け込むのが大変で、正躰徳治さんは「よそもの」呼ばわりされることもあったと語った。

移転住民によっては、農業用水を使わせてもらえないことや、地元の常会に入れてもらえないことがあったという。移転者が建てた大きな家を見て、妬む地元住民がいという話もよく聞く。

奥津町から鏡野に出た人は「お前のところには水を流すわけにはいかんで」と、排水をストップされて、必要なら川まで流せと言われたり、常会という組合があるけど、そこには入らせんとか。

もの凄い家を建てとるけんな、「ダム御殿じゃ」いうて指さされたりな。豪勢な家を建てとる。長屋や蔵を立てとるけん、もともとおった人は妬むんだろう。

こうした中、移転先での人付き合いに努力してきたという住民の声もある。鏡野町に移転した奥利喜夫さんは、地区で開催された岡山国体のハンドボール大会の役員をしたほか、地域の体育指導員として綱引き大会の審判員をつとめたという。当時は引っ越してから 5〜6 年経っていたが、地域の高齢者から面と向かって「よそものが」と言われることもあった。当時を振り返り、「いらんことをいったらまた余計にひどくなるから、黙っとるしかなかった」と話す。当初はこのような状況だったが、早くから町内の役員をしたため、比較的早く地域に溶け込めたという。

昔ながらのコミュニティが色濃い地域では、地域に溶け込むのが大変だった。ある住民は、こうした状況の中で苦労をしながらも、人付き合いを大切にしてきた。移転当初は、地区の集会などで大変肩身が狭い思いをしたが、時間をかけて周辺住民や町議との親交を深めてきた。のちに区長を務め、地区内にある街頭や側溝および河川などの環境整備に勤

[129] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

めたという。

移転の際に不安を漏らしていたという大山由起子さんは、移転先で積極的に人付き合いをしていった。子供が通う小学校の PTA 活動等を通して、つながりが広がっていった。子供が多かった大山さんは、合計 18 年間 PTA 活動に参加してきたという。

> やっぱり子供が親をつなげますね。まだ子育てをしっかりしょったから、小学校の PTA で、一緒に話すこともあるし、そうすると子供の関係で親がつながりができる。子供が最後小学校を卒業した時に、「お父さん、わたし小学校に連続 18 年つきおうたんで」って。じゃけえ知り合いがようけおる[130]。

また、大山富敏さんは、移転先の部落にもともと住んでいた住民への感謝を口にした。自分たち旧奥津町からの移転住民に対して、よそ者扱いするのではなく、地域の一員として接してくれたことが、ありがたかったのだと話す。

> こちらの人は、私たちに対して「よそ者」という感覚をそんなに持ってないように思いました。というのがね、円宗寺（移転先の部落）の若者の会があるんです。土曜日にいつも会合する土曜会というのに入っていましたけど、そこで久田から出た私より若い人が、一緒に入っとったんですけど、一度言ってしまったんですよね。「ぼくは、出てきたもんじゃけん」と、そしたら鏡野の人はみんな怒りましたね。「そんなことは全然思うてないで。ここへ来たら、ここの住民じゃがあ」って言って。（私は）「ありがたいもんじゃなあ」と思いましたね[131]。

富敏さんの妻、由起子さんも同様に、隣人が親しく付き合ってくれたことに救われたと話す。

> 女房が一番喜んでいたのは、家の土地を買ったところの持ち主だった人が、このひとも 70 なんぼの年ですけど、畑や田んぼにおられて、女房は由起子いうんですけど、お父さんあの人だけは「ゆきちゃん」よんでくれる、ほんまにありがたいと、そう言っていた。それで、地元から受け入れられたという感じがしたね[132]。

ある住民は、移転先での良好な隣人関係に支えられたと話す。また、移転前から父親が地元の人と築いていた関係性にも支えられた。

---

[130] 2023 年 11 月 5 日　大山由起子さんへの聞き取りより
[131] 2023 年 10 月 28 日　大山富敏さんへの聞き取りより
[132] 2023 年 10 月 28 日　大山富敏さんへの聞き取りより

私は、後ろの A さんとは心安くしょうったな。向こうの B さんも仲よくしてくれたけんな、おかげさまで助かった。

それから、私の父親のおかげで助かった面もある。父親は昔、トラック乗りだったんだけど、こちら（移転先）の地元の人を車で送ってあげたりして、助けていたらしい。それでこちらには、私の父親を結構知っとる人がおったん。「お父さんが『乗りんさい』って乗せてくれたんよ。あんたとこのお父さん、いい人だったなあ」とよく言われるから、私は助かってたわけ。

一方で、上野寺住職の井上陽悦さんは、移転後に孤独を感じる高齢者の様子が印象に残っているという。移転して間もないころ、移転先からたまに訪れてくる高齢者と立ち話をすることがあった。高齢者は、昔なじみの人間関係を失い、家にじっとしていることが多くなった。「周りもわけわからんもんばあで、つまらんのう」と話していたという。

地域の密な人間関係の中で、山の手入れや畑仕事をしながら生きてきた世代にとって、移転による影響はとても大きかった。移転時にすでに高齢だった方々は、職場での付き合いがないうえ、移転先での近所づきあいも担うことがなかった（二世世代の住民は、移転後の近所づきあいや町内会行事の参加を、自分が戸主として担ったと話す）。移転後もしばらく山に通ったという話が聞かれたほか、認知症の老人が故郷に戻ろうと徘徊していたという話も聞かれた。こうした人々は既に他界しており、直接話を伺うことができない。

地域の講組なんかの付き合いがあるんだけど、こっちに出てきてからは「お前がせい」と親父の方から言われて、（私が）親父より上のような人とお付き合いさせてもらった。親父はもともと山の仕事が好きだったんで、（移転後も）山にずっと入っていた。奥津の河内の山へ毎日通っていた。まあ地元が好きだったんでしょうね、ただわしらとかのことを考えて（鏡野町への移転を決めた）っていうことだと思いますね[133]。

ある住民は、「ダムが無かったら、もっと長生きした年寄りがいるのではないか」と話す。その住民の父親も退職後、近隣とうまくコミュニケーションがとれず、こもりがちだったという。そうした状況の中でアルコール中毒になってしまった。

NHK なんかが移転で荷物を運びょうった時にインタビューしにきて、県知事の長野士郎をぼろくそに言うてやったことがある。住民のコミュニケーションをこわしやがって、ええ加減にせえよと、偉そうに言うた覚えがある。

やっぱり、ダムが出来なかったら、ボケずに長生きした人が沢山おったんじゃない？当時の 80 代くらい、これがやっぱり、地域のコミュニケーションも溶け込めん

[133] 2022 年 8 月 27 日　正躰徳治さんへの聞き取りより

しな、そういうのでぼけてしもうた。

わしの親父もアル中になった。結局することがない、畑するくらいのもんじゃけん、雨が降ったらすることもないし、話し相手も近所におらんけん、昼から飲む。そしたらアル中になって、2へんも病院に入院しとる。

一方、高齢者の中にも、余生を謳歌した住民もいたようだ。ある女性は、義母が高齢ながら、地元の付き合いを広げていったと話す。故郷を離れたからこそ、田畑の世話から解放され、新たな人付き合いをすることができた。

おばあさんもこっちおったけえ、ゲートボールとか楽しみができたり、近所の人たちとも大正琴をここでしたりとかな。一緒に発表会に行ったりとか、そういう楽しみは結構しょったな。近所の人が車であっちこっち連れて行ってくれるけん、どこやらで何かあるでって乗せてもらったりとか。奥におったら田んぼのへりの草を取らにゃいけんとか、ああじゃこうじゃじゃけど、ここだったら目と鼻の先これだけのもんじゃけん。

また、新居は義母の思いが詰まったものだったという。家の間取りや装飾などは、義母の思いを汲んで設計された。女性は「前の家が不便だったからこそ、思いがあったのだろう」と話す。

一方。移転を決断したことで、いまだ反対している親族との間に亀裂が走ったという話や、生活再建に失敗して屋敷が抵当に入ったという話も聞かれた。こうした人々に直接話を聞けたわけではないが、こうした負の側面も見逃してはならないだろう。

中でも住民の間から語られることが多いのが、固定資産税がかさんだことや、跡取りが居なくなったことにより、補償金で建てた家が手放されたという話だ。多くの住民からこの話が聞かれたが、実際に当事者に話を聞くことができたわけではない。

ある住民は、散財に走った結果、破産した家庭もいたと話す。こうした話は複数の住民から聞かれた。

実際に鏡野町の移転者が多い地区には、長屋や離れを含む大きな家が建ち並ぶ[134]。こうした風景を見た地域住民は、「ダム御殿」と色眼鏡で見ることもあったとされる。また、ある住民は周囲から「沢山補償金を貰ったんでしょう？」と言われることがある。移転から年月が経った最近でも言われるため、「いつまで（その時のお金が）残っているでしょう？」と不本意に感じるという。

ある男性は、自分の祖父母が移転時に建てた家について、「大きすぎる」と感じている。子供がいる自分の家族にとっては間取りが不便で、現在は母が一人で暮らす状況だという。

[134] 補償金をなるべく固定資産に投じることで、課税を押さえる戦略があったとされる。

今なって思いますけど、僕は自分の家を建てたんですけど、家族4人が住む家として建てたんです。これぐらいで十分じゃんって思えるから。母が住むそっちの家にいたときは、もう部屋が余っとるんすよ。家族4人住んでて部屋が余ってるんです。でも大きくても間取りが悪いんで、部屋を分けるのもあれなんで、なんでこんな家建てたのかなとは思いますね。今は1人で母親だけ住んでて。

屋敷と同時に購入した田畑の管理に困る家庭も多いようだ。武元賢治さんは、自分の両親が田畑を買わなかったことを「助かった」と話す[135]。

うちはやっぱ、田んぼとか畑とかを買ってなかったから、助かりました。2世3世の人が、親が田んぼ買ってるから、つくらにゃいけんと苦労しているけど。

買っておいたら、税金が取られないんですよ。たしか、補償金をもらって田んぼを買ったら税金かからなかったんです。（だから貯めこまずに、使ってしまった方がいいという？）持ってたら収入になり、税金がかかってしまう。移転前と同じ構成で、家と土地と田んぼを買えば、税金は払わなくてもよくなる。

（2 世世代になると、その田畑の管理に困るわけですね）そう。家の近くに田んぼなんか買えないですから、大抵ちょっと離れたところに買ったりしてる。手入れが大変ですよね[136]。

移転後の生活再建は人によってさまざまだ。補償金を浪費して破産した家庭があるほか、跡取りがおらず、せっかく建てた屋敷を処分してしまった家庭もあるようだ。一方で、移転によって家庭の経済状況を向上させ、跡取りにも恵まれた家庭もある。

上の世代が80代くらいだとすれば、その子供世代は鏡野・津山に出て、地づかなかった。大阪・東京にも出ていたでしょう。結果的に、みんな高齢家族になってしもうた。夫婦で老老介護したり、施設入ったり…。子供が跡取りになった家庭もあるけど、一部です。だから大きな家を建てても、それを売っとる人が多い。でもそれは移転がなくても出ても一緒だったわな。

インタビューの中では、住民の愛郷心がにじむ瞬間があった。移転後長い年月を経た今でも、水底に沈んだ故郷を思い起こし、懐かしむ住民の姿があった。牧野欣功さんは、清流が流れ、水が豊かな奥津町の風景を懐かしそうに語った。牧野さん宅の客間にはかつての自宅を描いた絵が飾られている。家の前には水路があり、当時鯉が泳いでいた。現在はダムののり面にあたり、湖岸道から下をのぞくと今でも水路をコイが泳いでいるのが見え

[135] 屋敷と同様、節税効果をねらって田畑を取得することがあったとされる。
[136] 2023年10月31日　武元賢治さんへの聞き取りより

るという。しかし、湖岸道の木が伸びて見えなくなってしまった。

写真 32　牧野欣功さん宅に飾られた旧家の絵（2022 年 10 月　筆者撮影）

また、牧野欣功さんはしいたけを植えるために山を訪れるという。山は年々荒れていき、管理をする人がいなくなっていく。

> しいたけを植えとるけんな。ずっとそれを採り行ったり植えたりな。脚が悪くなったけえ、もう今年きりかな。今年までは植えました。少しじゃけどな。いまはようようとあがっていきょうるけんな。もう来年はどうなるかな、と思うてみたり[137]。

牧野欣功さんの生家はダム湖の法面にあたり、現在も水面から顔を出している。移転後も湖岸道に車を止めて、のぞき込むことがあったという。

> 今も（生家があった辺りは）水が溜まっとらんの。いまだに行くことがあって、いっつも 4 月、5 月ごろかな、湖岸道に自動車を止めて屋敷があったところをのぞきこんでみる。したら、鯉が卵を産みに、昔の家の水路のところにみんな寄ってきてな。それを上から眺めとる。それも、のり面の木が大きゅうなって見えんようになり始めた。切っちゃろうか思うんじゃけどな。思い出はずっと消えずに、私の腹の中に残っとんじゃ[138]。

[137] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより
[138] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

さらに牧野さんは、山の変化について話した。杉やヒノキの植林が進んだことで動物の餌がなくなり、動物が山を下りてきている。また、山の保水力が弱まり、水がなくなってきた。以前は水車で精米をするなど、豊かな水に支えられた暮らしがあった。

> 手が入らんようになって、動物が増えてきてるし、イノシシが出てきたりシカが出てきたり、植林してもそれを食い荒らしたりな。もう餌がないわけ。それから水が切れるわけじゃ。杉ヒノキじゃ保水力がない。それで水がなくなってきた。昔は、全部奥で水車でコメをついて、白米にしょうった。水がそれだけいっぱいだけ出てきょうった[139]。

県南の岡山市に住む山本勲夫さんも、最近まで山にタケノコ堀りに通っていたと話す。

> 山はみなみんな残っとるけど、手入れができてねえけんな。植林せえ植林せえいうことで、ヒノキやスギを植えとんじゃけど、手入れをせんけえ、もうずっと上に伸びきって。森林組合が当時、ある程度はしてくれよったんじゃ、わしも金出して間伐したりしょうったけども、途中で人がおらんなってそれもできんくなったん。（最近は足を運ばれることはありますか）あるよ。毎年タケノコ掘りいきょうったけどな。竹藪があるから、ここ 2 年ほど行ってないな。けど、年に 2 回か 3 回は、前あった家のところが懐かしいから帰ってみようった[140]。

山は次第に荒れてきている。住居を移転して以降も山を保有している方は多いが、多くの人が放置してしまっている。一方で、山仕事へのこだわりがにじむ話もあった。河内地区の谷の奥地に住む堀内一二三さんの父親は、山仕事が好きだったので町外への移転を考えなかった。

また、かつて山菜採りなどをした山がなくなってしまったことを残念に思う声もあったようだ。瀬戸団地近くに住む藤田照子さんは、移転住民からそうした声を聞いたことがあるという。

> 皆さんがよう言われよったのが、山の春やったらわらび採りとかいろんな自然のものを採りに山に入ってた。それがもう自分が入れる山がない。それが一番つらいといってね、大体ここら辺にこういうものがあって、入ってたようなのが沈んでしまってるでしょ[141]。

---

[139] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより
[140] 2023 年 10 月 30 日　山本勲夫さんへの聞き取りより
[141] 2023 年 10 月 26 日　藤田照子さんへの聞き取りより

また、久田川漁協の役員を長年務めた朝田信修さんは、ダムができてからの変化として、ダム下流の水質悪化を指摘した。さらに、ダム湖にたまった水が汚れることや、大雨が降ってもダム下流では「水が川を洗わないこと」が原因だと話す。

> ダムから下は未だに水が死んどる。魚が全然つかない。入れても育たんよ。それで 5、6 年前から三重県から視察に来た人がいた。「どんなですか？」と聞かれたから「もう魚おりゃへんで」て言った。
>
> 結局、湖の水が死んどるから、微生物が育たんのですよ。つまり魚が育たないいうことです。ダムの下流は未だに 1 匹もおらん。結局、水が川を洗わんのんじゃわ。ダムができたら、洪水は昔はあったから、水が出たらバーっと綺麗に洗うわな。今はそこを調整するじゃろ。洪水はなくなったけど川はもう一定じゃけん、川は汚いんです。そんなどっちを取るか、やっぱり人命かな、両方いうのは成り立たんのじゃろう[142]。

ダム湖周辺には、河内と呼ばれる部落が残り、数軒の一軒家と久田神社、ダム湖の観光施設「水の郷」がある。苫田地区からほとんどの住民が移転した後も、河内では集落の活動が細々と続いてきた。

堀内一二三さんは、河内集落の谷の奥地に暮らす。国道から分岐し、河内地区の谷沿いに走る町道を 5 分ほど進んだところにある。町道沿いにほかの住宅はなく、谷底には荒地が広がっている。（ここは立ち退き移転によって更地になったものの、水没はしていない）

写真 33　かつて集落があった河内の谷と、付け替えられた町道（右）　奥には国道のバイパスが見える（2022 年 8 月　筆者撮影）

堀内宅はもともとこの辺りにあったのだが、移転対象地になったため、さらに奥地へ引っ越した。現在は一二三さんが一人で暮らすが、移転地を決断したのは一二三さんの父で、

[142] 2023 年 4 月 19 日　朝田信修さんへの聞き取りより

当時一二三さんは生家を離れて暮らしていた。父は山仕事が好きで、市街地での暮らしには向かないと考えていた。父が高齢になってから介護のため一緒に暮らすようになり、没後一二三さんが一人で暮らしている。

家の前には小さな川が流れており、牧野欣功さんが語った「水が豊かだった奥津町の暮らし」の面影を残す。また向かいの山はきれいに手入れがされていて、堀内さんに聞くと、昔近所だった住民が山の仕事が好きで、高齢になってからもよく手入れをしていたという。しかし最近、来なくなってしまったそうだ。

堀内さんの家は、人目につかない奥まった場所のため、行政の管理が及びきらず、土砂崩れなど災害が懸念される。家の前まで町道が伸びており、行政の職員が草刈りをしてくれるが、「忘れられないようにこっちから声掛けをしていかないと」と一二三さんは笑う。

> 私もここで 1 人今おるけど、娘は津山におるからね。さいさい（度々）来てくれるけど、どうなるんだろうと思いながらここに（住んでいる）役場の人やこでも若い人に変わるでしょう、年々変わっていったらもう、ここに家があるのもあんまり知らんけんな。地図上ではわかっても、どんな人が住んでるかということは、分からんと思う。
>
> だから私がいつも役場に文句言うんですよ。いわんと分からんから、この前の災害のときも、土砂が崩れてね。崩れて通れんようになって、鏡野 100 ミリぐらい雨が降ったんです。ざあーっと降ったから「はよ出よう」いうて、妹とダーッと出て。
>
> 次の日に帰ったらもうあがれんで、そいで歩いてあがって、すぐに役場に言ったら、その日のうちに土砂を取ってくれたけど、もう大変です[143]。

高台にはわずかに移転を免れた世帯がある。一軒は箱地区の上野寺の住職である井上陽悦さんの家で、もう一軒は河内地区の大山隆歳さんの家だ。二人ともダムの移転期には奥津に暮らしておらず、移転期を経て地元に戻った住民だ。井上さんは学生時代を終えて町役場に就職し、ダム事業に伴い急激に変化する地域をみつめてきた。また住職を兼職する中で、町内外に移転をした檀家と交流してきた。

大山さんが戻ってきたのは定年後で、移転期は母親が一人暮らしをしていた。移転を免れた背景には、「ここで暮らし続けたい」という母親の思いがあった。（水没地区ではなかったが、補償の対象であり、行政の職員から移転を勧められていた）社交的な大山さんは旧来の住民を中心に囲碁の集まりをしていた。

河内地区にのこるのはわずか 5 世帯となり、集落を維持していくのがやっとの状況になっている。河内地区には建設省が造成した団地があるが、入居したのは 3 軒にとどまる。大山隆歳さんは「団地にはもっと多く残られると思ったのに、3 軒だけだったなあ」と話す。そのうち一軒は既に空き家に近い状態になっている。

---

[143] 2023 年 9 月 9 日　堀内一二三さんへの聞き取りより

大山隆歳さんは、現在の部落の状況について「寂しくなった」と話す。人数が少なく、災害時の避難など、住民同士で支えあうことも難しい状況だ。

> バラバラバラバラ、皆抜けていって、こちらへ残ったものは、寂しくなりましたね。5 軒ぐらいしかないですかね。集落としての本当の助け合いいうのかな。緊急避難のときに集まるとか、そんなことできんよね。人数はなにしろ、少ないですからね[144]。

河内地区に暮らす住民は、住民の高齢化が進む中、集落の活動を維持するのが難しくなってきていると話す。

> 1 軒に 1 人ずつしかいないぐらいの限界部落なので、将来的に増えることはないです。まわりはもう、県とか国の土地になってるしね。人が帰ってくるのは難しいんじゃないかな。

部落の自治は人手がなく、部落の役員を長年同じ人が務めているという。草刈りも手が足りず、林の木や竹が伸びきっている。

> 人が少ないから、同じ人がずっと役員をする。もう代わりようがないというか。だから町の環境委員とかそれから衛生委員とかも、もう皆さん長いです。私も愛育委員を 10 年したえりとか、1 回まわってきたらもう変わらないし。
> 周りの竹とか木とか大きくなる一方でね、さあどうなるかって、この周りも最初のうちは全然何もない、綺麗にしたのを譲り受けたんだけど、20 年以上経ったらもう竹がこんな大きくなってしまった。

こうした状況にあるなか、河内部落の住民は月に 2 回程度、あつまって食事会をしている。高齢の住民が孤独になっていく状況をみた大山隆歳さんが、平成 29 年に呼びかけて始まったのが「河内クラブ」だ。河内クラブに参加する堀内一二三さんは、「みずの郷[145]」に集まってたわいもない話で盛り上がるという。

---

[144] 2023 年 9 月 10 日　大山隆歳さんへの聞き取りより
[145] 奥津湖総合案内所「みずの郷 奥津湖」のこと、地域の特産品の販売や飲食店、観光案内所などが入る。

写真 34　河内クラブの活動場所となっている「奥津湖総合案内所　みずの郷奥津湖」（2023 年 9 月筆者撮影）

交流が少ない高齢者にとって、河内クラブの交流は、地域のことを知るきっかけになっている。食事会の場所を選ぶのもささやかな楽しみのようだった。

> 私ら年を取って仕事もそんなしてないから、そんなに話はないんだけど。やっぱり 60 代くらいの方は、いろんな付き合いがあったりするからね。その話を聞けたりとか楽しいですよ。月一回のそういう出会いがね。
>
> いつもそこの「水の郷」で集まるんですけど、この前大山さんと話していて、新しく食堂みたいのができたから、「今度あっこもどうかな」「ほんならそこも行ってもええな」と言うて、ほんならそういう提案もしようかと、そんな感じでね[146]。

また、同じメンバーで、町内の清掃活動や水神の参拝もしている。集落意地の活動やかつての風習が、河内クラブのメンバーを中心に守られてきた。

> 春と秋の掃除があるんです。草刈りとか、若い人が出てきたら木を切ってくれたりとか、私ら草むしりしかできんけどね。
>
> それから、地鎮祭みたいなのがあるんですよ。公会堂の横にあるので、久田神社の大山さんに拝んでもらって、お祓いしてもらって、それからちょっと公会堂に集まって、お茶飲みながら世間話をしたりとか、そういうのがあります。

[146] 2023 年 9 月 9 日　堀内一二三さんへの聞き取りより

それから、河内には大滝様いうて、大きな滝があるんです。それに上がって、おがんでもらって。お弁当もらって帰るというのが、2年に1回あるんですよ[147]。

鏡野町の市街地に移転した住民の話によると、かつての人間関係、旧来の人付き合いは次第に薄れてきたという。かつての講組のつながりは非常に密接な関係で、移転後も葬儀の際には参列することや、手伝いに行くことがあった。しかし、そうした時代に生きてきた人々も多くが亡くなり、冠婚葬祭の付き合いも少なくなった。

（移転後のお付き合いみたいなものはあるんですか）やっぱり葬儀があったら、ちょっと手を合わせたりとかはあった。昔はもうね、講組といったら家族みたいなもんだった。

でも世代がみんな代わったので（もう今はもう全く？）ないですね。世話しに行きょった人がいたけど、もうそういう人は亡くなったし、みんな世代代わってしまった[148]。

多くの住民が町外に移転した後でも、ダム湖畔に移転した久田神社の氏子は未だに残っている。

移転後も久田神社の行事に参加する住民は多かった。とくに年 1 回の研修旅行は移転した多くの氏子が集まり、各地の神社を巡った。移転後の住民が久々に顔を合わせる、交流の場になっていた。しかし、年月の経過とともに高齢化が進み、世代が変わってきている。事情があって研修旅行も数年間開催されていない。

こうしたなか、次世代の氏子にわたって久田神社を守っていくことが課題になっている。総代長を務める大山隆歳さんは「皆さん出られて、地元にも神社がありますからね。そこの付き合いと両立できるかだよね」と話す。

近年は青壮年部を立ち上げ、若い世代への継承をはかっている。夏は茅の輪、秋にはしめ縄づくりを習い、秋祭りでは神輿を担いでいる。一方で、若い世代の住民に久田神社の氏子をつないでいくことは、難しい課題である。移転先の地域になじむにつれ、久田神社の氏子意識は薄れていく。

わたしら 2 世は総代の下の青壮年部会ですから、若い人は若い人でできることをやらせてもらってる。掃除とか年末年始の参拝、夏祭り・秋祭りの前の準備ですね。そこら辺に出ていかんと、若い年代が全然いないですからね。私らの子供世代にもうなってくるんですけど、移転した人は移転先の神社の氏子になりますから。久田神社の氏子の権利はあるんですけど、こっち（久田神社の氏子）いう頭が無くなってきます

[147] 2023 年 9 月 9 日　堀内一二三さんへの聞き取りより
[148] 2022 年 10 月 9 日　武元賢治さんへの聞き取りより

よね。

正月は（子供を）必ず連れていくんですけど。（中略）おみこしには息子を何度か連れて行ったこともあるな。「飲み食いさせちゃるけん、行こうで」って言って

大山富敏さんは久田神社を守っていく意義を語る。久田地区の氏神を合祀した久田神社は、久田出身の氏子を一番に見守っている神々ということになる。大山さんは、こうした神々を祀っていくことに使命感を感じている。

氏神様というのは、元々は各お家とか近所で、小さい祠を建てて祀っとった。それが集落にぽつぽつあったのを、この集落で一つまとめて、それが各地域に次々できていった。

要するに、地域の皆さんを一番守ってくださる神様だから、ずっと守っていかにゃあいけんし、その使命を受けたのが私じゃけん。だから皆さん、大きなお宮に初詣にまいりましたいうけど。じゃないでしょ。一番に氏神様に参って、あとはどこへでも参拝されりゃよろしいけど。子供が妊娠したら安産祈願、子供が出来たら初宮参りをして氏子の仲間入りをする。3、5、7 歳になったら、感謝と健やかな成長をお願いする。みんなまず一番に、氏神様に見てもらっているわけよ[149]。

写真 35　現在の久田神社（2023 年 9 月に筆者撮影）

[149] 2023 年 10 月 28 日　大山富敏さんへの聞き取りより

移転後の世代に地元との接点をつくるのは難しい課題だ。神社のほかにも、息子や娘をダム湖の周りに連れていくことがあるという話は、「ダム二世」世代の住民からしばしば聞かれた。

川遊びが趣味だった正躰徳治さんは、川にあまり通わなくなった今でも、漁協の組合費を払って漁業権を継続して取得している。毎年 1 万 3,500 円かかり、高額だと感じているが、子供やその友人が川で遊べるようにと、鑑札を取り続けているという。

現在 60 代の武元賢治さんは、息子の世代では移転前の暮らしを全く知らないと話す。しかし今でも山に残る馬頭観音に一緒に参り、「これだけは見ないと」と話すのだという。

> 地蔵さんが山中にひとつ残っとんで、盆正月と春分の日は行ったりしてる。（お地蔵さんというのは、誰かのお墓ですか？）馬みたいですよ、昔は裕福で馬を飼っていたらしいです。そこには通っとるですね。うちの家はこれだけみんといけんと。馬頭観音というのかな、馬のお地蔵様で[150]。

古林勇二さんは孫を連れて山にタケノコ堀りに行くことがあり、「父親の故郷だから見ておけ」と話したというが、孫の世代には実感がないようだったと話す。

> 息子たちがこっち帰ってきて、孫を連れてタケノコ掘りに 3 年か 5 年前に行ったことはあるくらい。もう懐かしいしいというのもな。「お父さんの故郷じゃけ見とけ」いうてんですえど、「ほーん」「はーん」いうくらいで[151]。

若い世代の中にも、故郷への強い関心がのぞかれる場合があった。移転当時小学生だった中谷由圭利さんは、中学校時代、故郷への思いを弁論にしたという。中谷さんは、故郷の友人と離れることや、住み慣れた家を離れることに抵抗があったようだ。転校先の友人とは共有できないやりきれない思いを、弁論大会にぶつけた。「ダム建設のために伐採が進んでいるけれど、1 本でも多くの木を植えて自然を守っていきたい」という趣旨だったのではないか、と中谷さんは思い出す。

> 中学校のときに弁論大会があったんです。2 年生のときか、鏡野代表に選ばれたことがありまして。そのとき苫田ダムについて書いたんです。喋るのに 6 分っていう規定があったんですけど、それをオーバーするくらいだった。何回も「時間ですよ」って言われるぐらい喋った。思いを文章に残したりするぐらい、自分の中では存在として大きかったんだなと。憎しみとか何とかいう気持ちばかりではなかった

[150] 2022 年 10 月 9 日　武元賢治さんへの聞き取りより
[151] 2023 年 10 月 26 日　古林勇二さんへの聞き取りより

とは思うんですけど。

（当時、学校の友達とダムの話をすることはありましたか？）話して共感できればいいんですけど（移転先の子には共感してもらえないから）、こっち来てからあんまり話すことは無かったかな。結構溜め込むタイプだったので、文章にするとかで爆発はさせてましたけど[152]。

中谷さんは現在、両親、夫、子供とともに鏡野町で暮らす。鏡野町のケーブルテレビ局に勤務し、地元の情報発信に携わっている。町内のイベントを目にして昔を思い出したり、取材を通して地域振興にかかわることに喜びを感じている。

記憶が強い分、無くなったっていう悲しさはやっぱり強かったなと思いますけど、今はそうやって仕事でかかわったり、家族と一緒に鏡野に住めれてるっていうのは、嬉しいことだなと。やっぱりイベントなんかで通るたんびにいろんなことも思い出したり、家族と一緒に「こうだったんよ」「ああだったんよ」とか話をしていますね。

お祭りとかイベントには、仕事で関わることが多いんです。湖畔の夏の祭りとかは仕事で、花火を生中継したりですとか、カヌーの体験ですとか、そういうイベントとか、あと自転車の貸し出しとかも、取材をさせてもらって関わっています[153]。

中谷さんは、移転の経験や故郷を失った経験が故郷への「執着」につながっていると話す。地元に帰って暮らし、仕事で地域振興にかかわっているのは、一連の経験があったからかもしれないと、思いを巡らす。

（中略）やっぱり記憶が残ってる分、執着が強かったかもしれないです。私は結構家の間取りとかは結構覚えてたりするんですけど、家から持って出たものとか。あと家の電話番号を勤めてる神社の番号にしてもらったりとか。何か多分関わったものとかを残したいていう執着ですね。昔のものに対して執着が一番強かったと思うんですよ。何か形が残らないじゃないですか。だから何か形に残るものをと、4年生ですけどね。

なので、今は地元のケーブルテレビに勤務してるんです。小学校の頃から、何かの形で地元の奥津に関わるようなことをやりたいと、結婚なり仕事なり、何か奥津に私は繋がりを持ちたいっていうのが漠然とあったんですよ。それが今、最終的に仕事に繋がったなっていう。（中略）それも一つ執着ですね[154]。

---

[152] 2023年11月5日　中谷由圭利さんへの聞き取りより
[153] 2023年11月5日　中谷由圭利さんへの聞き取りより
[154] 2023年11月5日　中谷由圭利さんへの聞き取りより

（中略）いいように捉えればですよ、普通に奥津で育って、大きくなって出ていってたら、地元に残るような仕事に就かなかったのかなとか。そこまで地元に対する思い出とか執着がなければ、今のこの仕事や、出てから出会った人たちとか近所づきあいとか、友達関係で家族ぐるみでお付き合いした人たちとか、そういうことにも繋がらなかったのかなと思う。逆によその方に仕事に出ちゃってたのかな、帰ってこなかったのかなとか思っています[155]。

中谷さんは、「前の記憶はだんだん忘れていく」「やっぱり寂しい」と感じながら、「兄弟や息子、夫に前の家のことを伝えたい」と考えている。

人生にも大きくダムは関わって、それがあったからこそ、出ていく人が多い中で自分は帰ってくることに繋がったのかな。やっぱり寂しいんですけどね。前の家のやつが竹やぶでしか目印がないので、昔の記憶もだんだん忘れてはいきますけど、自分の中でまだたくさん、いろんな思い出は残ってたり。兄弟にも喋ってあげたりとか、息子もできて、夫の家族とかもこっちに住むようになったんで、前の家のこととかも伝えていったりはできると思うんです[156]。

本節では、移転後の住民の暮らしと地域社会の変化を追ってきた。住民の語りからは、移転後の様々な経験や感情が読み取れる。移転によって生活の利便性が向上したという声がある一方で、移転に伴う苦労もあった。

一部の移転者は農業用水などの問題や地域コミュニティに溶け込む難しさに直面し、地元の常会に入れなかったこともある。こうしたなか、移転者が地域交流に積極的に参加したり、移転者同士で支え合ったりする場面が語られた。なお、移転先の地域社会の反応は、移転時期や地域ごとに温度差がある。地元社会から暖かく迎えられたことや、親しい近隣住民との間柄に喜びを感じた住民もいる。

また、移転者の家が移転先の地元住民から「ダム御殿」などと言われることがあった。こうしたイメージに対しては、移転者は不本意に感じているようだった。その他にも、一部の住民の間には、移転に反対する親族との関係が悪化したり、生活再建に失敗して破産に至ったりなど、苦境に立たされたという話も聞かれた。

また、高齢者はかつての近所づきあいが失われ、孤独を感じることになった。地域の活動への参加や山に通うことを通して、通じて気晴らしや交流を試みたが、高齢での移転に適応が難しい住民もいたようだった。

また、現在でも一部の住民は定期的に湖畔を訪れており、生まれ育った故郷への郷愁や思い入れがあるといえる。故郷への愛着は当事者世代から二世世代にわたるまで共通して

[155] 2023 年 11 月 5 日　中谷由圭利さんへの聞き取りより
[156] 2023 年 11 月 5 日　中谷由圭利さんへの聞き取りより

みられ、地元のイベントや地域振興に関わることで昔の思い出や経験を振り返りながら、地域社会に貢献している二世世代の姿があった。

ダム湖畔においては、移転により大部分の集落が解体されたあとも住民交流が続いており、こうした交流を楽しむ住民の姿があった。しかし、高齢化や自治の維持に課題が生じ、草刈りや木の手入れなどの地域活動が十分に行われていない状況にある。

このように、ダムによる立ち退き移転は単なる物理的な場所の変化だけでなく、様々な試練を伴う複雑なプロセスであったことが窺える。移転住民の人生や地域社会に様々な側面で影響を与えていることがわかる。

4-5　小括

本章では、奥津町の住民たちが移転に至る決断のエピソードやその背景、そして移転後の様々な経験や感情に焦点を当ててきた。移転は単なる物理的な場所の変化だけでなく、多様な移転の意思決定の過程、家族との軋轢、生活再建の苦労、地域社会との関係構築、愛郷心など、様々なテーマで多面的に描き出されるプロセスである。

移転が本格的に進んだ時期は、②ダム計画を推進した第二期長野県政から、森元町長がダム容認に傾いた 1990 年以降および、③町政転換後、反対派住民の移転が本格化した時期である。②の時期に移転した早期の移転者は、家族の将来や地元の状況を考慮して合理的な決断を下した。一部の住民は周囲の目を気にしながら移転を検討する必要があり、同じ時期に移転する住民同士で相談し合うこともあった。

③の時期においては、時間の経過とともに、反対派も含めて多くの住民が町政の行き詰まりを感じ、反対の意を翻して移転を検討し始めた。生活が非常に不便な状況があり、移転を迫られた。移転後もダムを容認する気持ちはないが、故郷に暮らしていけなくなったことへの悔しさや寂しさがにじんでいる。

移転から生活再建に至るプロセスには、住民の葛藤と多くの努力をみることができる。例えば、移転先を探すことや、新居建設にあたっての苦労があった。移転先の決定には学校や病院、生活の便利さが重視され、土地の選定には仲介者の紹介や親戚が住んでいる土地も考慮された。移転者同士が同じ部落に集まり、同じ土地に移住することもあった。

移転後の生活はそれぞれで異なるが、ここでも生活再建に奔走する住民の姿があった。移転先の地域社会の反応は様々で、一部では暖かく迎えられたが、一部ではネガティブなイメージをもたれることもあった。こうした中で若い世代は地域交流に積極的に参加し、コミュニティに溶け込んでいった。しかし一方で、高齢者がうまく溶け込めず、孤独を感じることもあった。

移転した住民の多くは、苦労と努力の過程を経てきた一方で、移転住民の多くには移転後の暮らしを肯定的にとらえる姿勢があり、移転前に比べて利便性が向上し、生活しやすくなったことをよかったという人が多かった。また、子供がいた世帯の親世代は、長時間

苦労して学校に通った自分たちに比べて、子供が学校に通いやすくなったことを肯定的にとらえている。また、学校も過疎化が進んでいた奥津町の学校に比べると児童数が多く、親同士の付き合いも幅が広がった。また、高齢者がいた世帯では病院に通いやすくなり、医療への不安が解消された。しかし一方で、故郷を失ったことに対して、住民の心には空虚感が残り、ダムの意義について疑問に思う気持ちがある（次章で述べる）。

生活再建が失敗した事例も聞かれる。移転先で大きな新居を建てたものの跡継ぎがおらず、空き家になっているという話や、移転によって得た多額の補償金を浪費し、破産してしまった住民もいるという。また、移転先の暮らしに溶け込めかった高齢者もいた。

このように、ダムによる立ち退き移転は、様々な試練を伴う複雑なプロセスであった。移転住民の人生や地域社会にとって様々な側面で影響を与えている。

5　移転住民・地域社会の現在と苫田ダムに対する思い

5-1　年月の経過による変化

本章では、住民の移転後の心境や、地域社会の変化に焦点を当てて議論をしていきたい。本節では、個々の家庭の変化や奥津町地域の変化、時代の変化を踏まえつつ、住民が一連の過程に対して語った内容を取り上げていきたい。

ダム建設が始まった 1999（平成 11）年から 25 年近く、ダムが完成した 2005（平成 17）年からは 20 年近くが経過するが、この間に当事者の世代交代が進んだ。移転当時 30～40 代だった世代は激動のダム闘争を経験し、移転先での生活再建に奮闘した。彼らの多くはすでに退職し、穏やかな暮らしを送っている。現在となっては、ダム闘争当時子供だった世代（二世世代）でも退職を迎えた人が多い。一方で、ダム計画判明からダム反対運動に人生をささげてきた世代の多くは既にこの世を去った。

移転当時小学生だった中谷由圭利さん（＝二世世代）は、世代間の認識の違いについて考えを話した。

> 私達の上世代の人たちは、やっぱり私達には計り知れない、いろんな中の事情というか、ごたごたまでよくご存知なので、その分「何くそ」っていうところとか、本当はこうしたかったのにとか、これでいいとは思ってないとか、いろんな思いがあると思う。いろんな表面上のことだけじゃない面を多分たくさん見て知ってる。（中略）私達は知らないからこそ、故郷のことを純粋によく言える節もあるんですよ。最終的に「もう引越しをせにゃいけん、OK と言わないけん」っていうところに至った人たちは、多分計り知れないぐらいの思いをして出てきてる。その思いは多分、私達世代には到底知ることができない[157]。

こうした世代交代がすすむなかで、社会全体の地域社会に対する価値観やライフスタイル（働き方、地域社会の人間関係など）も変化していった。こうした時代の変化のなか、水没地区の住民はダム建設によって急激に選択を迫られ、生活環境を変容させた。多くの住民が子供世代の暮らしを想定して、旧来の農村社会のコミュニティや生活形態を捨て、経済的に豊かで、より都市化された市街地での暮らしを選択した。各世帯がそのような意思決定をする中で、苫田地区からは急激に人口が流出し、コミュニティが解体された。苫田ダムができたことで水没地周辺の地域社会は、本来漸次的であるはずの社会変化を、限られた時間の中で急激に経験することになったのだ。

また、奥津町という自治体自体が、平成の大合併という時代の波に飲み込まれた。ダム完成とほぼ時を同じくして、旧鏡野町、富村、上齋原村との合併によって新鏡野町に生ま

[157] 2023 年 11 月 5 日　中谷由圭利さんへの聞き取りより

れ変わった。ダム容認以降の奥津町では新たな振興計画が描かれ、国道の付け替え工事やダム湖畔の観光施設の整備、奥津温泉周辺の整備が進んだ。合併で鏡野町となって以降も、奥津温泉やダム湖（奥津湖）を資源とした振興が図られている。しかし、付け替え国道（179 号線）の完成と、団体客の減少によって温泉への滞在客は減少している。また、わずかに残った住民の高齢化が進む中、生活の場としてのダム湖周辺の環境整備は難しい局面を迎えている。

旧奥津町職員（現鏡野町職員）の井上陽悦さんは公共事業が盛んだった当時の状況について語る。井上さんが就職した当時はダム建設を受け入れて直後、振興計画が本格的に前進し始めた頃である。オープン当初の役場や道の駅では、イベントが開催されるなど、活気に満ちた様子だったという。

> 僕が入った頃は、奥津町にダムが造られるということになって、いろんな振興計画ができだした頃なんで、役場が綺麗になって、国道も広くなるし、花美人の里とか、道の駅とかそういうのがオープンした頃で、一番明るい頃に僕は入ったいうことになります。その頃は結構道の駅なんかも、イベントを度々やってたり、奥津も役場の方も庁舎を中心にそのふれあい祭りみたいな大きなお祭りを開いたりとかしていました[158]。

しかし、活気はしだいに落ち着き、今となっては湖畔の地域で過疎化への大きな懸念が渦巻く。もちろん、経済が停滞する中で公共事業の勢いが弱まり、地方で過疎化が進む状況は全国的な流れではある。しかし、立ち退き移転によって苫田地区の過疎化が極端な形で進む傍ら、それまで止まっていた公共事業が急激に進んだ奥津町の様相は、いびつで特殊だと感じる。

井上さんは「車がなかったら生きていけない町になってしまった」と話す。ダム湖畔には生活のための商業施設がなく、公共交通も便数が少ないため、鏡野町中心部や津山市まで車で移動しなければ生活ができない。

> 今はなかなか、国全体が不景気、低迷路線をずっと 30 年間ぐらいやってるわけですから、そりゃあ町の公共事業をやっていこうと思っても難しい。それはもう全国的な話です。
>
> それでも本当に車がなかったら生きていけれんような町にはなっちゃいましたね。前のように人が住んでれば、公共バスなんかも走ってたんでしょうけど、今はもう全然そんなんはないし、道は良くなったから津山は近くはなりましたよね。それはもちろん便利になりました。子供のときに津山に買い物に行くっつったら、何か遊

[158] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

園地行くような雰囲気で思ってましたからね。今はなんか当たり前ですけど[159]。

牧野欣功さんはダムをめぐって容認派と討論した当時を思い出しながら、「思っていた通り、過疎になってしまった」と話す。ダムを活用して地域振興を図ろうという容認派の声に、「ダムができたら衰退してしまう」と反論していたという。

町も、旧奥津町ももう衰退してしまうと思よったな、奥のほうの人で、「苫田ダムで活性化して、ボートを浮かべて観光地にする」いうて、ダムに賛成してな。わしは「何よんなら」と言ったこともある。途中にダムを建てたら絶対奥はさびれるんでって。喧嘩のような言い方でちょっとやったこともある。

結果その通りになって、過疎になってしもうた。一番ええ土地を取られてしもうたんじゃけんな。奥の方は寂れて留守の家がいっぱいできてきてな。それからバスや車で通勤するとか、学校が廃校になるとかな。そういうことになったけど、その人らおらんけんな、もう慣れてしもうて、今の状態でええと思っとるかも知らんけど[160]。

ここまで、年月の経過による地域社会の状況の変化についての話をまとめた。苫田ダム闘争があった昭和の終わり～平成にかけての時期は、社会全体でライフスタイルの変化・農村部から都市部への人口流出が顕著な時代である。立ち退き移転によって貧しい農村社会の暮らしから、補償金を得て市街地へ移転するプロセスは、旧来の暮らしから新たな暮らしへの急激な飛躍だといえるかもしれない。

多くの住民の移転が完了してから 30 年、ダムが完成してから 20 年を迎える今、旧奥津町にあった住民や人間関係、行事などの名残は薄れてきている。

現在、ダム闘争の葛藤や悔しさを知る当事者世代の多くが他界し、闘争当時に若かった世代がすでに退職し、穏やかな生活を送っているのが現状だ。

ダム計画決定後の旧奥津町では、公共事業が活発に行われた明るい時期があったが、現在はこうした盛り上がりが収束し、むしろダム周辺地域の過疎化が目立っている。ダム計画と立ち退き移転は、水没地区周辺の過疎化の波を加速させたといえる。

5-2　いまだ問い直される苫田ダム

近年は、武田英夫さん、南條節夫さんら有志（かつて反対運動に関わった運動家ら）が反対運動の資料を収集し、鏡野町に資料を寄贈した。当時を知る住民や関係者の高齢化が

[159] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより
[160] 2022 年 10 月 9 日　牧野欣功さんへの聞き取りより

進むなかで、記憶の継承が課題となっている。有志によって展示会が企画されているが、当事者が生活再建の途上にある中、展示の方向性を定めるのは難しい作業だ。苫田ダムをめぐる歴史の解釈の難しさについて、日下隆春さん（鏡野町教育委員会）は語った。

> 出来て良かったか悪かったのかっていう検証は、もっともっと先の時代にならんとだし、検証はできんと思うんで、そこは僕の代でしてしまうのもおこがましいと思うし。とりあえずは資料を後世に残すことで、将来の人たちがそれを見てどう判断してくれるかということに委ねたいなと思う[161]。

日下さんは膨大な資料の整理をすることや、当事者に配慮しながら展示手法を考えることの難しさを語った。

> できたら展示とか、そういうこともしていきたいとは思うんだけど、膨大な資料があるんでそれを一つ一つ見ていくのが、なかなか時間が取れないということと、どういうふうな形で紹介していこうかと悩ましい。移転をされた人とか、賛成・反対いろんな考え立場の方がまだおられる中で、どういう形で展示をしていこうかなと。そこにやっぱり迷いがある[162]。

学校の教育の場で苫田ダムの歴史を扱うことも難しい問題だ。ダムの仕組みや意義については語ることができても、ダムができた過程を伝えることは難しい。異動が多い学校教育の場では、ダムの歴史を知る職員も限られている。

> 小学校で苫田ダムの見学に行ったりとか、ツアーとかしてる学校があるんです。遠足とかで見学に行ったりもしてるので、奥津小学校とかかな。
> （ダムを見に行くのを授業の中で取り入れてるところもありますね）じゃけど、当時どうだったかいうのは先生は一切知らんけえな、みんな若いし、外から来た先生ばっかりだし。こういった話も聞いたこともない。今現在できてるダムがどういった経過で出来てるかというのは知らん。じゃけえ話せん[163]。

奥津町職員として採用され、合併後の鏡野町で鏡野町史を編纂した日下さんは、旧奥津町史と旧鏡野町史を見比べる中で、両者のダムに対する立場や捉え方の違いを実感した。

> 鏡野町史の編纂事業は僕が書くことになったんだけど、僕はその頃ダムの経緯、

[161] 2023 年 9 月 7 日　日下隆春さんへの聞き取りより
[162] 2023 年 9 月 7 日　日下隆春さんへの聞き取りより
[163] 2023 年 10 月 28 日　大山富敏さんへの聞き取りより

鏡野町側のことも分からなかったので、奥津町史をまとめればいいかなと思ってました。でも調べていくと、同じ隣の町でも立ち位置が全然違った。奥津町の方は「絶対反対」、鏡野町の方は「条件付き OK」という感じで。他の近隣の町村でも立ち位置が違うということに気づいて、奥津町の目線で同じように書くことはできないと考え直した。鏡野町では受け入れ先を考えたり、苫田ダムを作るためいろんな条件を交渉していったという、そういう過程を中心に書かせてもらった。だから奥津町の立場で言えば、隣の町までが自分と同じ考えて進んでくれず、本当に孤立した状態で辛かったんだろうな。それを見ただけでも感じました[164]。

ダムのほとりには久田神社や上野寺が建ち、この地域を見守っているが、神主や住職は地域の将来を案じる。上野寺の井上陽悦さんは、ダム完成後の風景が若い世代の「当たり前」になり、大規模な移転があったダムの歴史への関心が薄れていることを指摘する。

（息子さんたちの世代になると、ダムのことは関心がないですか？）もうないですね。ないっていうか、こういう状態が当たり前で大きくなってるので。500 世帯 3000 人から 4000 人近くの人口が動いて、苫田ダムが完成されたっていう歴史的なことも知らないと思います。ダムの規模としてはそんなに大きくないのに、移転した人口だけだったらとんでもない数を動かしてますからね。多分全国的に指折り入るんじゃないかっていうぐらいの規模の方々が、懐かしの故郷を手放されてるんですよね[165]。

ダムの意義については、住民の間でも疑問の声が上がる。実際、利水は現在十分に活用されない状況が続いている。治水面に関しては、豪雨時に下流の津山市での被害を軽減していることなど、住民からは一定の評価がある。しかし、吉井川流域全体でいえば、上流部に位置する苫田ダムの効果は限られているといわれている。次は、旧奥津町の行政に関わった男性の語りだ。

蓋を開けてみたら、水がいるところは全然ないんですよね。そのとき岡山県とか国に「約束するだけつかえ」「四国へ管をして送れ」言うたんです。いいかえりゃ、「見積もりが甘もうございました」と謝って回れと言ったんよ。あんたらが言うた半分ぐらいしか水が使えていないと。

ダムができて、治水ができるようになってる。その点は大きいと思います。津山の方でもね、これがなかったら多分、この間の大雨だったら、津山は浸かってますね。

[164] 2023 年 9 月 7 日　日下隆春さんへの聞き取りより
[165] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

ダム湖畔に住む井上陽悦さんは、ダム建設が必要だったのか疑問を抱いている。

ダムが必要だったのかどうか、難しい質問ですね。結局、反対をしていても、行政圧力には結局勝てなかったっていう歴史背景でしょうし。

ただ思うのは、本当に必要だったんですかね…。やっぱ時代は変わってしまうと、存在価値が変わってくる。昭和30何年ぐらいには多分、必要価値が高かったんだと思うんですけど、令和の時代になったとき、この苫田ダムが本当に必要とされてるんですか。それはやっぱり疑問が残ってますね[166]。

また、時代の変化や技術の進歩に伴い、ダムの存在価値が問い直されている。

出来たことで国道が改良され、往来は楽になったのはいいんですけど、それ以上に失うものが大きかったかな。懐かしい故郷を手放さなならんと、そこまで見据えたダムだったんですか。必要とされている時代をちゃんと読んで、苫田ダムっていうものを、決断していったんですかっていうのは、（疑問が）残りますね。

ダムの目的が農業用水の確保、治水の調整。それから工業用水の確保とかっていうお題目は、昭和40年ぐらいからのがずっと残ってるんですけど。今はそんなに農業を本気でしなくなってるし、逆に水（の値段）が高くてそんな水使えんわとかっていう話になってるし、だから何のためだったんですかっていう。

治水も確かに備前の方で吉井川が氾濫するから、吉井川の治水の水量制限としては、多分、重要な位置を占めてるんだと思うけど、水力発電もそんなにしてるふうにも聞こえないし。もちろん計画段階でこんだけ時代変化が極端に訪れるなんかは、誰も予測はできんことだとは思うんですけど。振り返ると、本当に必要なものだったのかなと、このふるさとを壊してまで、必要としていたものなのかっていうのは、これからずっと問われるんじゃないかな。答えのない問いかけですね。

やっぱり、川も変わり、山も変わり。人間が作るものっていうのは、自然的な分野の方から見ると本当にそれが正解なのかなとか（思う）。いろんなもんがあると思うんですよ、ダムにしてもそうだし、風力発電でもそうだし。それが合理的に人間の生活環境の中に必要だからっていうのは、もちろん分かってて、それは駄目とは思わないですけど。これから先々見て、本当にそれが要るもんだったのかなと。やっぱり今は思ってるかな[167]。

[166] 2023年9月10日　井上陽悦さんへの聞き取りより
[167] 2023年9月10日　井上陽悦さんへの聞き取りより

ダムに対して、いまだに憤りを忘れられない住民もいる。ある男性は、インタビューの際、「思い出すと腹が立って仕方ないので、話すのが気が重い」と話した。事前にアンケートを送って、当時を思い出してもらっていたところ、「筆が進まない」と男性は話した。「いろいろ思い出して、考えてみていたが、どうも腹が立って・・・」「これだけ時間がたったからとは思ったけど、今更話してもどうにもならないし」と話す。

便利な場所に住むことができるようになり、交通インフラが改善された一方で、故郷の風景や近隣の人々との関わりが失われ、その変化に対する喪失感が残っている。

> ダムが仮にできなくても、多分人口流出は止めれんかったと思うんですよ。これはもう間違いないそうだと思う。これはもう時代の流れで、それは便利なところに若い人がどんどん出ていくだろうし、就職活動も必要だから働くところもなければね。ずっと田んぼと山を守っていくだけが生活資源ではなくなった時代だから。おそらくどんどん家は数を減らしていってしまうのが現実だと思う。（でも）それ苫田ダムとはちょっと違うかなと。お参りに行った家にね、昔の水没してしまった家の写真とかを残してる家が結構ありますね。昔はこうだったんだとかって、川で遊んだよねとかっていう言われる方もまだ未だにいらっしゃるんでね。そういうのがやっぱり懐かしい思い出にはなってる。やっぱり失ったものの方がでかいかな[168]。

特に、歩いて学校に通ったことや、近所の家があった頃の懐かしさを感じている。移転前は自然環境に囲まれ、川や山での遊びがあり、近隣の家との交流があった。移転後、近所の人との顔合わせが減少し、地域社会の中でのコミュニケーションの減少、地域の結びつきや地元の雰囲気の変化に影響を与えている。

> 僕らでも歩いて学校に通っていたときは、やっぱ近所の家がまだあって、帰ったら田んぼとか畑されてて「帰りました！」とかって言うて歩いて行けたのが、今やもう歩いていたって誰 1 人会うことがないような感じですよね。それこそ本当にまだ、川から水路の水が来てるから、川魚が泳ぎょったり、ランドセルを放り投げて捕まえたりそんなこと今もできないですからね。する子もいないんかもしれませんけど、今の子はね。なんでそんなことせにゃいけんのって言って思う子の方が多いかもしれんけど、なんか全然雰囲気変わったなって。近所の人の顔がもう見えなくなってしまったっていうのは、大きいですね[169]。

[168] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより
[169] 2023 年 9 月 10 日　井上陽悦さんへの聞き取りより

5-3　小括

本章では、ダム建設が地域に与えた影響や住民の感情の変化、そして地域社会の課題に焦点を当ててきた。1999 年から始まったダム建設が進み、20 年以上が経過している。移転当時 30～40 代だった世代は定年を迎え、二世世代（当時子供だった世代）は現役世代になった。ダム着工後、公共事業による振興が進み、奥津町は合併により新鏡野町に生まれ変わった。

しかし、公共事業の盛り上がりも今では落ち着き、温泉への滞在客は減少し、残った住民の高齢化が進む中で、ダム湖周辺の集落の維持が難しい状況になっている。かつての豊かな自然環境や、活気のある集落、あたたかみのある地域コミュニティは、ダム建設によってその大部分を解体された。

ダムに対しては未だに疑問を感じ、憤りを忘れることができない住民も多い。実際に、ダムの意義は未だに判然としない状況が続き、ダムの有効な活用は未解決の課題となっている。近年豪雨災害が多発する中、住民の間には治水面での意義を評価する声もあるが、「ダムは役立っている」と強く実感したという声はどこにもない。ダムによって得たもの、失われたもの、いろいろと考えて「失ったものの方が大きいかな」と語った住民の声が胸に刺さった。

苫田ダムの問題がこうしたジレンマを抱える状況の中、苫田ダムの歴史の継承、関連する資料の整理や展示は難しい課題となっているで。ダムの歴史を知る人が高齢化し、歴史の継承の必要は高まっているが、未だ当事者が生活再建の途上にある中で、ダムの政策的な評価や議論をすることは難しい。

6　苫田ダムをめぐる社会的ストーリーから読み取れるもの

6-1　語りから浮かび上がった「苫田ダム闘争」の構図

ここまでは、最初に設定した 4 つの視点（①そもそも、どのような暮らしをしていた人々のところにダム計画がやってきたのか。②ダム事業がいかなる影響を地域社会にもたらしたのか、関係者の家族や人生にどのような意味をもたらしたのか。③移転した人々はどのような経緯で移住先を決め、その後の生活再建の状況はどのようなものだったのか。④現在、地域の当事者がこれら一連の出来事をどのように認識しているのか）に基づいて、ダム開発に翻弄された地元社会の多様な社会的ストーリーを描き出してきた。

本章では、ここまでの総合考察として、ダムをめぐる社会的ストーリーが、地域住民および苫田ダム闘争にかかわった人々、地域社会全体にどのような意味を持つ出来事だったかを考えていきたい。

まず、ここまで取り上げた語りやここまでの議論を総括し、「苫田ダム闘争の構図」をまとめたい。ここでも、3 章において用いた 3 つの時代区分を用いる。

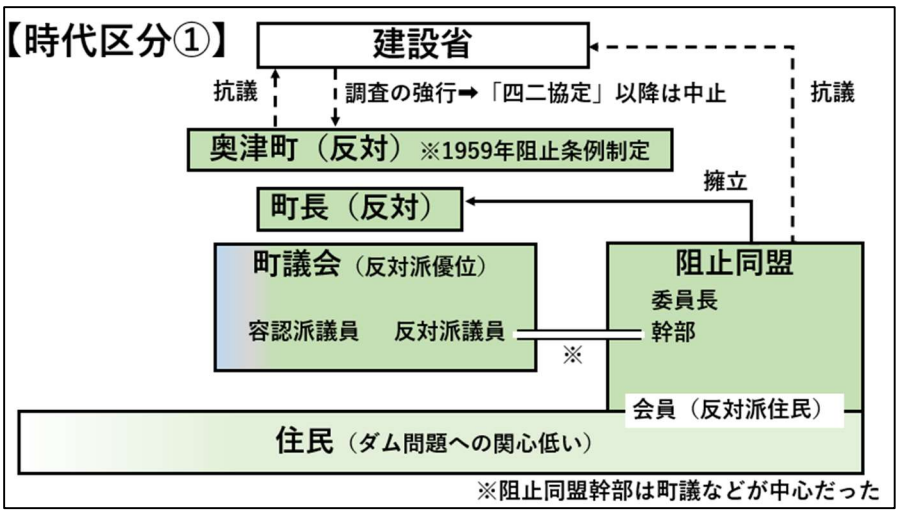

図 3　1957（昭和 32）年～第 1 期長野県政　の時期の構図（筆者作成）

時代区分①はダム計画が浮上した 1957（昭和 32）年～第 1 期長野県政 の約 15 年間である。苫田ダム反対運動は、建設省のボーリング調査にあたって一時激化するが、四二協定書が結ばれて以降沈静化した。当時の状況については、「お祭りのような気分で見ていた」「当時はまさかできると思っていなかった」という住民の声がある。当時はダムを積極的に容認する立場はなく、町政が「苫田ダム絶対阻止」の町是を掲げる中、町内は「穏健な反対派」の一枚岩だったといえる。

この当時、ダム闘争は膠着状態だったが、この間に都市部への若者の流出が進み、全国

的には経済成長が進んだ。この期間は貧しい農村の暮らしから、現金収入を前提とした現代的生活へというライフスタイルの過渡期に重なっているといえる。

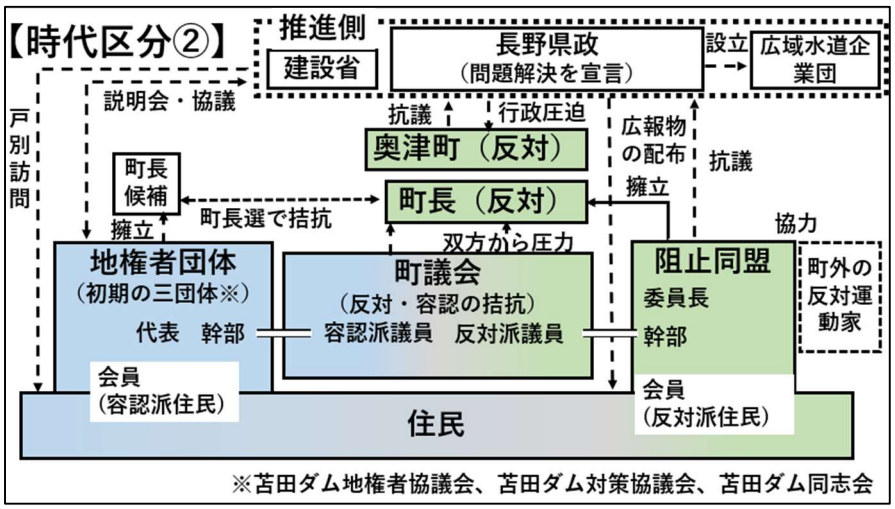

図 4　ダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年　の構図（筆者作成）

時代区分②はダム計画を強硬に推し進めた第二期長野県政～森元町長がダム容認に傾いた 1990（平成 2）年　の約 15 年間である。長野県知事が前面に出て苫田ダム問題の解決を唱えたことにより、苫田ダム闘争は本格化していった。

県は、ダム建設容認を呼び掛ける広報物を製作して各戸に配布し、建設省の工事事務所は住民への戸別訪問を行って住民の切り崩しにかかった。計画が判明してから 15 年が経過したころ、阻止同盟に批判的だった住民が地権者団体を設立すると、苫田ダム容認の動きが顕在化し始める。ダム問題が解決せず、将来が見通せない状況を打開しようと、推進側と対話し、条件次第では移転を受け入れることを表明した。1985（昭和 60）年時点で 299 戸がいずれかの地権者団体に参加する結果となった。

こうした動きに対して、まだ反対の色が強かった地域社会では批判的な目が向けられた。容認派住民とその家族は、近隣住民からの誹謗中傷を受けるなど、精神的被害を負うこともあった。反対派への同調圧力は強く、容認の立場を表明しづらい空気があった。

住民によって苫田ダム闘争の経験には濃淡があり、特に二世世代は強い摩擦を感じていないことが多いが、ダムをめぐって地域社会や親族内の人間関係に亀裂が生じ、世帯主は意思決定に悩まされた。阻止同盟での集会や陳情などの活動も活発化し、住民は寸暇を惜しんでこれらの活動に参加した。反対派住民の根底には、郷土愛があるのはもちろんのこと、周囲への配慮や、地域の一員としての義務感からこうした活動に参加した一面もある。

この当時、町議会における対立はとりわけ鮮明で、この頃は反対派議員と容認派議員が拮抗した。阻止同盟から擁立された歴代町長は反対の立場であったが、長野県政の行政圧

迫に悩まされた。町の財政はその多くを国や県からの補助金に頼っていたため、それらを意図的に停止させられることで、町政が滞ることになった。町政の停滞に対して、町議会では不満が高まり、苫田ダム問題早期解決をとなえる容認派議員は、町長への批判を強めた。

岡田幹夫氏、坂手可甫氏、日笠大二氏の 3 人の町長は、反対派と容認派の板挟みのなかで相次いで辞任を余儀なくされた。こうした町政の混乱は住民にも強く印象づき、住民はダム建設が現実味を帯びていくのを感じた。

またこの頃には、県当局の強硬策に広く関心が向けられるようになった。主に県南地域の有識者らを中心とした市民団体の活動も活発化し、阻止同盟の活動と結びつく形で反対運動を展開した。県内外の有識者の活動とも結びつき、シンポジウムや勉強会が開催された。こうした流れは、苫田ダムを町内だけの問題としてとらえるのではなく、町内外・県内外の幅広いアクターを巻き込みながら、幅広い視点で問い直す試みだったといえる。

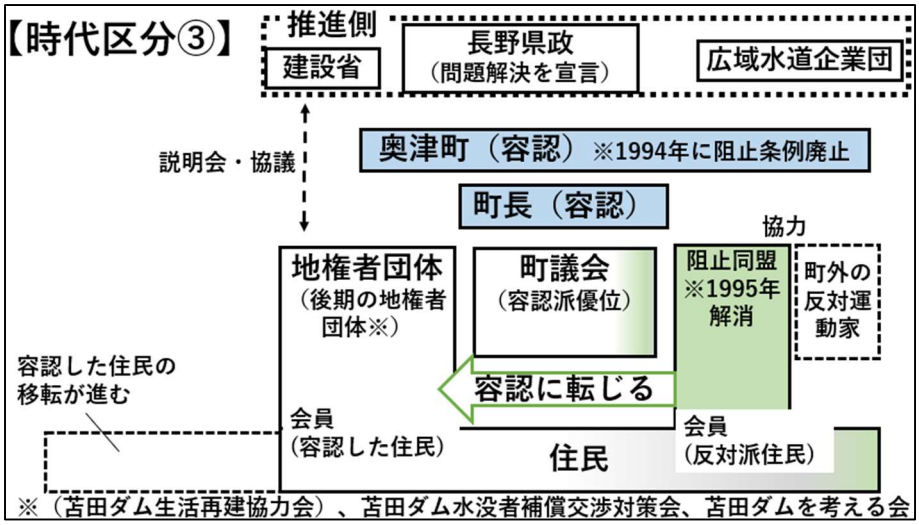

図 5　町政転換後、反対派住民の移転が本格したころの構図（筆者作成）

時代区分③は町政転換後、反対派住民の移転が本格したころを指す。具体的には、森元町長がダム容認の立場を表明した 1990（平成 2）年から、最後の地権者が移転を完了する 2003（平成 15）年を指す。

この時期には早期に移転した住民の移転が進み、地域社会が明らかに荒廃していく。反対派だった住民も阻止同盟を脱退し、後期に設立された地権者団体に参加して移転を始める。反対運動を共にしてきた住民同士では、容認に転じる際の後ろめたさから疎遠になることもあり、こうした状況に寂しさを感じる住民もいた。

6-2　苫田ダム闘争をめぐる社会的ストーリーが持つ意味：様々な葛藤と苦痛の経験

ここからは、苫田ダム闘争をめぐる社会的ストーリーが、そこにかかわった人々にとってどんな意味を持つ出来事だったかを考えていきたい。

まず、移転に至るまの過程は、住民にとって様々な葛藤や苦痛の経験だったといえる。苫田ダム闘争に地域が揺れる中で、家族の将来に不安を抱いたり、反対運動に振り回される日々に疑問を感じたり、移転を容認する住民に憤りを感じたりなど、住民は様々な葛藤を抱いた。早期に移転を受け入れた容認派の住民は、親戚や近隣住民から非難の声を浴び、悔しい思いをすることもあった。批判の中でも自分たちの信念を貫くと決意し、生活再建に向けて建設省との補償交渉に臨んだという声もある。移転容認は、生まれ育った故郷との決別という意味と、次世代に向けて新たな一歩を歩みだすという意味を含んだ。都市部で生活を送っている子供の将来に配慮して、故郷から遠く離れた県南地域や県外へ移転した住民もいる。

建設省工事事務所所長、宮本博司さんのエピソードは象徴的なものだ。地権者団体の幹部仲西忠雄氏は、津山市のイベントで広報活動をしていた宮本氏に対し「わしらは辛い思いをして出ているのに、楽しげにティッシュを配るとは何事か」と怒りをあらわにした。住民はダム計画が未解決だった間、生活設計を立てられない不安の中で暮らしてきた。将来の世代のために現実的な決断を下さねばならない、そうした複雑な思いが噴出した瞬間だったのだろう。「銭次第」といえども、移転者の心のうちは、補償金のみで全て片付けられるほど単純なものでは決してなかった。

一方で、反対派の住民は故郷の将来を信じ、多くの時間と労力を反対運動に費やしてきた。県庁に抗議に出向いた際や、知事の奥津町訪問に際して県知事や国・県の職員と対峙し、攻防する中で怒りや悔しさを感じることもしばしばであった。また、町内では多くの住民が移転を受け入れ、故郷が荒廃していくのを目にし、悔しく思うこともあった。気づけば町内の半数以上が移転を決断し、行政圧迫により町政が立ち行かない状況の中、森元町長がダムを容認する考えに転じるまでに追い込まれた。こうした流れの中で、もはや苫田ダムが中止されることは見通せなくなった。先祖伝来の地を守りたいという素朴な思いははかなくも、断念せざるを得ない状況に追い込まれた。後半に移転した住民は、町民の多数が移転を受け入れ、家の取り壊しが進んでいく中で、故郷でもう暮らしていけないことを痛感せねばならなかった。土地が荒廃し、庭木などを奪う空き巣にも悩まされた。

ここまでの様々な苦労は、それぞれ住民が歩むライフステージにおける重大なイベントに重なっていることも留意しておく必要があるだろう。家業の継続、嫁入り先での苦労、娘の結婚など、それぞれにとって重要で、悩みが生じ、大きな労力を割くライフイベントに苫田ダム闘争が重なっているのだ。

このように、すべての移転住民がそれぞれの人生のライフイベントを乗り越えながら、同時にダムの影響を受ける人生を歩んできた。様々な葛藤や苦痛を超え、当初反対してい

た住民も含め、すべての住民が最終的に移転を決断した。総じて地域住民は、周囲の住民への配慮や、次世代にわたる生活設計、経済的利益、地域社会の荒廃、生活環境への懸念、愛郷の念、先祖伝来の地を守る責任感、家業の継続など、さまざまな要素について悩み、葛藤を重ねながら移転の決断に至ったといえる。

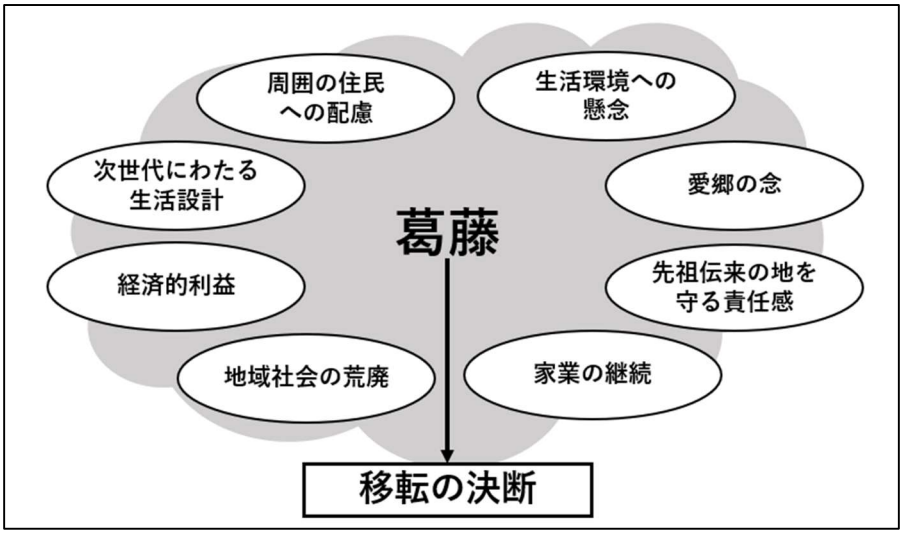

図 6　住民の葛藤と移転の決断（筆者作成）

歴代奥津町長や、行政の内部にいた人々も住民とは異なる立場で苦悩してきた。奥津町発足以降、「苫田ダム絶対阻止」の町是のもと、7 代目の森元町長まで反対派の町長が続いてきた。しかし、行政圧迫により町内の事業が立ち行かない状況の中、町議会では容認派議員からの圧迫が次第に強まっていった。町長は長野県知事との対話に臨んだり、移転住民の生活再建の窓口として「ダム対策室」を設けたりなど、柔軟な姿勢を打ち出すことで事態の打開を狙ったが、今度は反対に反対派からの批判を招くことになった。奥津町長は容認派・反対派の板挟みにあい、双方からの批判に耐えなければならない状況だった。議会では審議拒否や不信任決議が続き、町の振興計画をまともに決議できない状況になっていた。

こうした状況の中、行政職員もまた板挟みの状況に苦慮した。選挙の際には反対派候補と容認派候補が拮抗するなか、機動隊を控えさせるほど選挙会場の緊張感は高まっていた。事実上移転した住民の選挙権を停止したことが原因で怒りをぶつけられたこともあった。議会でも緊張感が高まる中、事務局の職員は反対派議員、容認派議員双方から町長に対しての質問文を考えさせられ、対応に苦慮したという話もあった。

建設主体である建設省の工事事務所職員もまた、緊張感漂う苫田ダムへの配属に肝を冷やし、反対派住民からの激しい反発にも直面した。また職員は、容認派の住民からも、ダム建設に対する怒りや疑問の感情を投げかけられてきた。奥津町民のこうした表情は深く胸に突き刺さり、忘れられない経験となっている。

総じて、苫田ダム闘争は住民に、将来への不安、地域内の混乱、移転決断などを様々な

葛藤や苦痛を強いることになるものだった。それぞれの住民のライフステージにダム闘争が組み込まれ、ダム以外のライフイベントとダム闘争両方に翻弄されることになった。苫田ダム闘争は、行政職員や町長など住民以外の立場の人物にも大きな影響を与える出来事だったといえる。

6-3　生活再建についての社会的ストーリーが持つ意味：移転がもたらした影響と人々のたくましさ、重層的なイメージと思い・考えの関係性

移転を決定した後も、移転者をさまざまな選択や決断が待っていた。移転先の決定、土地の造成や家の建設に際する手続き、墓の移転、新天地での人付き合いなど、乗り越えるべき壁がいくつもあった。住民たちは、まさにこうした壁を家族とともに乗り越えてきたのだ。ここからは、生活再建の過程における社会的ストーリーが、地域住民およびかかわった人々、地域社会全体にどのような意味を持つかを考えていきたい。この過程においては、住民の様々な苦労と努力の軌跡が読み取れる。いいかえれば、移転による生活への影響とそれに適応する人々のたくましさが表出する過程だといえる。

移転を決断した住民が第一に直面する課題が、移転先の選定である。移転先の選定には県や町の関与はなく、住民がそれぞれの置かれた状況に応じて検討する必要があった。故郷への愛着からダム湖畔を選びたいという気持ち、利便性を考えて近隣の津山市や旧鏡野町がよいだろうという考え、同郷出身者が集まる団地を選びたいという気持ちなど、住民には様々な心境があったことが分かる。地域によっては移転住民に対して排他的な考えもあった時代、親戚などのつてをたどり、円滑に溶け込めるよう配慮する必要もあった。また、岡山県南や都市部に生活の拠点をおく子供世代に配慮し、故郷を遠く離れて県南地域や都市に移転した親世代もいる。

ひとたび土地が決まっても、新居への入居後に円満な関係を築いていくのには、数々の苦労と長い時間が必要だった。農業用水の整備や講組への参加をめぐって地域住民との軋轢が生じたり、地域の行事などの際に白い目で見られたりといった経験をすることがあり、辛抱はしばらく続いた。

住居や土地を手放すことで住民は補償金を得たが、節税のために不動産業者から新居の建設費用に充てることが勧められた。そのため、鏡野町にはダム移転者の立派な住居が立ち並ぶことになり、「ダム御殿」と呼ばれることもあった。在来の住民が好ましく思わないこともあり、後ろ指をさされることもあった。こうした家の中には、高齢者のみが暮らしていたり、既に空き家となって売り渡したりといったものもある。子供世代にわたって家を引き継いでいくという前提が、時代の変化によって崩れたこと、高額な固定資産税などの維持費の負担がかさんだことが要因にある。

こうした苦労の中でも、住民は積極的に地域の行事に参加し、新たなコミュニティに溶け込む努力をしてきた。特に女性が「旦那は仕事ばかりなので、地域の人間関係は基本的

に私が」と話していたのが印象的だった。小学生の子供がいる世帯だと、PTA を通して移転先での交友が広がったという。また、気の置けない間柄の住民がいることが、大きな心の支えになっているようだった。「となりの〇〇さんに救われた」というような話は、複数の住民からきかれた。

このように、移転した住民の多くは苦労と努力の過程を経てきた。多くの住民が移転先で 20 年以上を迎え、移転先のコミュニティに溶け込み、第二の人生を確立しているように映る。物心がついたころから苫田ダム闘争に翻弄され、移転後は生活再建に奮闘してきた住民は、ようやく平穏な生活を手にすることができたと安堵する。

ここまで述べた事柄から、移転住民の多くが移転後の人生、あるいは苫田ダムが建設されたことに何らかの意味を見出し、移転の決断や移転後の人生を肯定的にとらえていることを指摘したい。とくによく挙がる話が、移転前に比べて利便性が向上し、生活しやすくなったことだ。子供がいた世帯の親世代は、長時間苦労して学校に通った自分たちに比べて、子供が学校に通いやすくなったことを肯定的にとらえる。また、学校も過疎化が進んでいた奥津町の学校に比べると児童数が多く、親同士の付き合いも幅が広がった。また、高齢者がいた世帯では病院に通いやすくなり、不安が解消された。

しかし一方で、生活再建が失敗した事例も聞かれる。これらはあくまで本人の話ではないが、移転先で大きな新居を建てたものの跡継ぎがおらず、空き家になっているという話や、移転によって得た多額の補償金を浪費し、破産してしまった住民もいるという。また、移転当時高齢だった住民のなかには（既に他界され、本人に話を聞くことはできないが）、移転先の暮らしに溶け込み切れなかった人もいた。たまにダムのほとりにある上野寺を訪れて、「まわりのものはよく分からないし・・・」と愚痴をこぼしていたという話や、認知症の高齢者が故郷に戻ろうとし、近所を徘徊していたという話があった。

また、移転に対して肯定的にとらえる住民が多い一方で、苫田ダムがもたらした地域社会への影響や（自然環境の改変、地域社会の荒廃）、苫田ダムそのものの意義（治水上の効果、利水面での必要性）については疑問を投げかける住民も多い。苫田ダムが地域社会にもたらした影響やその意義については次節で詳しく議論し、問いなおしていきたい。

さらに、ここまでの議論に補足して、移転住民の故郷に対するイメージと移転前後に表出する感情や考えの関係性について考えてみたい。2 章では在りし日の故郷について様々な語りを取り上げてきたが、一人の住民の中にも様々な故郷へのイメージがあるといえる。ポジティブなものとしては例として、豊かな自然と風習、密な人間関係、先祖伝来の地への思いがあり、移転の決断に際して「故郷を離れたくない」という思いや、移転の日に昔を懐かしむ思いや、ダム湛水時にあふれ出た涙に繋がる。反対にネガティブなイメージとしては、不便な生活環境や貧しい暮らし、将来への懸念などが考えられ、これらは合理的に移転を決断する際や、移転後に自分を納得させる際の根拠になっている。住民によってイメージの偏り、表出する感情や考えの偏り、ムラはあるものの、こうした構図はすべての住民に共通しているものと考えられる。すなわち、住民の故郷への思いや意思決定、

（反対か容認かの）立場というものは重層的で複雑なものであるといえる。

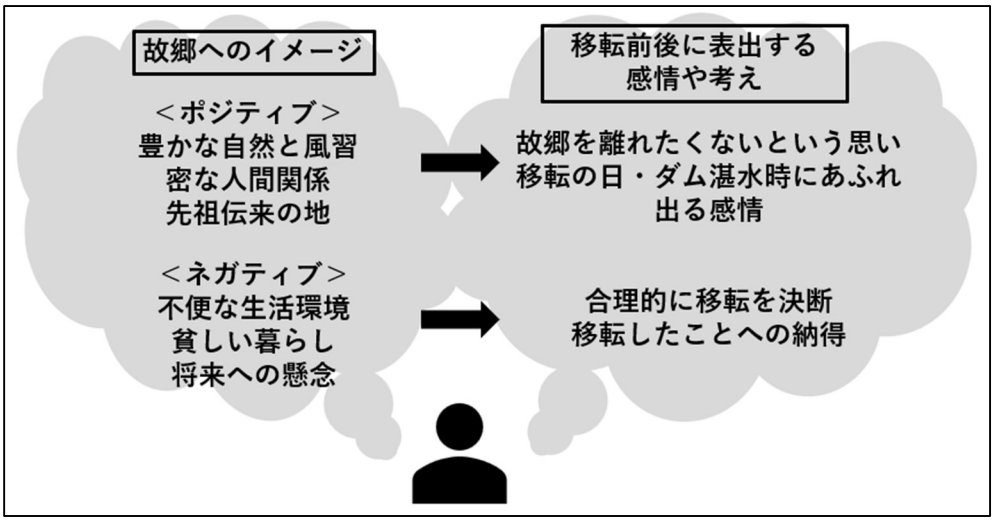

図 7　住民が故郷に対するイメージと移転前後に表出する感情や考え（筆者作成）

6-4　住民視点からとらえた苫田ダムの歴史が示唆するもの：経済的合理性では説明できない「故郷」

近年豪雨が相次ぐ中、下流の自治体では苫田ダムの恩恵を実感する声もあるが、苫田ダムの必要性については疑問の声も残る。利水面において十分に活用されていないことが指摘され、治水面においても、その効果は吉井川水系全域の一部の地域にとどまるといわれている。5 章でも議論してきたが、苫田ダムがもたらした影響やその意義については、住民からも疑問の声がある。ここまで描き出してきた苫田ダムの歴史が示唆するものは何だろうか。最後に、苫田ダム闘争及び苫田ダム建設が地域社会にとってどのような意味を持つ出来事だったかを改めて考え、議論を締めくくりたい。

ほとんどの住民が町外に移転した奥津町苫田地区では、数軒のみで構成される零細な集落と水没地区から移転された久田神社が残り、新たに観光施設として「水の郷」が建てられた。故郷に残った住民には郷土への強い愛着があり、久田神社の祭りやとんど祭りなど代々受け継がれた風習を続けながら集落を維持してきた。しかし、こうした世帯も世代が変わり、地元に暮らすことを選んだ人々の息子・娘世代が暮らしているが、彼らもすでに高齢である。集落は、自治の継続が危ぶまれる限界集落になっている。

久田神社の氏子を中心とした旧来のコミュニティは、現在に至るまで維持されてきたが、こちらも在りし日の故郷を知る人々の高齢化が進む中、若い世代への継承が危ぶまれている。こうした状況の中、誰が故郷の記憶や苫田ダムの歴史を継承し、伝えていくことができるのだろうか。

年月の経過により、苫田ダム闘争の歴史を知る世代の高齢化が進む中、その歴史を継承

し、苫田ダムを問い直すことを訴える人々がいる。岡山県南部の市民を中心に結成された市民団体のメンバーであった、武田英夫氏や南條節夫氏、鷲尾裕[170]氏らだ。市民団体の元メンバー数人は、反対運動に関係する資料を収集・整理し、鏡野町に寄贈する取り組みをしてきた。

当事者である住民の中にも、苫田ダム闘争について、未だ踏ん切りがつかないという声がある。地方自治をないがしろにする県の姿勢や、半ば諦めるように移転を受け入れたこと、未だにダムの意義が判然としないことなどに対し、未だに憤りや悔しさをにじませる住民が数多くいる。

本研究において、苫田ダムの政策的な問題点について詳しく踏み込むことは本旨と逸れるが、苫田ダムが地方自治の観点で矛盾をはらむプロセスのなかで出来上がったという事実は、看過できない点として指摘しておきたい。奥津町においては、補助金頼みで 3 割自治と言われる地方自治体の現実のもと、県当局による強硬策によって、町行政がダムを受け入れざるを得ない状況に追い込まれた。とくに、県当局によって繰り返された補助金の停止は、地方自治の原則をないがしろにするものと言わざるを得ない。

一方で、苫田ダムの建設および、奥津町がダムを受け入れたプロセスは、戦後日本社会における時代の要請に対応したものともいえる。すなわち、高度経済成長期以降の都市部への若者の流出、農村社会の少子高齢化という全国的な流れの中で、奥津町苫田地区の豊かな自然環境と密な人間関係に支えられた自給自足の暮らしは、経済的合理性のもとでしだいに変化していかざるを得なかっただろう。こうした局面において苫田ダムの計画が現れたことで、水没地区の住民は、大きな決断と生活環境の急激な変化を強いられることになった。

すなわち、経済成長のなかで苫田ダム事業が生まれ、経済的に貧しい暮らしを送っていた住民は、（意図したものではなく、結果的にそうなっている面が強いものであるが）経済的観点から移転に価値を見出し（た側面もあり、ある意味で）経済的な豊かさと便利な生活環境を獲得することになった。

しかし、これは推進側によって地元社会が「ダムを受け入れざるを得ない」状況に追い込まれた結果の出来事であり、地元住民による自由で主体的な意思決定があったとは到底言えない。また、最終局面まで移転を受け入れず、故郷での暮らしにこだわり続けた住民もいる。

また、現在もなお久田神社の氏子のつながりが残り、地域住民でひしめき合った久田神社の祭りの記憶は住民の心に深く刻み込まれている。その他にも、川で遊んだ記憶やその他故郷の印象的な場所が人々の記憶のなかで生き続け、未だに山の手入れや地元の川に足を運ぶ住民もいる。また、若い世代にも失われた故郷への「執着」が残り、地域振興に携

[170] 鷲尾裕氏は、1987 年に結成された「苫田ダムに反対する岡山県民の会」の結成に携わり、今日まで事務局長を務めている。また、自治体で働く立場から、長野知事の「行政圧迫」に厳しく抗議してきた。

わる動機となっている一面もある。住民の「故郷」に関する語りからは、経済的合理性では説明できない「故郷への思い」が垣間見える。

40 人近くの住民にお話をきいて印象的だったのが、多くの方が当時のことを協力的に話してくださったことだ。後期に移転した阻止派の住民はさることながら、学生時代に早期移転した住民のなかにも、幼少期・少年期に過ごした故郷の景色や田舎での遊びについて懐かしそうに語られる方が多かった。故郷に対するイメージとして、豊かな自然やそこでの遊び、かつての風習、久田神社の祭りなどが代表的だ。とくに川で魚をつかみ取ったり、泳いで遊んだりという話題は多く聞かれ、現在に至っても魚釣りを趣味にしている住民も何人かいた。また、久田神社の祭りについても語られることが多かった。娯楽がない田舎の集落で、年に一度境内に露店や芝居小屋が並び、人がひしめき合う光景は大変印象的だったようだ。

苫田ダムと奥津町がおかれた状況は特殊であるが、そこには「故郷」という普遍的なテーマが散りばめられている。苫田ダム闘争を経験した人々の社会的ストーリーからは、「私たちにとって故郷は何であるか」「私たちの望ましい暮らしとは何であるか」という問題が問いかけられているように感じる。本研究を通して取り上げた人々の語りが、私たちにとっての故郷や生き方を再考するきっかけになり、地方自治のあり方、ひいては私たちの暮らしのあり方に目を向けるきっかけになることを願う。

7　結論

本研究では、ダム建設と立ち退き移転に揺るがされた、地域社会と人の営みを描き出してきた。問題が長期化し、多くの水没戸数を伴ったダム建設の事例として、苫田ダムの事例を取り上げ、被害の発生メカニズムや社会的影響の構造を理解する被害構造論を念頭に、当事者の主観的経験や視点に基づく多様な社会的ストーリーを把握することを試みた。すなわち、語り手が語る個人的で主観的な内容を歴史の各断面を示すものとして捉え、複数のストーリーをつなぎ合わせて歴史を立体的に理解しようと試みた。浜本（2001, 2015）においては、移転前と移転後の期間を分け、それぞれの期間における影響として、移転前では地域内の人間関係悪化や対立が、移転後では生活基盤確立や新コミュニティへの適応などを挙げている。本研究ではこれらの要点を踏まえつつ、4 つの視点（①そもそも、どのような暮らしをしていた人々のところにダム計画がやってきたのか。②ダム事業がいかなる影響を地域社会にもたらしたのか、関係者の家族や人生にどのような意味をもたらしたのか。③移転した人々はどのような経緯で移住先を決め、その後の生活再建の状況はどのようなものだったのか。④現在、地域の当事者がこれら一連の出来事をどのように認識しているのか）から、苫田ダム建設に伴う地域社会への影響を多面的にとらえた。

まず第 2 章では①について議論した。苫田地区においては、厳しい状況の中で地域社会が助け合い、自然との調和を大切にした生活様式が根付いていた。奥津町苫田地区の生活に関する語りからは、豊かな自然環境、行事や風習の重要性、農村の生活様式、地域社会の助け合い、住民交流と行事、不便な生活環境といった要素が捉えられた。

続いて、②については第 3 章で議論した。「苫田ダム闘争」においては、ダム建設に関する容認・反対の対立が様々な形で表れ、住民たちの心にはジレンマが生じていることが分かった。先祖伝来の地を守りたいという郷土愛からダム建設に反対の声を上げてきた住民の心中には、ダムを推進する県当局に対して感じた悔しさや疑念がある。また、反対運動に参加した住民の心の内では、反対運動の動向や周囲への配慮、周囲からのプレッシャーが、活動への参加動機や移転に関する意思決定に影響していた。一方で容認派の住民は、生活環境の向上を求めてダム建設を容認する立場を取ったが、反対派との間に摩擦を生むことになった。さらには、ダム容認表明者への嫌がらせや不買運動が相次ぐなど、緊張感が高まった。こうした状況の中で、奥津町長は県政と阻止同盟との間で板挟みになり苦悩することになった。町長 3 人が立て続けに辞任した背景には、複雑な力関係が影響していた。

③については第 4 章で議論し、移転は単なる物理的な場所の変化だけでなく、家族や地域社会との結びつきや葛藤、異なる世代の視点の違いなど、多面的で複雑なプロセスであることが分かった。早期の移転者は、家族や地元状況を考慮し合理的な決断を下した。一部の住民は周囲と協力し、同時期の移転を検討した。時間経過とともに多くの住民が町政の行き詰まりを感じ、反対の意を翻して移転を検討した。生活の不便さが移転を迫ったが、

故郷を離れることに悔しさや寂しさを感じている。移転手続きには苦労が伴い、学校や病院、生活の便利さが移転先の決定に影響した。移転者同士が同じ部落や土地に集まることもあった。移転後の生活は成功や失敗があり、地域社会の反応も様々だった。一部の移転者が地元住民から暖かく迎えられる一方で、ネガティブなイメージに戸惑う移転者もいた。

④に関しては第 5 章でまとめている。ダムに対しては疑問や憤りを忘れない住民もおり、ダム建設により失われたものへの悲しみを語っていることが明らかとなった。彼らは便利な環境に移り住むことへの恩恵を感じ、ダムの必要性はある程度理解しつつも、故郷の風景やコミュニティへの喪失感を抱いている。

つづく第 6 章ではここまでの議論を総括して横断的に議論を行った。まず、第 5 章までたどってきた苫田ダムの歴史を総括し、苫田ダム闘争の構図を立体的に示した。すなわち、苫田ダムの歴史を 3 つの歴史区分に分け、それぞれの期間における各アクターの立場や、住民の意識や考えを示した。ここからは、インタビュー調査を通して反対運動に参加した住民の複雑な心境、議会や町長の混乱の様子、反対・容認各派の勢いなどが明らかとなり、当時の構図を立体的に把握した。

続けて、第 6 章の中盤では、苫田ダムを巡る社会的ストーリーに見出されるものが何であるかを考えた。まず、阻止闘争の過程においては、住民の葛藤の苦痛の経験が特徴づけられ、反対・容認を問わずすべての住民が苦痛や葛藤を乗り越えて移転の決断に至ったといえる。また、町政内部や推進側の立場にいた職員も、住民とは異なる特有の経験をし、人生の中で重要な経験となっている。そして、生活再建の過程における社会的ストーリーからは、移転住民が直面する様々な困難や、前向きに生活再建に尽力する人々の生き様が読み取れる。

さらに、移転前後に表出する住民の思いや考えについて、人々が故郷にいだくイメージとの関係性について考えた。すなわち、故郷に対するポジティブなイメージが望郷の念を抱かせる一方で、移転の決断や移転後の人生について納得させる際に、住民は故郷についてのネガティブなイメージを想起していることが想定された。

第 6 章の終盤では、筆者がこの研究を通して考えたこと、すなわち苫田ダムに関する数々の社会的ストーリーが示唆することを総括した。苫田ダムの建設が企図され、水没地区の住民が移転を受け入れていったプロセスは、地方自治や民主主義の観点から矛盾をはらむものであった一方で、経済発展と都市化という戦後日本社会の変化に対応したものだったといえる。一方で、豊かな自然や人間関係に特徴づけられる故郷の暮らしは、人々の心の中に生き続けている。苫田ダム闘争を経験した人々の社会的ストーリーからは、「私たちにとって故郷は何であるか」「私たちの望ましい暮らしとは何であるか」という問題が問いかけられている。

参考文献

岡山県土木部河川開発課, 1999,『苫田ダム関係資料集』.

岡山県土木部河川開発室, 1979,『ダム建設関係組織規程』.

苫田ダム記念誌編纂委員会, 1997,『ふるさと―苫田ダム記念誌』奥津町.

奥田道大, 1980,「地域政策と地域社会―『都市と水資源』問題を手がかりとして」,季刊地域, 3 ：10-14,145.

奥津町, 2005,『奥津町史 通史編 下巻』

帯谷博明, 2004,『ダム建設をめぐる環境運動と地域再生』昭和堂.

鏡野町, 2009,『鏡野町史』

梶田孝道, 1988,『テクノクラシーと社会運動―対抗的相補性の社会学』東京大学出版会.

古林勇二, 2007,「天声新語－たにあいばし」　『朝日新聞』　2007 年（平成 19）年 2 月 19 日.

坂口大史・北川啓介・酒井文也, 2015,「徳山ダム建設による居住地移転期における旧徳山村

民の想いの変容」, 日本建築学会技術報告集, 21（49）：1211-1216.

ストップ ザ 苫田ダムの会, 1988,『苫田ダム阻止・三十年 心やさしい奥津の人の略年譜』.

高崎哲郎, 2006,『湖水を拓く 日本のダム建設史』鹿島出版会.

苫田ダム阻止写真集刊行委員会, 1993,『ダムとたたかう町』手帖舎.

苫田ダムに反対する岡山県民の会, 1988,『苫田ダム、この問われるもの―県民世論で白紙撤回を―』.

長野士郎, 2014,『岡山県政回顧』山陽新聞社.

浜本篤史, 2001,「公共事業見直しと立ち退き移転者の精神的被害：岐阜県・徳山ダム計画の事例より」, 環境社会学研究, 7：174-189.-

浜本篤史, 2011,『御母衣ダムと荘白川地方の 50 年』まつお出版.

浜本篤史, 2014,『発電ダムが建設された時代』新泉社.

浜本篤史, 2015,「戦後日本におけるダム事業の社会的影響モデル―被害構造論からの応用－」, 環境社会学研究, 21：5-21.

平方浩介, 2022,『日本一のムダ 徳山ダムの話』燦葉出版社.

舩橋晴俊・長谷川公一・畠中宗一・勝田晴美, 1985,『新幹線公害―高速文明の社会問題』有斐閣.

森滝健一郎, 1989,「苫田ダムに関わる水需給の諸問題」,『岡山大学文学部紀要』11：71-119.

和賀正樹, 2001,『ダムで沈む村を歩く』はる書房.

NHK 総合ニュース「“苫田ダム建設反対”住民たちの運動資料が鏡野町へ」

「国土交通省ホームページ　苫田ダムへようこそ」

https://www.cgr.mlit.go.jp/tomata/aboutdam2.html　閲覧日：2024 年 1 月 4 日.

「人権侵害がらみ“ダムの町”　脅しや不買運動 協力金 100 万円で対立激化」, 読売新聞, 昭和 54 年 3 月 17 日.

謝辞

本研究を進めるにあたり、たくさんの方にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。指導教官の宮内泰介教授には、研究の構想から本稿の推敲まで、多大なご指導を賜りました。また、笹岡正俊教授には論文指導ゼミの場で毎回貴重なご意見をいただきました。そして、地域科学研究室の学生の皆さんには、意見や励ましの言葉をいただき、大変心強かったです。

そして、調査にご協力いただいた移転者の皆様および、関係者の皆様には大変お世話になりました。皆様のお話を聞き、苫田ダムが地域社会および地域住民に計り知れない影響をもたらしたことが痛切に感じられました。なかでも、ダムをめぐって将来が見通せない状況が続き、地域社会に緊張や摩擦が生じたこと、移転に際して皆様が様々なご苦労を経験されたことなどが、その最たるもののように思われます。

一方で、豊かな自然とともにあった故郷の暮らしについて、多くの方々が愛着を持っておられることや、反対運動の裏側には和気あいあいとした地域社会の人の輪があったことも印象的でした。こうしたお話を聞いて、奥津町史の新たな一面に触れることができました。

また、 皆様が歩まれた人生の道のりをお聞きしたことは、私自身にとって非常に学びになりました。人生の先輩である皆様の語りから、苦難とともにある人生というものを考えさせられました。また、旧奥津町・鏡野町の地域社会の状況についてお話を聞いて、「少子高齢化と過疎化の時代に、地域社会がどうあるべきか」という普遍的なテーマを考えさせられました。

いずれにしましても、苫田ダムの歴史は、今を生きる人々に広く知ってもらい、多様な側面から考え続けてもらう価値あるテーマだと感じております。今回の研究を、なるべく多くの方々に読んでいただき、少しでも長く後世に残していけるよう、私自身努力してまいります。

皆様のご協力なくしては、このようにこの修士論文を完成させることは出来ませんでした。皆様に心より感謝申し上げます。

令和 6 年 3 月 31 日　頃安悠希